

2021年40号

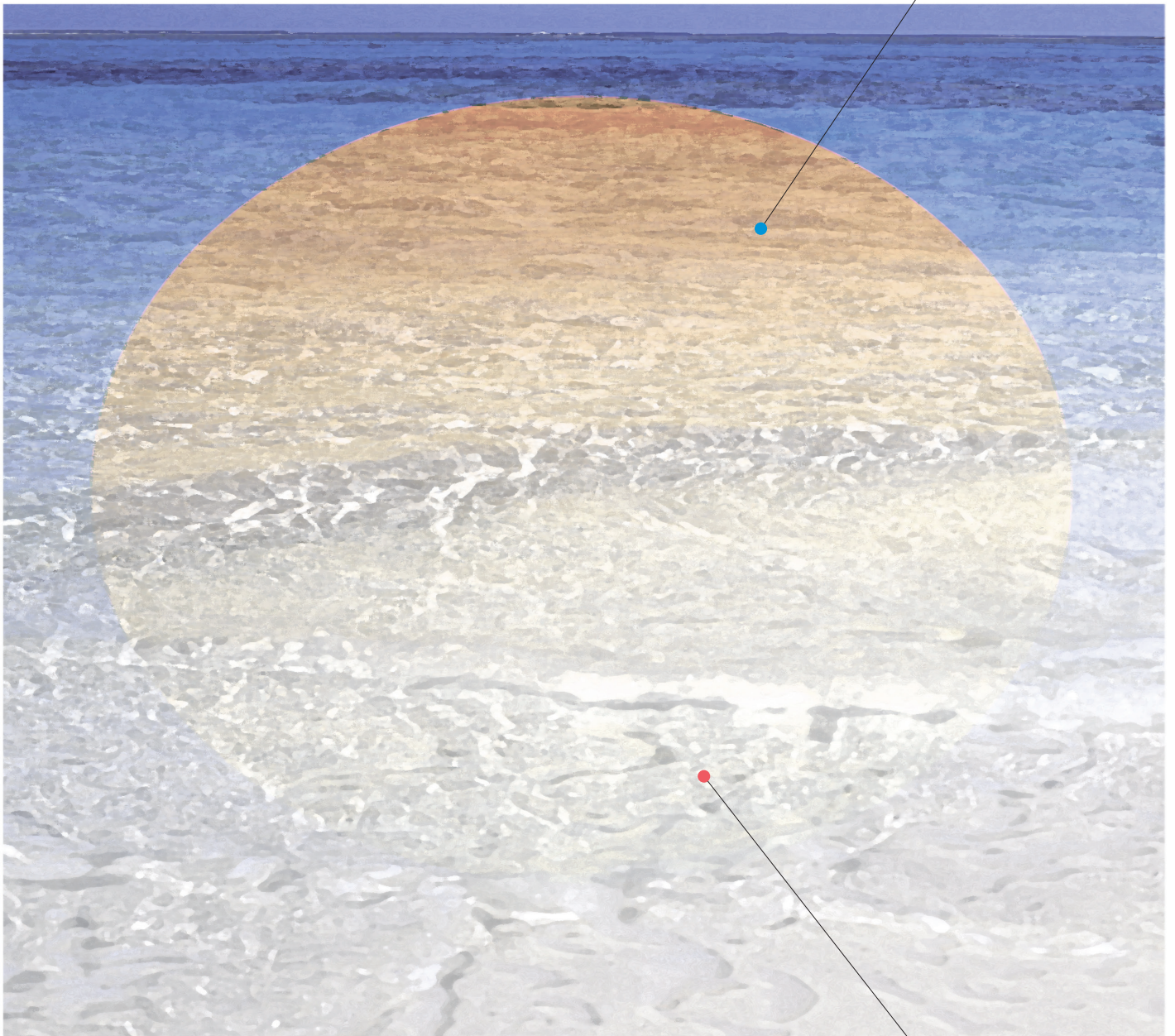
Vol.40

総人・人環フォーラム

HUMAN AND ENVIRONMENTAL FORUM

対談 宇宙、万葉集、言霊 佐野宏×萩生翔大

座談会 ポストコロニアルの視座から百年を振り返る—インド、アイルランド、アラブ世界
—— パッラヴィ・バツテ×池田寛子×岡真理



連載 人間・環境学への招待（4）「文明の歴史」

鵜飼大介、合田昌史、武田宙也、戸田剛文、中嶋節子

◎目次——総人・人環フォーラム第40号——

巻頭言

意外な展開のはじまり 高橋 由典 1

対談

「宇宙、万葉集、言霊」 佐野 宏×萩生 翔大 2

2020年度 人間・環境学研究科報告

2020年度 人間・環境学研究科 現役生・修了生の受賞者一覧 10
 2020年度 人間・環境学研究科 教員の活躍一覧 10
 現役生・修了生 2020年度受賞研究から 11
 稲葉 渉太 高木 佑透 小嶋 ちひろ 細井 太智 古川 大悟
 任 亜丹 藤田 正海 山守 瑠奈 三木 綾乃 増田 和俊
 高見 大地

座談会

ポストコロナルの視座から百年を振り返る ～インド、アイルランド、アラブ世界～
 パッラヴィ・バツテ×岡 真理×池田 寛子 22

総長裁量経費出版助成の成果 30

宇佐美達朗『シモンドン哲学研究—関係の實在論の射程』：中村大介
 吉松覚『生の力を別の仕方でも考えること ジャック・デリダにおける生死の問題』：松田智裕
 古川真宏『芸術家と医師たちの世紀末ウィーン——美術と精神医学の交差』：香川檀
 今井瞳良『団地映画論——居住空間イメージの戦後史』：板倉史明
 山内由賀『19世紀フランスにおける女子修道院寄宿学校』：井岡瑞日
 松原史『刺繍〈ぬい〉の近代 輸出刺繍の日欧交流史』：勝盛典子
 松波烈『ドイツ語のヘクサメタ』：桂山康司
 千田豊『唐代の皇太子制度』：猪俣貴幸
 谷川嘉浩『信仰と想像力の哲学——ジョン・デューイとアメリカ哲学の系譜』：朱喜哲
 黒田一平『文字と言語の創造性 六書からネットスラングまで』：宮川創

人環図書 一教員自らが語る新著 40

感銘を受けた3点 45

連載 人間・環境学への招待 (4) 「文明の歴史」

文字から文明社会を見る 鶴飼 大介 (1)
 大航海時代は文明史上どのような意味を持つのか 合田 昌史 (5)
 グローバリゼーション時代の芸術作品 武田 宙也 (9)
 文明と科学あるいは技術 戸田 剛文 (14)
 風景と文明 都市装置としての自然 中嶋 節子 (18)

私の研究の原点と現在

「より生きやすい社会」をめざして 柴田 悠 (23)
 ふたつの原風景 研究の原動力と「裏テーマ」 中筋 朋 (25)
 自然の力を垣間見る 廣戸 聡 (28)

教員の活躍

2020年ロシア科学アカデミー・モスクワ大学
 Nikolay M. Emanuel メダルを受賞して 田村 類 (30)

特別寄稿

2022年は国連国際ガラス年！ 田部勢津久 (32)

表紙のごとは

海への眺望は美しいばかりではない。深く自在な変貌を拓ける。その繊細なメタモルフォーゼが魅力的なのだ。心癒す、静謐を見せ、ときに暴力的に世界にダメージを与える。まことに悩ましいが、そこそが美の根幹だ。海はあらゆるものを繋ぎ、あらゆるものを遠ざける。

【海は、陽の光】

倉本 修
 プロフィール

東京生まれ、75年以降6千余冊の単行本を装幀。88年、装幀事務所を設立。造本装幀コンクール文芸部門などで多数受賞。独ライプツヒ「世界で最も美しい本展」など招待出品。作品集「ミシヨー魔法の国に」「二本の指もまた立っている」「Darim over again」「美しい動物園」「芸術のルー」など。

意外な展開のはじまり

高橋 由典 — Yoshinori TAKAHASHI [京都大学名誉教授]

私は二〇一四年一〇月から二〇一六年三月まで総合人間学部長・大学院人間・環境学研究科長を務めた。定年後国際高等教育院に雇用され、二〇二一年三月に退職した。研究科長になる前に半年ほど副研究科長をしていたので、振り返ると七年ほど続けて管理業務に携わっていたことになる。こういうことになるとは当初考えてもいなかった。

研究科長に選出される人は、それ以前に諸委員会の委員長等を務めるのがふつうだ。管理業務の経験を十分積んだ人に研究科長の重責を担ってもらおう。教授会での選挙結果を長年見ていると、そのような教授会構成員の意思が感じられる。そしてそれはとても合理的な判断だと思う。この判断基準に照らすと、私自身は選出の条件をまったく満たしていなかった。委員会の委員長をした経験は皆無であったし、学部や研究科の仕組みについての知識も乏しかった。そもそも管理業務に伴う書類仕事が大の苦手だった。自分が管理職に就くことなど想像すらすることなく教員生活を続けていたのである。だが予想に反して白羽の矢が立ってしまった。そしてそこから管理業務の年月が始まることになった。これは私にとって文字どおり意外な展開だった。

管理業務未経験のまま研究科長に就任した私は、管理業務に関する熟達をさほど問われない仕事を自分の任期中のメインテーマにしようと考えた。それが学部、研究科のアイデンティティ問題だった。一九九〇年代前半に人間・環境学研究科（以下人環）、総合人間学部（以下総人）が設立されてから、この問題についてはさまざまなが語られ、実践されてきた。それはよく知っていたのだが、得心のいく答えに出会った感じがあまりなかった。大学院の場合には、それぞれの分野での専門家を育てる組織ということである程度了解できるのだが、学部の場合はそうはいかない。総人とは何か、総人は四年間でいった

いどのような学生を育てようとしているのか。こういう根本的な問いが宙吊りになっているような気がずつとしていた。実際、学生たちと少し突っ込んだ話をする、必ずここぞとばかりこうした問いといつか不満が噴出するのだった。

総人では多様な分野の専門家から成る教員集団が教育にあたっている。個々のディシプリンを見ればまちがいがなく質の高い教育が行われているのだが、学生たちが求めているのは、それらを束ねる学部教育全体に関するイメージだ。多様な分野の教育全体をいったいどのような言葉で括ったらよいのか。これはなかなかの難問だ。最終的な解には行き着きそうにないが、少し歩を進めるくらいならできるかもしれない。そう考えた私は、学部創設以来の先人たちの努力を参照しながら、教養教育をキーワードにしてはどうかと思いついた。

私の理解では、教養教育とは、学術の専門家である教員と学生との間にある知的な落差を動力として展開する教育のことにほかならない。この知的落差は、学生の側からすれば、学術の圧倒的な面白さとして経験される。まったく考えもしなかった世界が自分の目の前に広がる。この驚き、この尽きざる興味が、教養教育の中心である。人環の教員は、全員教養教育の担当者なのだから、この得難い資源を学部教育を束ねる理念として活かさない手はない。こうした発想から、研究科長在任中にいくつかの具体的な提案をした。いずれも教養教育という理念から導出された新たな仕組みの提案であった。提案内容の中には、その後学部や大学院で制度化されるに至ったものもあると聞く。私個人にとっては大変ありがたい話だが、肝心なのはアイデンティティ問題である。総人や人環のアイデンティティ問題については、今後もぜひ検討を重ねていただきたいと願っている。

「宇宙、万葉集、言霊」



Hiroshi SANO
人間・環境学研究科教授
専門 国語学(古代)

佐野 宏



Shota HAGIO
人間・環境学研究科講師
専門 身体運動制御学、
神経生理学

萩生 翔大

司会 細見和之

質疑応答参加 土屋徹・菅利恵・池田寛子・小林哲也

細見 研究科の公開講座としてホームページでそれぞれ講演されている佐野宏先生と萩生翔大先生のお二人に、ここでは対談をしていただきます。その対談のあとで、土屋先生、菅先生、池田先生、小林先生から質問なり、感想なりを出していただいて、それをめぐっても議論していただければと思います。佐野先生と萩生先生、よろしくお願いいたします。

●宇宙と人間の筋肉

佐野 まず私のほうからお尋ねしたいと思います。宇宙環境に適応する身体という中で、少し気になっていることですが、宇宙の中に行く人と人間の筋肉の働きが変化することになるんですか。

萩生 そうです。地球の環境では重力の影響により体が重さを持ちますので、筋を働かせてその重さに対して常に抵抗力を発揮するというを行っています。ですので、こうして座っている時も、立っている時も常に力を出している状態ですが、宇宙に行くとその力を継続的に出す必要がなくなりますので、抵抗力を出している筋が使われず、萎縮していきます。地上だと、例えば病気になるって病院で寝たきりの状態です。そういうことが宇宙では常に起こり続けているということなんです。もう一つは、例えば宇宙ステーションで目の前にある飲み物を取ったりする場合、地球での動き方とはやはり違います。宇宙で真つす前には手を伸ばさずとも思ったら、おそらく手は斜め上方向に動いてしまいます。それは地上では手を真つすぐ伸ばした時に、手の重さによって下の手が落ちることを脳が理解した上で手を動かしているからです。その点では、どのように筋を制御するのかという面も、大きく変わってしまいます。

佐野 結局、人間はこの環境の中で脳が記憶する動きを常にやっているということになるのですかね。

萩生 まさに先生のおっしゃるとおりです。人の運動は、環境と必ずセットになっています。例えば、目の前のコップを掴むというような単純な運動でも、目から入ってきたコップの情報が環境情報となって、それに向かつてどう運動するかという運動の指令を脳が出力します。感覚情報と運動指令の変換という作業を脳が常にやっていて、これが運動を制御するということです。

佐野 たとえば宇宙空間に出ると、もともと重力1の状態からスタートするので、つい脳がパニックを起こしてしまうわけですね。変換して制御できるという点では、やっぱり人間の身体に蔵されているシステムというか、能力の問題だと言えるのでしょうか。

萩生 環境に常に適応する、運動学習能力と言われているのですが、これは人の運動の基礎になっているのですが、これは人の運動の基礎になっている能力で、実際、先生が今日、朝起きられて、大学に来られる中でも必ず運動学習が行われています。分かりやすい例として、例えば使った慣れたパソコンの操作だと問題ないと思いますが、他の方のパソコンでマウスを動かした際に画面上の矢印カーソルが進み過ぎてしまったり、逆にあまり進まなかったりということを経験されたことがあるかと思えます。でも、何度も使っていると迷いなく動かせるようになります。そこで行われていることがまさに運動学習で、目で見た矢印カーソルの感覚情報とそれをどう動かすかという運動指令の変換が上手くできるようになったわけです。こうした小さい運動学習が、日常的に頻繁に行われています。宇宙で起こる運動学習も重力に関する感覚情報と運動の出力との変換が変わるということで、ベースの考え方は一緒ですが、圧倒的に違うなと私が感じているのは、視覚と運動の関係性の変換は地球環境で日常的に起こり得ることであって脳が想定していること

である一方で、急激に重力が変わるということを脳はまったく想定していないということです。

佐野 そうですね。

萩生 それが起こった時に何が生じるのか、運動の制御など身体の基礎的な能力がどう変わっていくのかというところが宇宙研究の面白いところかと思えます。まったく予想できないということに魅力があります。

●重力と身体

佐野 われわれが普段重力のある生活をしていると、当たり前のように、生まれてからいまに至るまでの経験の蓄積があるわけですけども、これは人間の本来の持っている能力、環境に適応するという内在的な能力としてそうなっていて、仮に重力が〇・五だったら〇・五の生活があったと想定されることになりませんか。

萩生 1Gという重力が少し増えたり減ったりしただけで、今の生活とか、体の構造とかもおそらく変わってしまうと思います。例えば今、私たちヒトの身体は地上に対して鉛直方向に真っすぐ伸びた構造をしていますがおそらく重力が大きくなると、いまの構造だと負荷がかかり過ぎるので、二本の足で立つのではなく、四足動物のように4つの足で力を分散させる構造の方が適していると思います。そうすると生活や文化にまで影響します。本当にこの1Gというのは絶妙な重力だなと感じています。

佐野 細胞が耐えられる重力ということに関わって重力1Gは、われわれの身体の形に一番適している環境ということになるのですか。

萩生 そのように考えています。

佐野 そこで私の問題とも少し関わってきますが、環境と身体、人間という関係でいくと、文学の世界ですと、言語とその場、表現と理解の場があります。学生なんかが言う「空気を読む」というのがありますが、「空気」というのは一種の文脈ですね、その文脈に合

わせた語彙の選択というのがあって、結局その場に合わせて語彙が選ばれていく。それに慣れてきますと、結局コロケーションの予測でこれを言ったらこうだという連想が働いてしまう。一種学習がなされて、その環境でだけ使える語彙というものが形成されてくる。

枕詞なんかすごく特徴的で、普通、高校の授業だと和歌にしか使いませんと書いてあるんですけど、古いところだと散文の中の普通の地の文にも枕詞が出てくる、もともとはある言葉を引き出すための美称形容詞みたいなものですから。ところがだんだん和歌専用語彙になってしまって、和歌以外では使えなくなっていくってしまふということが起こります。これなんかは結局環境に引き寄せられてしまふって、そこに飼いやられてしまふ結果、ほかには適用できないものになってしまふということが現象としてある。これもやっぱり環境が牽引してしまふって、環境によって変化させられていってしまうということが、歴史的に見ると結構たくさん出てくる。

そこで僕なんか先生の話を伺っていて気になったことがあります。たとえば言語の場合は日常会話の中で言語が蓄積されていって、これもまた親から教えてもらう以外に学習の方法はないんですけども、最終的には歌で使うもの、散文で使うもの、あるいは法律で使うものと分かれていってしまう。それでも、日本語の場以外の日本語は存在しない。われわれのこの環境の内にあるはですね。外国に行けば話は別なのですからけれども、日本語の中にある限りは、日本語というのがその全てで、その場を作ってしまう。

そこで気になっていたのは、宇宙空間という0Gの世界で、宇宙空間が好む身体というのは形を想像することができるとかということ。1Gの世界の変化形として重力が小さいところだとかいうことが起こることとは分かるんですけど、宇宙空間の重力がない世界で、その身体の形、姿というのはどうい

のが最も理想的かと問われたらなんとお答えになるでしょう。

萩生 まったく重力がないというような環境ですか。月などは地上の6分の1程度の少し重力のある環境ですが、まったくない環境ということですね。そうすると、今この地上では、重力によって上か下かどちらかが分かるという、絶対的な位置関係があるので、真っすぐ体が鉛直方向に伸びていって、そこから手足が出ていっている構造が合理的だとは思いますが、宇宙に行くという絶対的な指標がなくなって、全て自分中心になります。例えば、どちらの方向にも手を伸ばしやすいいし、どちらの方向にも足を伸ばしやすいい。足もおそらく歩行としての機能が必要ないので、手のように色々なものを掴むことができたりといった、そういうように適応していくのかなと思います。

佐野 ということは、球体のようなもので、手がいっぱいあるような形なんですか。

萩生 手がたくさんあると制御が難しくなるので、そういう意味では今の手の数は巧緻な作業をする上で最適化されたものかなというイメージがあります。でもやはり、手を伸ばしにくい方向とか、あとは、見にくい方向がありますね。自分の前しか見えないので……。0Gだとおそらく、動きやすい方向とか、そういうものがなくなるのではないかと予想しています。

●運動記憶と運動学習

佐野 私なんかは重力のない世界にはそもそも生物は存在しなかったんじゃないかと逆に思ってしまう。重力があるから皆集まることのできるんですけど、重力のない世界は集まりようがないから、結局宇宙空間に生物がいらないというのは、重力がないからなのかなとちょっと思ってみたんですね。宇宙空間の中で体を維持していくというのは今後大きな問題になると思うんですけど、それは地球環境の延長線上にある0G空

間ということですよ。

萩生 そうなってくると思います。

佐野 その中で人体がどういうふうにか動くか、どういうふうな変化をもたらすかということになっていくんだと思うんですけど、その時のその、宇宙へ行きつきりじゃなくて、宇宙へ行ったり地球へ戻って来たりするとなると、やっぱり脳も賢くなってきたり、この時はこうするとパターン化されていってしまふということなんですよ。

萩生 記憶と、先ほど先生が文脈と言われたことが関わってきます。環境とか文脈は運動の記憶に大きく関係しています。環境の出力と運動の出力との関係性を運動記憶として学習するというお話を先ほどしましたが、運動記憶というのは脳の中にある記憶の箱に入れるという、そういうイメージで私たちは捉えるのですが、一つの箱には一つの記憶しか入れることができないんです。

佐野 そうなんですか。

萩生 じゃあ、どうしてこんなに色々なことを私たちは覚えられるのか。違う箱を使うには、文脈を変えるということが重要になってきます。例えば、バスケットボールでリングにシュートする際に、まったく同じ姿勢で周りにいる人も同じで、同じ体育館でという具合に、厳密に周囲の環境が統制されていたら、使える箱は一つです。箱の中には運動の記憶を一つしか保存できないのですけれども、環境が変わったり、自分の手の動かし方が若干変わったりするだけで記憶の箱を増やすことができます。そうやって色々な動きをしたり、色々なシチュエーションの中で運動を覚えたりということが、たくさん運動を覚えるということに繋がっている。宇宙で覚えた運動というのは宇宙という文脈の中の記憶の箱に入れられ、地球で覚えた運動というのは地球という文脈の中で箱に入れられますので、そういう意味では、行ったり来たりして、宇宙では宇宙の

箱から記憶を引き出し、地球では地球の箱から記憶を引き出すということが可能だと思います。

佐野 もういまは自由になりましたが、海外で生活してきた人が昔は数が少なかったわけで、そういう人は違う世界を知っているという感じだった。そういう感じになるんですね。

萩生 まさにそうです。

佐野 そういうことは、遺伝的に後世には繋がらないんですか。

萩生 その情報ですか。

佐野 ええ。

萩生 基本的には覚えた記憶自体は伝わらないとは思いますが。ただ、記憶が脳に保存されるのは実際に箱があるわけではない、脳内の神経細胞の集団によって作られたネットワークの中に記憶が上手く組み込まれているんですね。そのネットワークの作り方とか、構造などに関連して、何らかの情報が伝わる可能性はあるかと思っています。

佐野 ああ、なるほど。ということは、宇宙時代になつてきて、複数人の人が宇宙に行くようになって、そういう記憶を持って帰ってくるとして、長いスパンで見ると進化が違う形になっていく可能性はある。

萩生 その可能性はあります。

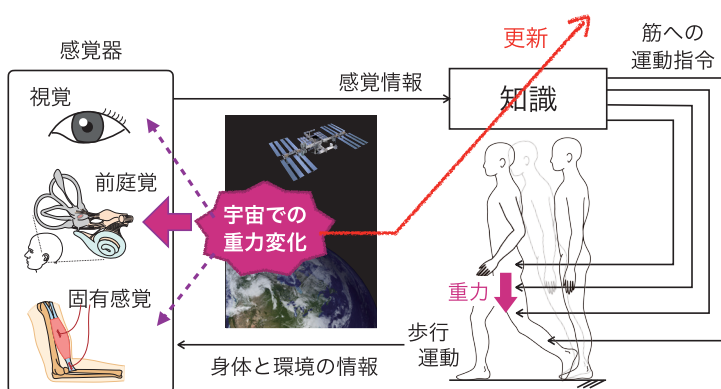
佐野 逆に重力が大きくなった場合の変化の可能性はないんですか。重力のプラス・マイナスの計測器があつて、重力の強い場所、要するに密度の大きい場所と、密度の小さい場所では重力の違いがあるんだと、昔、地学で習いましたけれども、その違いというのはそれほど大きな変化にはならないのですか。重力の高い地域にお住いの人と、重力の軽い地域にお住いの方で、なんか性格とか人間性に変わりがあるのかどうか、そんなのいんですか。

萩生 人間性にまで大きな影響が出てくるかは分かりませんが、運動の制御自体は変わりますね。

佐野 ああ、そうですね。

萩生 はい。やはり例えばボールを投げる運動一つにしても、今、地上でボールを投げているような形で宇宙で運動すると、ボールは上の方向に進んでいってしまいます。ボールが下に落ちるといふことを想定して投げますので。そういう細かいところまで脳は計算しているの、重力の環境が少し違うだけで、その辺りの記憶というのは変わってきます。もし重力場に地域差があるとしたら、運動制御に地域差があるとは思いません。

佐野 じゃあ重力の大きいところで練習しているやつは球が上についてしまふし、重力の小さいところで練習している子はみんなバウンドしちゃう可能性があるわけですね。



ヒトは、視覚や前庭覚（頭部の回転や傾き、重力などを知覚）・固有感覚（関節の動きなどを知覚）といった感覚器から常に身体と環境の情報を得ている。こうした感覚情報に基づき、筋を働かせて必要な運動を作り出すための知識を獲得しているため、思い通りに運動することができる。地球と重力の異なる宇宙環境で運動するためには、地球で獲得した知識を更新する必要がある。

萩生 宇宙飛行士の方がよく言われるのが、宇宙から地球に帰ってきてしばらくした後も、階段を上ったりとか、障害物をまたいだりという運動にすごく違和感があるということです。自分の足がどれくらい重さだから、どれくらいの力で足を挙げないといけないとか、重力が変化すると、その辺りの関係性が変わってきます。

●止っているエスカレーターの例

佐野 なるほど。それってエスカレーターが止まっている時にそのエスカレーターが動いてゆくと想定してしまう感覚ですね。

萩生 近いかもしれません。

佐野 階段とは角度がちよっと違うので、普段動いている感覚でいくと、なんか同じ階段なのに違う気がして、うまく上がれているのか分からないうちに上がりきっちゃったり、降りきっちゃったりがありますけれど、あの違和感がたぶんよく似ているのでしょね。そういう環境に適応した運動の仕方に慣れている。

萩生 そうですね。

佐野 単に段差があるんじゃないかと、結局シチュエーションとしてエスカレーターに乗るという文脈があるから脳はそういうふうな体を制御しようとするのに、止まっていると、突然困るということなんです。**萩生** そこにはもう一つ大事な運動の能力が関与しています。予測するということです。

佐野 予測ね。

萩生 私たちは外界の情報を常に予測して運動しています。例えば、宅配便の業者の方に家の前で重い荷物をぱつと渡されたらおそろく手が下に一瞬ストンと下がります。これは、たとえ荷物を受け取る準備ができていたとしても、相手の運動を正確に予測できなかつたからです。でも、たとえば重たい辞書を自分の右手から左手に載せると、左手はおそろくほとんど下がら

ないかと思えます。これは自分がどのタイミングで運動して、どのタイミングで辞書が置かれるのかを予測できるからです。同じような例にくすぐりがあります。他人にくすぐられるとすごくくすぐりたいと感じますが、自分でくすぐると感じない。これもまったく同じで、自分の動きは予測できるので、くすぐりたいという感覚はむしろ減らされます。逆に予測できないという状況が来るか分からないので、自分でくすぐる時よりも感覚がすごく敏感になる。そういう予測という能力でいろんな状況も説明できたりして、さっきのエスカレーターの例もそうです。停止しているエスカレーターを階段のように降りたとしても、最後なんかちよっとつまづいたみたいな感じになる。

佐野 ああ、そうそう。

萩生 エスカレーターに乗った状態を背景として、エスカレーターの記憶が出てくる。分かっているけど、それをベースに脳は予測しちゃうので、不意につまづいてしまう。意図しない行動が出てくるというあたりが、運動のすごく面白いところだと思います。

佐野 そうすると僕たちは日常生活を予測だらけの運動で生きているんですか。

萩生 まさにそうです。

佐野 ということは、予測して運動というのを学習していくので、場面場面の記憶はセットになっているんですか、この状況だったらこうだというように。

萩生 そうです。文脈と記憶の箱がセットです。

佐野 記憶セットとして予測しているんですね。

●脳による予測の修正

萩生 実は脳というのは予測がうまくいかなかったときに運動を変える傾向があります。具体的に言うと、例えば転んでしまったら、次は転ばないよう運動を修正する必要があるんですけれど、もし脳が転ぶということを予測していてその結果転んだのだとしたら、運

動の修正は起こりません。例えば、野球でボールを投げてキャッチャーミットから右に逸れてしまった。それが予測していなかった結果として逸れたのであれば、逸れないように感覚と運動の関係を修正しますが、脳が逸れることを予測していた場合は、運動の修正は起こりません。脳の予測というのは本当に大事な機能で、こういう状況が起きるんじゃないかと分かっている意識的な予測とはまた違う次元にあります。潜在下で起きていることなので、そこがすごく面白いですね。

佐野 じゃあ、コントロールの悪いピッチャーはやっぱり予測が悪いんですね。

萩生 まさにそうですね。

佐野 非常に経験的によく分かる話ですね。なるほどなあ。予測だらけなのか。そうすると、脳の予測があつて、経験しながら予測に合わせて体が動いていくわけですね。宇宙空間に行くとか予測が不可能だから、どうしても混乱してしまつて、そこで修正を行おうとする。ところが修正するにもまったく抵抗がなかったら、その部分の能力は衰えていつてしまう。僕、ここが気になるんですけど、使わなかったら休んでいるだけなんだから、衰える必要ないじゃないですか。どうして衰えていくのですか。

萩生 基本的に体というのは常に一定の状態ではなくて、代謝して変わっていますので、例えば筋にしても、使わなかったら合成と分解のバランスが変わることで萎縮し衰えていきます。寝たきりになつて歩かなくなつたりする場合もそうです。加齢による筋の萎縮も、高齢者になるから筋が衰えるという要因だけではなく、やはり年々使わなくなるから萎縮すると言われていまして、また、記憶の面でも、使わないと少しずつ忘れていつてしまう運動の記憶もあります。ただ、忘れることで次の新しい記憶が入ってきやすかつたり、いろんな状況に適応できる状態を作れるという側面もあります。

佐野 言語世界は本当に抽象的なもので、現実世界に対しては裏面になるようなものですね。脳の中にあるものです。

萩生 現実世界での事象を、言語世界を通して時間を超えて伝えていく。そして時がたつとその言葉からまた現実世界を引き出してくるというイメージですね。

佐野 はい、そのとおりです。

萩生 それってまさに人が運動でやっていることとすごく似ているなと思いました。

佐野 そうですか。

萩生 実際さっきの記憶なんかも、具体的には脳内の神経ネットワークで符号化されているわけですけど、記憶の箱なんていう考え方は本当に抽象的なもので、それをいつでも引き出せるような関係というのはなかなかすごく共通しているなというふうに思います。あと、言語世界に出来事が凍結されているというように表現をされていたのですが、その凍結されたものは凍結されているので、他からの影響を受けて変わらないという考え方でしようか。

佐野 そうですね。アイヌのユーカラ（叙事詩）のように宗教的に守られているものもほかにありますけれど、基本的にはある定式を持った形がテキストとして保存されていて、雨ごいするときはこの文言でもって神に祈ると雨が降るんだというような、そういうある種呪術的なものによって守られているところもある。そういう言葉の世界と現実世界をどうも昔の人は等価的で、いわば写像できると思っているところがあるんですね。現実世界が失われたあとでも言語世界のものをお口にするそれが現実世界に引き寄せられてくるという発想をどうも持っているらしくて、それが応用される形で日本の文学のいろんなお話の中でオマージュだったりパロディーだったりに現れるんですね。元の話を知っている人なら、それがフラッシュバックしてくるので、重ね合わせられて楽しいという話になるん

ですけれど、これって結局、その言葉に記憶されているものと現実の世界のものと二層構造になっているってことを脳がずつと知っているというか、分かっている状態があつて、ものをそのままのとして見ずに、その背後にあるものを常に見ようとする。どうも日本人はこういうことに慣れているところがあるんですね。漢字一つとっても、音と訓が二種類ありますね。読み方が多層的で一つということはないんですね。そのさまざまな見方をするというのはすごく日本人に多い感じがする。そういったところにもたぶん通底しているのですが、授業で面白おかしく言うんですけど、「草生える」ってご存じですか？

萩生 はい、分かります。

佐野 ブログとか、「(笑)」っていうところからスタートしていくんですけど。

萩生 「w」ですよ。

佐野 「w」になって、「ワールド・ワイド・ウェブ」が流行ったときには「www」になってというふうが増えていく。で、ある時、いつだったかな、パソコン通信なんかの何年号だったか、確認すると、「w」だったら偶数個の「v」があるはずなんですけど、途中で奇数個になるんですよ。つまりwを押しさないで半角のvばかり押したやつがいるんですけどね、そうするとそれが草みたいに見えるので、「草生える」とか「大草原」だとか、全部象形文字化してしまっているんですね。

もともとは「笑う」から始まったものなんだけど、だんだん文字表記が変わっていったって、ある環境の中の状況語なんですけども、その文末のモダリティを表す要素としては変わらないので、学生には「草生える」って日本語史上最も長い終助詞だって話しているんです。でもそういう一つのものを複数に見る、写像しているんなものに見立てていくというのがどうも日本語の中ではすごく多様に存在していて、先ほどの話

で言うと、予測しちゃうんですね。その言葉が何を意味するかという、コロケーション予測と言うんですけど、これはどういふふうに繋がっていくんだろうというのを常に模索する。

言葉っていつも何かを引き寄せてきたり、何かと結びつこうとするとところがあるんだけど、それが和歌だったり物語だったりというジャンルごとになると、ある重力のバイアスみたいなものがかかってしまつて、その中で揃おうとする。自由運動が許されなくなつてしまつたので、おまえは駄目だつて排除されるものもあれば、おまえはいいつて引き寄せてしまつたものもあつて、ジャンルごとに言葉が選ばれていってしまう。この働きはすごく、僕たちは言語場と言うんですけど、言語場が要求する言葉の種類というのが常に存在しています。一方で言葉自体は単独で置いておくと勝手に何かと結びつこうと努力してしまつて。ここが違うんですよ。使わないと消失するというより、存在している限りにおいては何かと結びついていくこととする。本当に使わないと死語になっちゃうんですけど、比較的発達するものを内在させているところが言葉の場合にはあるんですよ。

●互いの研究の共通点

佐野 今日お話を聞いていて特に思ったのは、環境というか、場によって変化するというところがあるので、純粹に実体的な身体とか言葉というものの能力というより、もう少し場の影響、環境との関係というのを考えないといけないんだなということでした。僕もとても不思議だったのは、宇宙空間にあると脳のメカニズムそのものが変更されていくというのは、結局、われわれがフィクションを見るときとドキュメントを見るときの見方の違いと同じだということです。

萩生 そうですね。

佐野 僕の子どもがまだ小さい頃のことですが、私は

福岡にいたのですけれど、東京に出張するってなつたときに、テレビでたまたまウルトラマンの番組があったて、東京タワーが倒されているところだったんです。お父さんこれから東京行ってくるわって出かけようとしたら、息子がいま行ったらあかんと言うわけですよ。いま怪獣が来ているという話。いや、東京タワーのここに行かへんからって出張に出かけたということがあった。子どもにとつてはフィクションとドキュメンツトの区別がないから、どちらも同時進行している。その発想の仕方と、今日お話しになっている脳とその予測の在り方、記憶の箱の在り方というのは非常によく似ている。文脈だとか文脈だとか僕たちは言うんですけども、その働きの中でどんなふうに関係づいて変化していくのか。対象は違いますが、おそらく追いかけているものは同じなのだろうと思いますね。

萩生 本心に意外なほどに共通点があると感じました。**佐野** 最初はね、宇宙と聞いたから、万葉集とか古事記なんかだと天地創造神話というのがある。宇宙が、世界が出来上がってくる。古事記の中ですごく面白い神様がいるんです。天地初めて発けしときという場面で、ウマシアシカビヒコジという神がいるんです。これってなんの神様が分かっていないのですけど、どうも上下関係を決定している。天が上にあつて土が下にくるというのが常識のように思いますけれど、日本書紀にはきれいなものが上について濁つたものが下にいくって書いてある。でも、古事記にはそういう明確な規定がないので、どっちが上か下か分からない。ウマシアシカビヒコジというのが生まれて、天と地が、上下に分かれるという文脈になっていたりします。そんな話をして宇宙に結び付けようかなと思つたんですけれども、そうやってすり寄るよりは、まったく別次元でお話をしたほうがよからうと思つて、やってみただすよ。

でも、意外なほどに共通点が多いことに気が付いて

しまつて、お互いに類推が届いてしまつたところがあつて、それはなんなのだろう、人間の考えることつてあんまり変わらないのかなというふうにも思つたりもするんだけど、ただ、人間に関わる現象をやる限りはやっぱりどこかで類推的なものつてあるんですかね。結局、脳と身体というのと、脳と言葉というのをやっていくつて言いましようか、結果的にどこかで類似性があるんだなということもまざまざと知つた、そういう感じがしました。私なんかは言葉の能力なのか場の影響なのかということが気になってるんですけども、萩生さんの場合でいくと、脳の能力なのか、環境の影響なのかということですね。

萩生 そうですね。それらの関係性が気になりますね。**佐野** 萩生さんも私の書いたものを読まれると、何に興味を持って、何を探っているかについてもお分かりいただけると思いますし、私も読んでいて大変よく分かりました。いや、なんか、意外だったですね。

細見 確かに、脳の機能という問題でもあるでしょうし、非常に抽象化すると情報理論というか、膨大な数の情報を絞っていく際の手続きのことですね。理論の形としては同じようなパターンがあるのかという感じもしました。ここからは編集委員のみなさんから質問なり感想なりをお願いします。

●編集委員との質疑応答

土屋 土屋です。私は生物学に興味があるのでその視点からで、あまり今回のお話の内容にはそぐわないかも知れませんが、そもそも人間自体がすごく特殊な存在なのかという気がしています。脳の機能とか、いろいろなものを含めて、かなり変わったことをやっているように思います。体の仕組みもそうですね、とても精密な仕組みもついています。そういう複雑なことをやっている人間が高等で、単細胞のバクテリアなどを下等と言うことがあります。バクテリアなどのほ

うが実は環境変化に強かつたりしぶとかつたりします。人間は酸素濃度が少し変わつても生きてはゆけないし、それこそ深海で作業したら、戻つたときにはしばらくは圧を少しづつ下げて慣らさないと駄目だと言われています。だから、高度になつたがゆえに環境の変化には弱くなつたと考えると、宇宙に行こうとするときには、人間はすごく大変な生き物なのではないかと思つています。萩生先生の宇宙の話で、筋肉とか脳の話をされていたのですが、宇宙に行くときに一番問題になるのは寒さではなくて放射線だと思つています。宇宙でなんとか運動の制御はできるようになつても、放射線に曝されては生きてゆけなくなることも一つすごく大きな壁なのかなと私は思つておられるのですけれど、どうでしょうか。

萩生 先生のおっしゃる通り、宇宙進出の大きな問題の第一が宇宙放射線で、第二が重力の問題というくらい、生命にかかわる問題になっていきます。ただそれが運動とどうリンクしてくるのか、まだはつきりとは分からないところがあります。

菅 菅と申します。対談を非常に面白く伺いました。萩生先生にちよつと聞いてみたいと思つたのは、運動能力とか、それから運動に関する脳の働きが重力で大きく変わるといふ話でしたけれども、たとえば感情とか言葉の選択とか、そういったものも宇宙に行くとか変わつたりするのかなというのが気になりました。色を見る、知覚の感覚、色を見たり、それから、きわめて感覚的なところでもいいですし、また感情が宇宙に行くとき大きく変わつてしまふとか、そういった現象がいままで報告されたりしているのでしょうか。そういう内面的なものに関して宇宙空間によつて何かが変わつたといった事例をご存じでしたら教えていただきたいと思つています。

萩生 はつきりとしたことはここでは私からは言えないですが、ただ、感情がどういふふう形成されるか

というのは、やはり感覚からの情報や、自分が運動を通してどう外界に働きかけるかといったことがベースになってきますので、運動が変わると感情が変わるといふ、そういう関係性はあると思います。

細見 たとえば南極大陸の基地でずっといるときの人間関係における難しさと較べて、宇宙空間になったときに根本的に違うことが起きるのかとか、そういうこともなかなか面白い問題ですね。

池田 池田です。最後まで楽しく聞かせていただきました。言葉の作り出す宇宙と、はるかかなたの宇宙というのが響きあう感じがして、文学が私の専門なんですけれど、とても興味深く聞かせていただきました。そこで質問ですが、バーチャルリアリティを通して、宇宙に行く体験もこの地上でできるんじゃないかと思えます。その時に宇宙を体験したという気持ちを抱かせるためには何が欠かせないかというのを、萩生先生にちょっとお聞きしてみたいんです。

萩生 今のバーチャルリアリティの技術は視覚的なイメージを変えることが主ですが、ただ、重力を知覚しているセンサーが耳の中にあつて、そのセンサーが視覚系とリンクしていたり、さらに、体の重さを感じるセンサーも視覚系とリンクしていたりということがあるので、一種の浮遊感のようなものを視覚的に与えることができれば、他のセンサーをだますことは可能かなとは思っています。また、現代は、ハプティクス〔触觉学〕の時代になりつつあると言われているように、接触、触覚などをバーチャルリアリティに組み込んで体験できるような仕組みが発展したら、もう少し宇宙に行った感覚を体験できるようになるのではないかなと思っています。

小林 大変興味深い話をありがとうございます。ちょっと比喩的な、漠然とした質問になるかもしれないんですが、「記憶の場所」についてお聞きしたいと思います。言語に関しては、やっぱり脳で処理してい

る、記憶の場所は脳にあるというのがイメージしやすいと思うのです。運動機能とかに関しては、神経間が接続していると考えるのか、あるいは筋肉に記憶されていると考えるのがよいのでしょうか。それとも、やっぱり結局脳で処理していると考えるのがよいのでしょうか。そのあたりを萩生先生、佐野先生にお訊ねしたく思います。

萩生 記憶というのは、脳の一つの場所にあるというよりも、階層的なネットワークの中に組み込まれています。筋そのものには運動の記憶媒体はないので、筋には運動を記憶はできません。ですが、脊髄という背骨の中にある神経器官にある運動神経細胞が筋とセツトになっていて、この運動神経細胞が周囲の細胞と繋がることでも記憶が保持されています。そこが階層的には一番低い部分であつて、手足の運動を複数ある筋の働きとどのようにリンクさせるのかという情報が保持されています。実際に手足をどのように動かして、ある環境の中で巧みに運動するのかわという記憶は、高次な脳の中で保持されています。こうした階層的な構造の中で運動が保持されているということになります。

細見 ありがとうございます。では佐野先生、結びの言葉も含めてお願いします。

佐野 難しいですね。小林先生のご質問について、先に答えておきたいと思うんですが、文学の世界、特に古典文学の世界の中にある記憶というのは、テキストに落とし込まれているんですけども、多くの場合、その物語や説話の叙事の中に指標語というマークになる言葉が入っています。それがいわばスイッチになっていて、それが投げかけられると、全体がある種の身体性を伴って復元されてくるといふ構図になっているので、一から一〇まで全部記憶されているわけではないのです。固有名詞だったり、あるいは特殊な枕詞だったり持っている記憶というものがあつて、これは折口信夫なんかはライフ・インデックスなんて

言い方をして呼んでいるものなんですけれど、その記憶が失われると単なる形式になってしまつて、意味が失われてしまう。古今集以降は特にそういう傾向が強くなりますけれど、古代の上代の中にあつてはまだ生きていたんじゃないかと思われるふしがあります。

さて、最後にまともなきやいけないのですが、最初「宇宙と令和」というテーマで万葉集で話してくれと言われたときは、令和の元号の話をしてほしいという話だったんですけど、ずいぶん使い古してしまつていて、いまさらという気がしていたから、じゃあ言葉の話でもしますと言つて、ちょうどその頃考えていた言葉というので答えたのです。ところが先ほども申しましたように、われわれ、全然分野も違いますし、やつていることも違うんですけども、意外に共通項と言いましようか、構造的な共通項というのが結構あるのが見えてまいりました。特に環境に対する、私たちがいえば言語場に対する、あるいは文体に対する認識の仕方と、その中でどういふいふに言葉が動き回っているのか、どういふいふに発達してきたのかということですね。人間の身体についても、スパンは違いますが、進化的過程とすれば、長い歴史がありますし、言語に関しても文学の中に歴史が存在している、環境とそこに働くものが、そしてそこにおける発達、そして歴史というものが、実はお互いの、萩生さんと私の分野では、共通して存在する要素だったんだなというふうに気づかされました。こういう機会でもない、話をすることがありません。大変勉強になりました、刺激的だったと思います。どうもありがとうございます。

細見 ではここで閉じさせていただきます。佐野先生、萩生先生、どうもありがとうございます。

二〇二〇年度 人間・環境学研究所報告

人間・環境学研究所 現役生・修了生の受賞者一覧

*学年等は受賞時のもの

共生人間学専攻

稲葉翔太(修士二年) 第71回関西社会学会大会関西社会学会大会奨励賞「『自己責任論』に担当する当事者―解釈困難な語りを手掛かりに他者を理解する―」

高木佑透(修士二年) 第40回「地方の時代」映像祭市民・学生・自治体部門優秀賞『僕とオトウト』(編集・監督 高木佑透、製作 池谷、音楽 ichi_yo)

小嶋ちひろ(二〇二〇年博士取得) 二〇二〇年日本シェイクスピア協会奨励賞
‘Within and Without the City Wall: The Theatricality of Marital Relations in Thomas Dekker and John Webster’s Westward Ho (1604)’ Shakespeare Studies, vol. 58 [2020] pp. 1-19

細井太智(修士二年)・太上直人(修士一年)・小野雄大(修士一年) 国際会議 JCAI-PRICAI 2020 競技会 ANAC 2020 The 2nd International Werewolf AI Competition フロントロ部門 第3位入賞「人狼ゲームの AI エージェント『人狼知能』の開発」

共生文明学専攻

古川大悟(博士三年) 萬葉学会奨励賞「『助動詞マシの意味』(『国語国文』第八十八巻一号、平成三十一年一月)をはじめとする一連の上代助動詞研究」

相関環境学専攻

小野田光貴(博士一年) 公益社団法人日本化学会第10回CSJ化学フェスタ2020 優秀ポスター発表賞「イリジウム錯体触媒を用いた含窒素複素環上のメチル基におけるアルキルによるアルキル化反応」

丁在瑛(博士二年) 公益社団法人日本化学会第10回CSJ化学フェスタ2020 優秀ポスター発表賞「イリジウム触媒を用いる環境調和性に優れたジメチルアミン誘導体の合成反応」

任亜丹(博士二年) 第3回関西電気化学研究会関西電気化学奨励賞 ‘Investigation of the cation mixing effect in LiNiO_2 during the oxygen evolution reaction’

高見大地(博士一年) 第39回団体・表面光化学討論会 優秀発表賞「担持ロジウム触媒による可視・近赤外光照射下でのメタンドライリフォージング反応」

杉谷美里(修士一年) 第39回光がかわる触媒化学シンポジウム 優秀ポスター賞

「可視・近赤外光の集光を利用したドライリフォージング」
藤田正海(修士二年) 第30回キャラクターゼーション講習会 優秀ポスター賞「Xチレンの水素化反応の触媒活性に対する白金ナノ粒子の表面再構成の影響―XASその場観察による検討―」

山守瑠奈(博士三年) 第11回(令和2(2020)年度) 日本学術振興会育志賞「海洋の岩盤環境における共生を介した生物多様性創出機構の解明」

長澤耕樹(修士二年) 日本植物分類学会第20回大会口頭発表賞「火山性強酸性土壌におけるヤマタヌキランの分布決定要因―現地調査と栽培実験に基づくpHと Al^{3+} の影響評価―」

三木綾乃(修士二年) 日本植物分類学会第20回大会口頭発表賞「超苦鉄質土壌におけるアキノキノソウの平行的な土壌適応に関わる Mg^{2+} 輸送体遺伝子」

増田和俊(修士一年) 第68回日本生態学会大会最優秀ポスター賞「後氷期の気候温暖化が引き起こした分布末端集団の孤立化―ゼンテイカ群での事例―」

高見大地(博士一年) 日本化学会第101春季年会(2021)「学生講演賞」「担持ロジウム触媒による光熱変換型メタンドライリフォージング反応」

教員の活躍

相関環境学専攻

田村類(名誉教授) N. M. Emanuel Medal “Research on Chemical Complexity Phenomena: Discovery of Superparamagnetic Organic Radical Soft Materials and Application to Theranostic Metal-Free Magnetic Nanomedicine”

山本旭(助教) 2020 PCCP HOT Articles “Structural Characterization of Molybdenum-Dinitrogen Complex as Key Intermediate toward Ammonia Formation by Dispersive XAFS Spectroscopy”

関西社会学会 奨励賞

『自己責任論』に加担する当事者
——解釈困難な語りを手掛かりに他者を理解する——

稲葉 渉太
Shota INABA

京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程1年（日本学術振興会 特別研究員（DC1））

みなさんはホームレスという言葉聞いてどのような想像しますか。一般的には、路上で生活されている方、テントや小屋などを建てて生活されている方（野宿者）を想像するかもしれません。しかし、学術的には安定した居住を確保できていない人を指す言葉として、ホームレスは用いられます。また、ホームレスはあくまでも状態を指しているに過ぎないという点からホームレスネス（homelessness）という言葉が使われたりもします。二〇二一年の厚生労働省の発表では、日本に現在も三八二四人の野宿者がいます。この数字は、厚生労働省の発表の中で野宿者数が一番多かった二〇〇三年の二五二九六人からだいぶ少なくなっています。しかし私の関心は数字にあるのではなく、人々がなぜ路上にとどまり続けるのかにあります。私はおひとりの元野宿者の方にご協力いただき、調

査を行なってきました。私の調査協力者であるAさんは、六十歳を過ぎてから野宿を始めた方で、十数年間野宿を続けていました。Aさんは病の悪化をきっかけとして野宿を続けて死ぬか、生活保護を受けて生きるかという選択の中で、生活保護を受けました。日本には、もともと貧困に陥ってしまった人々に対して、その貧困を自業自得として「自己責任」化する傾向があります。「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法」、「生活困窮者自立支援法」など包摂政策が充実する中で、野宿を脱する方途があるものの上にとどまり続ける人々は、自らの責任において、包摂政策を利用しない見捨てられるべき存在としてみなされます。結果、路上にとどまる人々は、より厳しい

「自己責任」のまなざしにさらされます（詳細については北川由紀彦（二〇一九）「日本のホームレス研究は何を明らかにしてきたのか——その動向と論点」『理論と動態』をご参照ください）。しかし、この「自己責任」というまなざしは他者による野宿者についての説明であって、野宿者本人がどのように振舞い生きていくべきなのかは改めて説明される必要があると考えました。

二〇一八年に出された「ホームレスの自立に関する基本方針」（厚生労働省）では、課題として野宿期間の長期化や脱却後に再び野宿生活に戻ってしまう人々の存在を挙げています。このような状況が生じるのは、野宿者の抱えている課題を研究者が捉え損ない、またその成果を参照し組み立てられる政策も、野宿者の抱えている課題を捉え損なっているためだといえるでしょう。野宿者の路上にとどまる理由について研究した先行研究では、野宿者の言葉に優先して研究者の言葉が語られていたために課題を捉え損なったのだと私は考えています。すなわち、野宿者を取り巻く研究においても社会に流通する「他者によって説明される野宿者」という構図が温存されているのではないかとこのことです。つまり、研究者がデータから自身の解釈（研究者の言葉）を展開する前に、データから理解で

きること（野宿者の言葉）を整理する余地があるというのが行っていることです。

例えば、インタビューでの会話は、お互いに発した言葉が理解できることによって成り立っています。私が研究を行なっている上で、今でも頭から離れない言葉が出てきた会話の事例を参照しましょう。その言葉とは、「そんなん聞いたって、雑魚の話聞いたってダメだよ」と、自身（雑魚）の話聞いてもダメだと評価するAさんの言葉です。これはAさんが、私に対してご自身の生活史を語る際に出てきた言葉でした。私はこの言葉を受けて、こちらとしてはすごく勉強になっており、生活史の語りを得られること自体が貴重なのだと、Aさんの生活史の語りに対する私の評価を行いました。すると、それは恥ずかしいからみんなは語らないのだとAさんは生活史の語りが貴重であるという私の評価に対する説明を行いました。

上記の会話場面において、私とAさんが相手の発言を評価や説明として理解し、適切に相手にも理解可能なかたちで応答しているために会話が成立していることがわかんと思います。

受賞させていただいた発表では、このような理解可能なものの分析を十分に行えませんでした。発表では、私自身の関心である「自己責任論」に引き寄せてデータの解釈を行いました。今となつては会話のような相互行為において、本人が課題を既に呈示していることに着目すべきだったと考えております。フィールドワークをしていると、解釈が困難になるような語りや一見矛盾するような言動といった「課題」と出会うことがあります。このような課題が生じる場面の周辺では、研究者だけでなく、野宿者自身もまた課題を感じており、野宿者本人によって研究者にも理解可能なかたちで課題が呈示されているはずですが、そして、その場面に着目し、本人の課題に着目することこそ、野宿の長期化や再野宿化を防ぐことにつながると私は考えます。

第40回「地方の時代」映像祭 市民・学生・自治体部門優秀賞映画

「僕とオトウト」

高木 佑透

Yuto TAKAGI

京都大学大学院人間・環境学研究所共生人間学専攻修士課程2年

私は大倉得史先生（発達心理学）の研究室に所属しており、障害学と質的心理学を専門にしております。大きな研究テーマは「（私）」にわたる障害・障害者とは何か、具体的に研究していることは「知的障害者のきょうだいが障害のある弟と共にあること」になるでしょうか。

・映画について 映画「僕とオトウト」

私が「（私）」にわたる障害・障害者とは何か」という問いを抱き始めたのは、二〇一六年夏に知的障害者施設の津久井やまゆり園にて殺傷事件が起こった時です。私には重度の知的障害のある弟がいます。私は地元の香川県を離れて京都に住んでいます。弟とは今でもとても仲が良く、私が帰省するたびに弟は私に抱きついてくるほどです。

仲の良い、障害のある弟がいるなら、さぞかし悲し

んだり、怒りが湧いてきたのだろうと思われれるでしょう。しかし私は事件を聞いた時、感情が全く湧いてきませんでした。心の空間の中に、丸い真空の球が浮かんでいるような感じ。とにかく何も分からない。何も分からない何が、自分の心の中に浮かんでいる。

「障害って、障害者って、そもそも何なのさ。」

この問いに対する向き合い方は様々あるでしょう。医学を学び、知的障害の発生する脳のメカニズムを研究し、その原因を突き止め、治療法を開発する。あるいはマジョリティとしての健常者に合わせて作られたこの社会に存在する「障害」を明らかにし、それを無くそうと尽力する。障害学では前者を「障害の個人モデル」、後者を「障害の社会モデル」と呼びます。しかし私の問いは「（私）」にわたる障害・障害者とは何か」というものでした。ここでの「（私）」とは、一人、一人の人間のような意味です。一人の人間として、（私）は、（あなた）は、障害・障害者とう向き合い、共に生きていくのか。その実存的な問いを自らに突き付けた時、最も身近な「障害者」である弟と、その弟を見つめる自分自身に、徹底的に向き合ってみることにしました。

その過程が刻まれた映画が「僕とオトウト」です。私は映画監督の池谷薫さんの主宰する元町プロダクションに所属し、池谷さんのプロデュースを受けながら本作を制作しました。本作は二〇二二年十月より劇場公開が決定しており、配給・宣伝も学生主体の上映委員会を結成して行っております。紙幅の関係もありますので、映画や上映委員会についての詳細は「僕とオトウト」で検索してみてください。京大前総長の山極壽一先生からいただいた熱く美しいレビューは必見です。

・研究について 「知的障害者のきょうだいが障害のある弟と共にあること」

「（私）」にわたる障害とは何か」という問いを私自身に突きつけて臨んだ映画で描かれたものは、いわば「知的障害者のきょうだいが障害のある弟と共にあること」でした。私はそれをさらに描いていくにあた

り、映画で表現するのが難しい、言葉だからこそ描ける「実感」を、現象学や精神分析の影響を受けた質的心理学研究法であるエピソード記述や語り合い法で描こうとしています。前者は大倉先生の指導教官だった鯨岡峻先生、後者は大倉先生の確立された研究方法です。

一般的な発達心理学の質的調査では、具体的な行動を何回したのかといった、客観的に測定しやすい行動を中心に調査します。しかしそれでは描く側が確かに掴んでいるその場の雰囲気や、描かれる側から感じられるこころの動きを捉えることはできません。そのような「感じ」を捉えるため、エピソード記述や語り合い法では、まず描く側の主観をメタ的に見つめていきます。するとその「感じ」がどのようなものであったのか、少しずつ言葉になってきます。それはもちろん簡単なことではなく、初めは自分にしか分からないような記述になるかもしれません。しかしそのような身体的な「感じ」を描き出すことを諦めず、他者と了解可能なエピソードへとまとめられることができれば、それは従来の発達観、人間観を問い直すことのできる学知となります。「知的障害者のきょうだいが障害のある弟と共にあること」を描き出し、障害のある人との「共に生きていく形」に一つの答えを提示すること、

「共に生きていく形」という大きな問いに対する答えに少しでも近づきたいです。総人は学際的な学部ですし、専門や卒業論文のテーマを決める際にはとても悩むと思います。しかしそれは自分と向き合うチャンスでもあります。人に言っても理解されないかもしれないけれど、昔からちよつと引かかっている「何か」。総人・人環はそのような「こころのささくれ」と向き合える最高の場所だと思います。



日本シェイクスピア協会奨励賞

Within and Without the City Wall: The Theatricality of Marital Relations in Thomas Dekker and John Webster's *Westward Ho* (1604)

小嶋 ちひろ

Chihiro OJIMA

三重大学教養教育院准教授

私の専門領域は、一六世紀から一七世紀にかけて花開いたイギリス・ルネサンス演劇です。この時代の演劇といえばシェイクスピアが有名ですが、私はcity playというロンドンを舞台とした演劇ジャンルに注目し研究しています。市井の人々の活躍を描くcity playは主にロンドンの町中で上演されていました。観劇には日常からの逃避というイメージもあるかと思いますが、当時の観客は、自分の日常が演劇化された舞台を、日常空間と重なる劇場で観劇していたことになりません。

ルネサンス時代は「世界劇場」という考え方が広がった時代でした。この世界は舞台で人間はみな役者だという意識が浸透していたのです。私は、そのような時代におけるcity playの観劇体験に興味を持ち、研究を続けてきました。city playに対するこれまで

の批評は、ロンドンの政治、文化、経済体制に対する作品の批判的態度の分析が主で、city playの表象する日常には注意が向けられてきませんでした。そこで私の研究では、city playの日常の表象をテーマに、日常がどのように演劇として表象されているのか、反対に日常の演劇化によってどのような日常の演劇性が浮かび上がるのかといったことを明らかにしようとしています。

日本シェイクスピア協会で奨励賞を受賞した論文は、city playの1つ*Westward Ho* (1604)という作品における日常の演劇性の表象について論じたものです。本作品のあらすじは、ロンドンの市民妻が火遊びで男性と郊外へ繰り出すものの結局は貞節を守り、追いかけてきた夫とロンドンに帰るといふものです。市民夫婦のどたばた劇が郊外への移動と重ね合わせて描かれています。しかし従来の批評では、この二つの要素は別々に扱われることが多く、観客の観劇体験に沿った統一的な分析が欠けていました。そこで本論では、夫婦の移動の表象を当時の不貞にまつわる迷信と関連づけて分析し、*Westward Ho*の描く市民夫婦の演劇性を明らかにしました。

本作品では、妻に浮気されたかもしれないという夫の不安が描かれます。このような不貞のモチーフは、当時の演劇作品で盛んに用いられてきましたが、そこには不貞の構造に潜む演劇的な構図がありました。これまでに研究で指摘されてきた不貞の演劇的構図は、不貞を疑う夫が妻を監視するという、夫を観客の立場に置くものです。しかし私は、これまでほとんど論じられていないもう一つの不貞の演劇的構図を指摘しました。当時のイギリスには、寝取られ男、つまり妻に浮気された夫の額には山羊のような角が生えるという迷信が存在しました。この迷信は演劇的に見れば、妻を監視する立場であったはずの夫が、知らないうちに妻に「寝取られ男(cuckold)」という不名誉な役を押し付けられる構図を示しています。そればかりか額の角は、

夫が公の見世物にされる危険性すらあることを表しているのです。

本論では、*Westward Ho*においてこの寝取られ男の演劇性が夫婦の空間移動の表象を通して表現されていることを明らかにしました。本作品の市民妻は、この寝取られ男の演劇性を反映した演劇的主体性を發揮することで、夫の監視の目を逃れてロンドンから郊外へと繰り出します。妻は自ら考え出したプロット(遠方に預けている子供が病気になるなど)に沿って演技することで家を、そしてロンドンを出ることに成功するのですが、その中で何も知らない夫をプロットに巻き込んで必要な役割を演じさせるのです。

また寝取られ男の演劇性では、監視する立場にいたはずの夫が公共の目に晒される危険性がありますが、この見る／見られる関係のダイナミクスも*Westward Ho*では舞台空間を使って表現されています。家を出てからの妻の移動は、外部の目の届かない空間の移動として表現されます。そして最終目的地の郊外で、妻はついに観客の目も届かない楽屋裏の空間へと移動してしまふのです。その後、妻を追いかけた夫が舞台上で登場するのですが、ここで夫は、目の届かない空間で起きた妻の不貞(実際は濡れ衣)が広まれば自分が寝取られ男として公の笑い物になるということを認識させられます。そしてそれは奇しくも夫が舞台で観客の目にさらされているときなのです。

*Westward Ho*は、普段は隠されている夫婦間の演劇性を演劇ならではの手法で巧みに浮き彫りにしています。夫婦の見る／見られる関係がふとした瞬間に変容する可能性を観客の体験に沿って示しているのです。このようにcity playは当時の人々にとって滑稽でしかし切実な日常を映し出していたと言えるでしょう。今後も観客の生きた現実と個々のcity play作品との相互作用を見出ししていきたいと考えています。

国際会議 IJCAI-PRICAI2020の競技会 ANAC2020
(11th Automated Negotiating Agents Competition)
においてプロトコル部門：世界3位

研究者としての“人工知能”に対する 深い理解の重要性

— 私たちの受賞研究について —

細井 太智

Taichi HOSOI

共生人間学専攻 数理情報論分野 修士課程2年・HALU 代表

私たちは元々、研究室内の「勉強会（通称…HALU）」のメンバーでした。勉強会の中で、開発を通じて学べる人が多いだろうと考え、今回の大会に出場することになりました。

私たちが出場した国際会議 IJCAI-PRICAI2020 競技会 ANAC2020 The 2nd International Werewolf AI Competition では、「人工知能エージェントに人狼ゲームをプレイさせる」というのがテーマでした。競技会では、エージェントは開発者の指示を一切受けることなく、ゲームをプレイすることが求められます。競技会にはエージェント同士が人工の言語で会話する「プロトコル部門」と人間の言語で会話する「自然言語処理部門」があります。私たちは前者のエージェントを開発して出場しました。

予選では世界中から提出されたエージェントから勝率が高い上位15エージェントが選出されます。そして、決勝では15エージェントによる再戦をし、順位が決定されます。この結果、私たちは世界三位を受賞しました。人狼ゲームは「不完全情報ゲーム」と呼ばれるゲームのジャンルに含まれ、他のプレイヤーが行った意思決定の内容の真偽は観察することができません。そのため、元も子もないことを言うと今回の受賞は「運が良かった」からできたと思っています。

しかし、私たちは開発段階で、大きく確率に左右されることは百も承知でした。そのため、私たちがとった戦略は「少しでも勝率を上げる」というものでした。そこには大きく二つの戦略がありました。一つ目は、「戦況の分析」です。例えば、じゃんけん大会に参加する際に、事前に「今日はチョキを出す人ばかりだよ」と聞いていれば、「それじゃあグーを出すようにしましょう」となるはずですが、当然、グーやパーを出す人もいるはずですが、チョキを出す確率が高いのであればそれに合った戦略を採るのが最善でしょう。二つ目は「人工知能の弱さを突く」ことです。近年の人工知能は「パターン認識」と呼ばれるものが主流です。例

えば、赤くて丸いリンゴの画像をたくさん用意し、学習をさせることで計算機がりんごの画像におけるパターンを理解するようになります。この場合「青りんご」や「変な形のりんご」のようなイレギュラーな物体は認識することができません。このように、「必ずしもセオリー通りではない戦略」を採ることで他のエージェントをかく乱させようと考えました。

今回出場した世界大会を通じて、私たちは近年の「人工知能にむやみやたらにデータを放り込んで、欲しい結果を得るだけの研究風潮」の見つめなおし、そして「自身が扱うものに対して深い理解をしようとする姿勢」を学ぶことができたと思っています。開発メンバーである太上千人と小野くんはこの後修了して就職、私は（感染症の影響で延期になっていますが）外国で研究留学を予定しています。そのため、プロトコル部門に関しての開発は二〇二一年度の大会を以って一旦休止することになっています。私個人としては、メインの「画像認識」に関する研究を続けながら、次は学外の友人とともに「自然言語処理部門」での優勝を目指しています。（この自然言語処理部門のチームでは二〇二〇年度ファイナリスト、二〇二一年度世界三位を受賞しました。）

人間・環境学研究科（もちろん総合人間学部も）では「幅〴〵広い分野の知識」を身に着けるチャンスが与えられています。しかし、京都大学の学生として、そして一大学院生という小さな研究者として、トレードオフとも思える「深い〴〵高度な専門性」も身に着けることも必要だと思っています。京都大学でも特に自由な人間・環境学研究科の学風の下で「幅〴〵広い分野の知識」を学んでいく中で、「これだ!」と思っただけ絶対には離さずに、「深く掘り」してみることをおすすめします。日本最高レベルの教員たちがみなさんのサポートしてくれるはずですが、もちろん、自分から行かないと何も与えてくれないのが唯一の厳しいところなのですが。

近年では「人工知能」と言えば万能のツールのよう
に思われがちです。

果たして、人工知能を使うとはどういうことなので
しょうか？また、本当に万能なのでしょう

私たちは、研究開発をする上で「使う道具は理解し
てから使う」よう意識をしてきました。近年の人工知
能研究は「ブラックボックスの装置に何かデータを入
れたらうれいし結果が返ってきた」というものが多い
気がしています。当然、技術の恩恵を受けるとい
意味ではそうした手法が有効であるというの
も分かります。しかし、私たちは大学院生とい
う小さな研究者でもあるのです。自身が使う道具は、
可能な限りその中身を知らずから使うのがマナー
ではないでしょうか。同様な態度として、
数学で言えば「証明できない定理は使
うな」の感覚と似ているような気が
します。

第13回萬葉学会奨励賞

「助動詞マシの意味」をはじめとする
上代の文における句の相関およびそれ
に関わる助動詞の研究

古川 大悟

Daigo FURUKAWA

京都大学人間・環境学研究所博士後期課程3年

鰯雲を赤く染める夕焼けを見あげる。人影がないことを確かめてマスクを外し、秋の香りを吸い込む。脳裡に浮かぶのはパンデミックのない世界。月を眺めながら宴に興じ、ためらいなく旅に出て紅葉を楽しむ。二〇二一年の秋もありえただろうに——どうしてその世界が実現せず、この世界が実現したのか。反実仮想とは原理的に、いまの現実世界を、起こりうる（起こりえた）可能性の一つとして把握することである。愛する人を亡くした家持は、萬葉集で次のように詠った。

出でて行く道知らませばあらかじめ妹を留めむ関も置かましを（巻三・四六八）

「あの世へと旅立ってゆく道がわかつていれば、彼女を引き留める関所を置いたのに……。」

道がわかっていて彼女を引き留められるという仮想的な事態と、道などわからず引き留められないという現実事態が対比される構造である。ここでは可能性と可能性の比較がなされている。論理上は、「あの世への道を知っている（ゆえに関を置ける）可能性」と「道を知らない（ゆえに関を置けない）可能性」の二つが想定される。前者は当然ながら現実世界には実現せず、後者が実現している。前者の可能性は決して実現などしえないと了解しながらも、前者が実現してくればよかつたのに、なぜ後者が実現したのかと考えるのが、反実仮想の基本構造である。文法的に言い直せば、助動詞マシは「対象事態を可能性の一つとして提示し、別の可能性と比較する」ことを本義とする。むしろ、ここで言う「可能性」とは「実現可能」の意ではなく、論理上想定される「可能的」事態という意味である。

上代では「関も置かましを」のように、マシによって提示される事態が「実現されてほしかった可能性」に対応する。ところが時代が下るとやや異なる例が見られる。

「この風いまして止まざらましかば、潮上りて残るところなからまし。神の助けおろかならざりけり。」（源氏物語・明石）

「もしこの風がもうしばらく止まなかつたら、高潮が来て全てさらわれてしまっていただろう。神のお助けは並々ならぬものであったのだ。」

やはり反実仮想であるが、マシによって提示される事態は「実現されずに済んでよかった可能性」である。そのため、先に見たようなやりきれない思いの表明ではなく、むしろ安堵の表現となっている。このような例は上代には殆ど見られない。マシの用法が拡張していると考えられる。

「どうしようか、迎え取ろうか取るまいか、と思
い乱れなざる。」

これはいわゆる反実仮想ではないが、可能性の比較という枠組みに包摂される。「いかにせまし」は想定される複数の選択肢の比較検討であり、「迎へやせまし」は迎えに行くか行かないかという二つの可能性の比較検討である。このように古代日本語のマシは、一貫して「対象事態を可能性の一つとして提示し、別の可能性と比較する」ことを本義とする。その中で上代の用例は「実現されてほしかった可能性」の提示に偏在するのである。

古代日本語にはム・マシ・ベシをはじめとして、広義の推量を担う助動詞がさまざまに存在している。各助動詞の意味用法を細分化して記述する研究は十分に進められたが、助動詞相互の関係を体系的に説明しうるモデルは未だ提示されていない。マシはこれまで、「ムが現実においてある事態を推量するのに対し」事実に対する事態を仮想する」などと説明されがちであった。しかし、マシが事態を可能性の一つとして、すなわち相対化して提示する助動詞だとすれば、それは単純な意志推量作用を表すムとは全く質を異にするように思われる。本研究は古代日本語助動詞の体系を明らかにするための第一歩である。

上代にあつて、反実仮想する主体は何よりも目の前の「不可能」を見ていた。「関を置けない」現実を直視して、「関を置けたなら」という「可能」を仮想する。これは可能表現史にも関わる視点であろう。「不可能」を見ることで、反動的に「可能」が生じたということがありえないだろうか。やりきれない現実を直視することが、可能の始まりであるとしたら——。

夕焼けを背にして、また歩み出す。古代日本語助動詞の世界は秋の香りのように豊饒である。その解明に向け、末永く歩みを続けてゆきたい。

いかにせまし、迎へやせましと思し乱る。（源氏物語・松風）

2020年度第3回関西電気化学研究会奨励賞

酸素発生反応における Li-Ni 系複合金属 属酸化物触媒のカチオンミキシングの 解明

任 亜丹

Yadan REN

京都大学人間・環境学研究所環境学専攻博士課程3年

この度、二〇二〇年度第三回関西電気化学研究会において奨励賞を頂き、大変光栄に思います。本研究を進めるにあたり、内本喜晴先生をはじめとする研究室の方々ならびに関係各位にご助力いただき、厚く御礼申し上げます。今回の受賞を励みとして今後も研究活動に邁進していく所存です。受賞対象となった発表題目「Investigation of the cation mixing effect in LiNiO_2 during the oxygen evolution reaction」の内容について、解説いたします。

十八世紀以降の産業革命により、人類の生産力は上昇しましたが、一方で化石燃料の大量使用により、二酸化炭素などの温室効果ガスや有害物質が増加してきて、環境問題はますます深刻化しています。さらに、一九七〇年代の第二次オイルショック以降、エネルギーの効率的な利用が世界的に喫緊の課題となつてい

ます。環境問題への関心の高まりや炭素を含む化石燃料の枯渇により、持続可能なエネルギーの必要性が叫ばれています。最近では、太陽エネルギー、風力エネルギー、水素エネルギーなどの再生可能エネルギーが広く研究されています。水素は、地球上に豊富な資源であり、重量エネルギー密度が最も高いことから、電気と化学エネルギーを変換するための有望なエネルギーキャリアと考えられています。しかし、水素社会を構築するためには、効率的で環境にやさしい水素製造法を見つけることが不可欠です。

水素は、様々な原料から作られており、天然ガス、LPG、ナフサ、石油残渣といった炭化水素の水蒸気改質もしくは製鉄プロセスや食塩水の電解プロセス中に発生する副生ガスから生産されています。現在の水素製造法は大量生産が見込めないばかりか、製造過程で二酸化炭素が生成してしまうので、水素社会のビジョンに合っておりません。CO₂フリーの水素製造法を見つめるため、我々の研究室ではアルカリ水電解に注目しています。水の電気分解による水素製造は、二酸化炭素の生成がないクリーンな手法です。実用的な技術としてアルカリ水電解法は、20-30% KOH 溶液を電解質に使用し、隔壁を介してアノードとカソードが配置され、電解によって水素を製造します。水分解によって生成された水素は、化学結合によってエネルギーを蓄えることができ、燃料電池などのエネルギー変換で酸素と結合すると、さらに電力に変換することができます。

アルカリ水電解は、貴金属を使用しない比較的安価な材料で電解システムを構築でき、大規模な水素製造を行うことができます。しかし現状では、カソードでの水素製造に対してアノードでの酸素発生反応が遅いため効率が悪くなっています。したがって、電解槽全体のエネルギー効率を改善するには、高効率な酸素発生触媒の開発が必要です。また、高性能で高寿命な触媒の設計は今後の課題となっています。しかし、これまでの研究では、酸素発生反応における未知の吸

着・脱吸着中間体を含む極めて複雑な反応過程は、まだ解明されていません。酸素発生反応の本質的な反応メカニズムの解明は、高性能で高寿命な触媒を設計するための基本であり、今後も課題となっています。

本研究では、 LiNiO_2 の物性における触媒特性を調べました。本研究における「カチオンミキシング」とは、 LiNiO_2 層状岩塩型酸化物における、 Li サイトと Ni サイト間のミキシングを指しています。薬剤を用いた種々の焼成条件でカチオンミキシングの程度が異なる触媒を作りました。放射光と呼ばれる強い X 線を用いた解析により、作製した触媒の Li と Ni の占有率、つまり触媒のカチオンミキシングのレベルを明らかにしました。また、触媒の酸素発生反応活性を電気化学測定により調べた結果、カチオンミキシング量を増加させると、結晶からの Li 脱離を抑制でき、耐久性が向上することが分かりました。本研究により、図 1 に示すように、酸素発生反応中に Li が結晶から脱離することが触媒が劣化した原因だという知見が得られました。したがって、 Li の溶出を防ぐ材料設計が Li 含有金属酸化物を酸素発生反応触媒として活用するためには重要であると考えられます。この研究は現在、論文になりましたので (<http://dx.doi.org/10.1002/celc.202001207>)、興味をお持ちの方はぜひご覧ください。

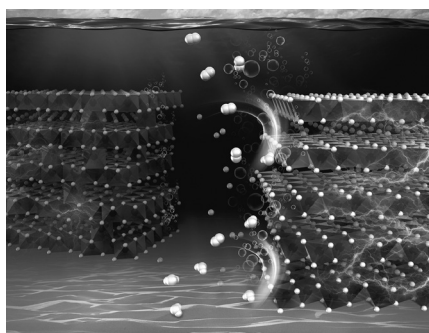


図1 酸素発生反応における Li の脱離

第30回キャラクターゼーション講習会 優秀ポスター賞 エチレンの水素化反応の触媒活性に対する白金ナノ粒子の表面再構成の影響 —XAS その場観察による検討—

藤田 正海

Masami FUJITA

日産自動車株式会社 パワートレイン技術開発試作部

吉田寿雄研究室を二〇二一年に修了いたしました藤田です。この度は、私が大学院生時代に行っていた研究を執筆する機会をいただきましたこと心より感謝申し上げます。

まず、最近何かと話題になっている触媒についてですが、その種類は分子触媒や固体触媒などいくつかに分けることができ、その中でも私は固体触媒と呼ばれる昔ながらの触媒について研究していました。固体触媒は化成品の大量合成などでも用いられる物質で、少量の金属で簡単な反応を起こすのに向いてはいるものの、実はその過程でどのような反応が起こっているのかよくわかっていないものも多いです。例えば、私が主に研究していた白金触媒もその一つで、今回の研究では白金触媒を用いた水素化反応などの水素ガスを

流通させる反応のメカニズムの一部を解明することができました。具体的にはアルミナの上に白金金属ナノ粒子を載せた触媒に水素ガスを流通させると白金ナノ粒子の表面の構造が変化することがわかりました。この実験は、大型放射光施設Spring-8で行われ、最新の設備を用いて既報の手法により得られたデータの解析を行うことで、白金ナノ粒子の表面に吸着する水素原子の定量を成功させることができました。定容法と呼ばれる従来の方法ではアルミナにも水素原子が吸着してしまうため、白金金属だけに吸着した水素原子を正確に定量することは困難でしたが、今回の放射光を用いた実験では白金金属にのみ吸着した水素原子を計測することができるため白金ナノ粒子の表面の構造が変化することまで突き止めることができました。

この発見が何の役に立つのかと疑問に思われる方も多いかもしれません。固体触媒を用いた反応は、先程も申し上げました通り工業的によく用いられているもののそのメカニズムはよくわかっていないものが多いです。そのため、本研究の結果がそういった触媒反応のメカニズムの解明の足掛かりになると考えています。例えば、白金ナノ粒子を用いたエチレンの水素化反応はどんな白金表面の構造をしていても同じ活性を示す構造鈍感反応といわれています。この理由については今まで様々な考察がされてきましたが、今回の研究で得られた結果と照らし合わせるとエチレンの水素化反応は反応中に白金表面に水素原子が吸着することによって最終的に同じ表面構造にされてしまうために起こる現象である可能性を考えることができます。これはあくまで可能性の一つでしかありませんが、このように本研究の結果が従来では行き止まりになってしまっていた研究にも新たな切り口を与えることができるのです。

ここからは、大学院で既に研究を行っている、あるいは進学をしたいと考えている後輩に向けて書かせて

ください。現在、私は触媒の研究から離れ、自動車に使われるエンジン部品の試作品がきちんと量産にも適応できるか設計図などの検討を行う言わば生産技術と呼ばれる職種で働いています。一見すると、分野外でしかも、研究職でもないのに大学院を修了しても意味がないように思われるかもしれませんが、決してそんなことはありません。

研究していくためには実験の計画を立て、実験を行い、その結果について照らし合わせ、再度改善のために考察検討を行う必要があります。この一連の流れをPDCAサイクルと呼びますが、社会に出てもこのサイクルを回しながら仕事を行うことが多いです。例えば、工場の稼働効率の改善業務では、不良品が発生する原因を検討し、該当する工程に手を加え、再度どのくらい改善されたか考察する力が求められます。技術職に限らず、営業や企画といった文系職でもこのサイクルをうまく回すことは重要であると言われています。また、日々の研究報告や学会の発表などで培ったプレゼン技術なども役に立っています。例えば、試作品の設計図の改善を提案する際、製造や研究員といった異なるバックグラウンドの人にどこに問題があるのかわかりやすく説明しないとけません。そのために適切な言葉で説明する技術やわかりやすい資料作りの技術が必要になるのです。また、これも顧客に商品を提案するような営業の仕事でも必要なスキルになると言われています。

大学院では専門知識を身に着けることが最大の目的なのですが、実際に大学院を修了して社会に出てみると、専門知識そのものよりもそれを身に着ける過程の方が大切だったとわかりました。研究がうまくいかず悩む経験や最先端の研究を学ぶ経験は必ずあなたを成長させてくれるはずです。もし、興味があれば大学院で研究をしてみるのもよいのではないのでしょうか。

第11回日本学術振興会育志賞

ウニの巣穴における「住み込み共生系」と共生者の進化の研究

山守 瑠奈

Luna YAMAMORI

京都大学フィールド科学教育研究センター 瀬戸臨海実験所 学振PD

の海岸に、時に非常に高密度に掘られます(図1a)。そして、この巣穴はただそこに穴が空いてウニが入っているだけではありません。

まず、ウニの巣穴はその巣穴を作った穿孔ウニが死んでしまった後も、構造としてそこに残ります。そうした穴はとても貴重な隠れ家なので、巣穴を掘らないウニ(二次利用ウニ)に利用されます。二次利用ウニは元々巣穴を掘っていたウニとは違い、身体が巣穴にぴったりとフィットしません。つまり、巣穴の中に空間ができます。この狭い空間は、磯に住む小さな生物たちにとっては鋭いウニの棘に守られた安全な環境で、魚類、貝類、甲殻類などの様々な小さな生物が住みつきます。このような巣穴を利用した居候生活を「住み込み共生」と呼びます。ウニを巣穴から引っ張り出して住み込み共生者を数えてみると、なんとその個体数は外の環境の約三倍にもわたることがわかりました。

さらに、二次利用ウニの住み込み共生者の中にはウニの巣穴にしか住まない種も居ます。ウニの巣穴の特異的な共生者の代表、貝類のハナザラは、巻貝の系統にありながら完全に巻きを失った笠型の貝殻を持ちます(図1b-c)。この笠型の貝殻は、貝の背丈を低くして、狭い巣穴の中でスムーズに動くためだと考えられます。そのうえ、このハナザラはウニとの共生に特化した行動も発達しており、宿主となるウニをどこまでも追いかけていくことが出来ます。このように、ウニは巣穴を介して磯の生態系を支え、共生者に特別な進化を促していることがわかりました(Yamamori & Kato 2017, Marine Biology)。

「穿孔者」としてのウニの働きです。

ウニは握ると痛いですよ。寿司の話ではなくて、殻の話です。それは、ウニが強靭な棘を持っているからです。この棘と海藻を大量に食べる鋭い歯を使って、一部のウニは岩を削って巣穴を掘ることが出来ます。ウニの巣穴は半球状をしていて、比較的柔らかい岩盤

ウニの共生者の探索は、まだまだ続きます。上記の研究は和歌山県や高知県などの温帯域で行いましたが、私は亜熱帯域の南西諸島でも巣穴の調査を行っています。その中で、ガンガゼモドキという死サンゴの隙間に住む有毒ウニを調べたときに、その体表に不自然なこぶが出来ていることに気づきました。そのこぶの中

にはガンガゼタマエボシという、漂流物や底生生物の殻などに付着して生活するエボシガイ類(甲殻類)の仲間が根を下ろすように付着していました(図2)。

このこぶは「ゴール」と呼ばれる、寄生/共生者が身を守るために宿主の体の一部を改変した構造です。このエボシガイについて詳しく調べてみると、なんとゴールを作るだけでなく、ゴール周辺に有毒な棘を密集させ、自らの周囲を鉄壁の要塞にしていることがわかりました。他者の体でなんて勝手なことを。さらに遺伝子を解析したところ、このウニにつくエボシガイはカニ類につく種類から進化してきたことが明らかになり、本種はウニとの共生生活に伴って、ゴール形成能力などの様々な機能を獲得したことがわかりました(Yamamori & Kato 2020, iScience)。

私はこれまでウニを取り巻く共生系を色々な角度から研究してきましたが、まだまだ報告出来ていない成果があり、そしてこれからも新しい発見は続いていると思います。本記事を読んでくださった皆さんも、海に行かれた際には是非、ウニの巣穴を覗いてみてください。きっと、面白い生物が見られると思います。



図1 ウニの巣穴と、巣穴に特異的に住み込み共生する巻貝のハナザラ。a. 岩盤に穿たれた多数のウニの巣穴；b. ウニの巣穴に共生する2匹のハナザラ；c. 横から撮影したハナザラ

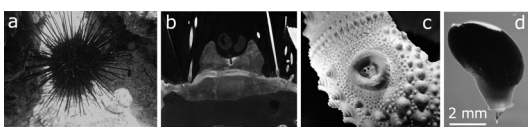


図2 有毒ウニの体表にゴールを形成するガンガゼタマエボシ。a. ガンガゼモドキ；b. CTスキャンによるウニの殻とゴールの断面画像；c. ゴールを形成されたウニの殻を次亜塩素酸で漂白したもの；d. ガンガゼタマエボシ

日本植物分類学会口頭発表賞

超苦鉄質土壌におけるアキノキリンソウの平行的な土壌適応に関わる Mg^{2+} 輸送体遺伝子

三木 綾乃

Ayano MIKI

愛媛県庁（学芸員）採用内定

生物の進化をもたらす力に自然選択がある。自然選択が働く、適応度（生涯で残す子の数の期待値）を高める形質、つまり、持っている生存や生殖に有利になる形質を司る遺伝変異の集団中における割合が高くなる。一方で、適応に関与する形質を支配していない中立的な遺伝子は、自然選択の影響を受けず、偶然の作用で集団中の割合が決まる。したがって、生物のゲノムには自然選択の影響を受ける領域と中立領域が混在しており、それらが異なる遺伝構造を示すことがある。

自然選択がそこに生育する植物に対し強く働く環境のひとつに、超苦鉄質土壌がある。超苦鉄質土壌は Mg^{2+} や重金属を過剰に含み、さらに乾燥しやすいという特徴をもつため、そのような環境でも生育できる特殊な植物が分布している。そうした植物の一つにキ

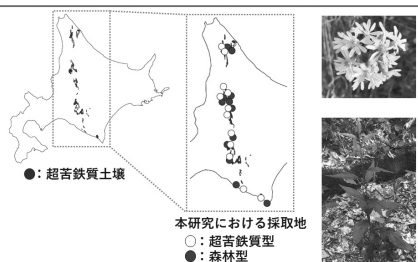
ク科の多年性植物、アキノキリンソウがある。通常は林床などの湿った日陰にみられる（以下、森林型）が、超苦鉄質土壌に生育するもの（超苦鉄質型）もまれにいる。超苦鉄質型は森林型に比べ、乾燥に耐えるために狭葉化しており、またはるかに早い時期に開花する。北海道には超苦鉄質土壌が島状に分布しており、各地の超苦鉄質地帯で生態的に類似した超苦鉄質型が現れている（図1）。両生態型は、数十メートルという近い距離に生育していることから受粉などによる中立な遺伝子流動が起きうる一方、各土壌から自然選択を受けて適応的な個体が選択されると考えられる。こうした背景から、超苦鉄質地帯の内外に生育するアキノキリンソウのゲノム構造は領域によって異なる遺伝構造をもつ可能性が想定された。

そこで修士課程での研究では、二つの生態型間で土壌の種類に対応した非中立な遺伝変異が存在するのか、その非中立変異は各地の超苦鉄質型に共通して存在するのか、中立なゲノム領域と遺伝構造が異なっているのかを明らかにすることを目的とした。本研究では超苦鉄質土壌には Mg^{2+} が過剰に含まれることから適応候補遺伝子として Mg^{2+} 輸送体遺伝子に着目した。塩基配列を分析した結果、 Mg^{2+} 輸送体遺伝子の上流領域に構造変異が存在し、さらにその領域が超苦鉄質型と森林型の集団で、地域を越え、土壌の種類が同じ場所に共通して分化していると分かった。またこの候補遺伝子は、森林型の集団では祖先型ホモ接合に、超苦鉄質型では派生型ホモ接合に偏り、土壌の種類に応じた構造を示した。いっぽう中立な遺伝子における遺伝構造は、土壌の種類に関係なく地理的に近い集団同士で類似しており、単純な地理構造を示した（図2参照）。適応遺伝子は、北と南という異なる地域にありながらも、生育している土壌の種類が同じもの同士で対立遺伝子頻度が類似している。一方中立遺伝子は、土壌の種類に関係なく、同じ地域にあるもの同士で対立遺伝子頻度が類似している。このように地域によ

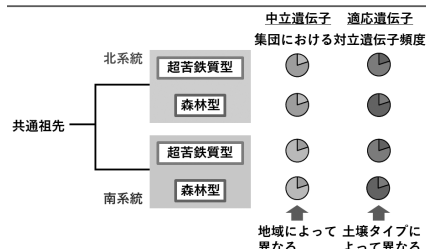
て中立領域の対立遺伝子頻度が異なったことから、アキノキリンソウの超苦鉄質型は「地質の島」ごとに派生した、つまり平行進化をしたこと、そして本種が超苦鉄質土壌に進出する際、 Mg^{2+} 輸送体遺伝子が各地で自然選択を受け、平行的な土壌適応に共通して関与したことが示唆された。

それでは、なぜ遺伝構造は中立遺伝子（地理構造を示す）と適応候補遺伝子（土壌の種類に応じた構造を示す）で異なったのだろうか。このことについて考察するには、遺伝子流動の下で選択が起きた際のゲノム分化を考慮する必要がある。選択が働かないとき、遺伝子流動により集団間での遺伝的分化は妨げられているが、選択が及ぶと特定のゲノム領域だけが顕著に高い集団間分化を示す。自然選択による分化がゲノム全体に及ばない理由として組換えの効果と考えられる。組換えが起こると遺伝子間の連鎖が断ち切れ、同じ染色体上でも独立した多型パターンを示す。アキノキリンソウは他殖性の生物であるため組換えが起こりやすい。組み換えによって、土壌適応に関わる遺伝子群以外のゲノム領域は、適応遺伝子と連鎖していないながらも特定の型への偏りが起きず、土壌の種類と関連しない遺伝構造を示したと推察される。

(図1) 北海道のアキノキリンソウ



(図2) 適応候補遺伝子と中立的な領域の遺伝構造の違い



第68回日本生態学会大会 ポスター賞

植物個体群分野 最優秀賞

後氷期の気候温暖化が引き起こした分布末端集団の孤立化 —ゼンテイカ群での事例—

増田 和俊

Kazutoshi MASUDA

人間・環境学研究科相関環境学専攻修士課程2年

全ての生物は種が生存し、子孫を残すのに適した環境条件を持っています。そうした条件を満たす場所は、時代とともに大きく移り変わってきました。例えば、約二六〇万年前から現在に至るまでの第四紀は寒冷期と温暖期が数万単位で繰り返されてきました。北半球に分布する温帯性生物は寒冷期には分布を南に縮小させ、温暖期には分布を北へ拡大させることで、そのような気候変動に対応してきたと考えられます。しかし、気候変動がどの程度種の分布に影響を与えたかについては未解明な点が多く研究の余地があります。過去に生物が辿った歴史を直接調べることが出来ません。しかし、その歴史は痕跡としてDNAに刻まれています。従って生物の遺伝的特性を調べることが出来ます。辿ってきた歴史の一部を推定することが出来ます。

本研究ではゼンテイカという植物を対象として、DNAの変異情報を用いた遺伝分析と環境データを用いた古分布予測を組み合わせることで、寒冷期と温暖期のどちらが種の遺伝的特性に大きな影響を与えたのかを検証しました。

ゼンテイカは冷温帯〜高山帯に分布する多年生草本です。別名ニッコウキスゲとも呼ばれ、ユリのような黄色く大きな花は夏山を彩ることも有名です。本種は極東ロシア・中国東部・朝鮮半島と、日本では北海道から京都府と島根県隠岐の島に分布します。東日本では分布密度が高く、山地性草原や海岸斜面に大集団を形成する一方で、西日本では分布密度が低く、樹木の入り込めない岩壁に小集団が辛うじて生き残っているのみです。特に分布南端の京都の集団は近隣集団から直線距離で六〇キロメートル以上地理的に隔離され、分布西端の隠岐の集団に至っては海を隔てて二〇〇キロメートル以上隔離されています。また、ゼンテイカは熟した果実が裂けることで直径六〜七ミリの種子が散布されるといふ重力散布の性質を持つため、分布を急激に拡大させることは考えにくい植物です。従って、現在のゼンテイカの特徴的な分布パターンを考慮すると、その遺伝的特性には過去の気候変動の影響が強く表れているのではないかと考え本種を研究対象としました。

まず、遺伝分析を行うためマイクロサテライト領域という進化的に中立な遺伝子座を用いて、国内の分布域から網羅的に収集した四一集団七三七個体の遺伝子型を決定し、集団間の関係性を調べました。その結果、北海道・東北・中部・近畿・京都・隠岐という六つの地域集団が存在することが分かりました。次に、地域集団ごとの遺伝的多様性を計算しました。遺伝的多様性は一集団当たりどれだけ多様なアレルを持つかを表す指標で、集団が過去に経験した個体数増減の影響が反映されると考えられます。分析の結果、分布の中心

である東北・中部では遺伝的多様性が高く、分布末端の京都・隠岐では遺伝的多様性が低い傾向が見られました。これは分布の中心地域では長期間安定して集団が維持されていたのに対し、分布末端地域では過去に個体数が大きく減少するようなイベントを経験した可能性を示唆しています。さらに各地域集団の過去の個体数変動を推定したところ、分布末端地域では個体数が大きく減少したこと、特に京都では約五千年前以降の温暖期に個体数減少が起こったことが示されました。次に、生態ニッチモデリングで古分布予測を行いました。生態ニッチモデリングとは分布位置情報と環境データからある種の分布確率を推定する解析方法です。本研究では現在、温暖期（約六千年前）及び寒冷期（約二千年前）という各時代の（推定された）気温・降水量等を環境データとし、分布予測を行いました。その結果、寒冷期から温暖期にかけて平均気温が七度上昇することで、分布適地が南で減少し、分布末端集団が孤立したことが分かりました。さらに復元された過去の分布確率と遺伝分析の比較相関解析を行ったところ、ゼンテイカの現在の遺伝的多様性は温暖期の影響を強く受けている可能性が示唆されました。

この結果は寒冷期が現在の遺伝的特性に大きな影響を与えたとされる、温帯性樹木で行われた多くの先行研究と異なるものです。その理由として、ゼンテイカは寒冷気候に比較的強いため高緯度地域で多様性を大きく失わなかったことや、明るい環境を好む草本であるため温暖な低緯度地域で広葉樹との種間競争に負けて集団が隔絶してしまったことが考えられます。

また、分布末端集団はユニークな遺伝的特性を持ちながらも、今後の気候温暖化によっては分布適地がさらに減少し最終的には絶滅に至る可能性も考えられます。本研究で得られた知見はこのような貴重な集団を後世に残すための保全戦略の策定にも役立つと考えています。

日本化学会第101回春季年会学生講演賞 担持ロジウム触媒による光熱変換型 メタンドライリフォーミング反応

高見 大地
Daichi TAKAMI

京都大学大学院人間・環境学研究所相関環境学専攻博士課程2年

この度、日本化学会第一〇一回春季年会(二〇二一)学生講演賞を頂き、大変光栄に思います。本研究を進めるにあたり吉田先生、山本先生をはじめとする研究室の皆様、関係者の皆様には大変ご助力いただきました。この場を借りてお礼申し上げます。今回の受賞を励みに今後もより良い研究を目指していく所存です。受賞対象になった発表題目「担持ロジウム触媒による光熱変換型メタンドライリフォーミング反応」の内容について、解説いたします。

近年、増加する大気中の二酸化炭素濃度や化石資源の枯渇が問題視され始め、世界的に二酸化炭素の排出量削減が目指されています。その解決策として、二酸化炭素を未使用炭素資源と捉えて、他の有用化合物に変換するための技術開発が切望されており、二酸化炭

素の資源化技術が精力的に研究されています。メタンドライリフォーミング反応($\text{CO}_2 + \text{CH}_4 \rightarrow 2\text{CO} + 2\text{H}_2$)はその一つです。この反応は二酸化炭素とメタンから一酸化炭素と水素を生成する反応であり、生成物である一酸化炭素と水素の混合ガスは合成ガスと呼ばれFischer-Tropsch法により燃料やプラスチックなどの原料になります。二酸化炭素を削減しつつプラスチックを作るような夢のような技術ですが、この反応の実用化には様々な課題があり、その一つがこの反応を十分に進行させるためには触媒存在下で八〇〇度程度の高温が必要になるということです。この反応の進行に必要なエネルギーを化石燃料由来の熱エネルギーで賄ってしまえば化石燃料を消費し燃焼によって二酸化炭素を排出してしまいます。もしこのエネルギーを再生可能エネルギーである太陽光エネルギーから得ることができれば、燃料の消費や燃焼による二酸化炭素の排出を抑制することができます。より効率的な二酸化炭素の資源化が可能になります。そこで我々の研究室では太陽光の利用を目指した可視・近赤外照射下でのメタンドライリフォーミング反応の研究を行ってきました。

これまでの研究から酸化アルミニウムにロジウムをナノ粒子として担持させた触媒($\text{Rh}/\text{Al}_2\text{O}_3$)が可視・近赤外照射によってメタンドライリフォーミング反応に高い活性を示すことを明らかにしてきました。この触媒は活性点であるロジウムナノ粒子が光を吸収することで高温化し反応を進行させる光熱変換触媒として機能していると考えられましたが、可視・近赤外照射下でのロジウムナノ粒子の温度は明らかではありませんでした。

このような局所的な温度を測定する方法としてX線吸収分光法(XAS)の活用が報告されています。そこで本研究では、大型放射光施設Spring-8にて可視・近赤外照射下メタンドライリフォーミング反応

中の触媒について、時間分解能の高いDispersive XAS(DXAS)を連続して測定することによりミリ秒単位の温度の測定を試みました。その結果、光の点灯/消灯に伴い急激に変化するロジウムナノ粒子の温度を測定することに初めて成功しました(図1)。可視・近赤外照射によりロジウムナノ粒子は急速に加熱され光照射開始からおよそ一五秒で三五〇度になっていることが明らかになり、暗中の触媒活性との比較から担持ロジウム触媒が光熱変換触媒として機能していることがわかりました。また、担持させているロジウムナノ粒子の粒子径が大きい触媒では小さい触媒に比べて可視・近赤外照射下での温度が高くなることもわかりました。この粒子径による温度の違いはロジウムナノ粒子から気相への熱伝達や熱放射などの熱の散逸過程や吸熱反応であるメタンドライリフォーミング反応の進行による違いであると考えられます。

本成果は光照射下での触媒反応に新たな知見を与える結果であると考えられ、今後はロジウムナノ粒子からの熱の散逸過程での過程が支配的かを明らかにし、光照射により効率的に活性点を加熱することができるよう触媒設計を行い、より高効率にメタンドライリフォーミング反応を進行させる触媒を開発していきたいと考えています。また、XASの性質上今回の測定では触媒厚さ方向の平均の温度しか得ることができていません。そのため、測定できなかった照射面の表面温度や酸化アルミニウムとの温度差について深さ分解XASやXRDなど他の測定を組み合わせることで明らかにしていきたいと考えています。

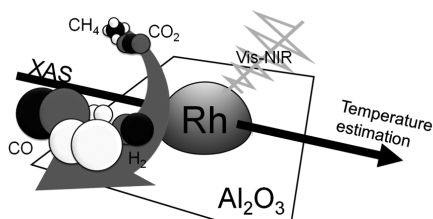


図1. 触媒であるロジウムナノ粒子の温度の測定

ポストコロニアルの視座から百年を振り返る

～インド、アイルランド、アラブ世界～



岡 真理一 Mari OKA
一九六〇年生まれ。
人間・環境学研究所共生文明論講座
比較文明論講座・教授。
専門は、現代アラブ文学、パレスチナ問題。



池田 寛子 Hiroko IKEDA
一九七二年生まれ。
人間・環境学研究所共生文明論講座
文化社会論講座・講師。
専門はインドの近現代史。



パッラヴィ・バッテ Pallavi Bhatte
一九七二年生まれ。
人間・環境学研究所共生文明論講座
文化社会論講座・講師。
専門はインドの近現代史。

ポストコロニアルの視座から百年を振り返る～インド、アイルランド、アラブ世界～

岡：本日は、二〇一五年に本研究所に特定講師として着任し、二〇二〇年一〇月より専任講師になられたパッラヴィ・バッテ先生をお迎えし、インド近現代史がご専門のバッテ先生を中心に、池田寛子先生と私の三人で座談会を開催いたします。池田先生はアイルランド文学、とくに詩がご専門、私は現代アラブ文学とパレスチナ問題が専門で、人文学という点以外、共通点がない三人のように見えますが、アイルランド、インド、アラブ世界、これら三つの地域を貫いているのが、大英帝国による植民地支配の歴史です。

本誌は二〇二二年春刊行ですが、百年前の一九二〇年前後、中東世界では第一次世界大戦でオスマン帝国が破れ、英仏が東地中海のアラブ世界を植民地分割しました。一九二二年、パレスチナでは国連委任統治という名の英国による植民地支配が始まり、一九世紀末から英国の軍事占領下にあったエジプトでは、一九一九年、独立を求めて全人民が蜂起し、一九二二年に名目的な独立は得るものの英軍の駐留は続きます。

同時期、英国支配下のアイルランドでは独立戦争（一九一九―一九二一）が起こり、現代に続く北アイルランド問題が生まれます。インドも第一次世界大戦後、自治権が与えられるも、エジプト同様、名ばかりのもので、独立運動が活発になっていきます。

東アジアに目を転じれば、朝鮮では日本からの独立を求める声が広がり（三・一運動）、世界各地で人々が、自由と平等を求め、声を上げ闘うというグローバルな歴史の同時代性がダイナミックに展開されていました。本座談会ではポストコロニアルの視点から、これら三地域について、とくにバッテ先生からインドの状況について詳しくお話をうかがいたいと思います。

まず、植民地主義の観点に絡めながら、自己紹介をお願いします。

バッテ：日本では八月一日という日と誰もが終戦記念日を想起しますが、日本からおよそ六〇〇km西に離れたインドの場合、この日はイギリス植民地支配からの独立記念日で、厳密に言えば印パ分離・独立の日に当たります。そして今年二〇二一年は、英領インド統治終焉の一九四七年から七五周年目を迎える記念式典が首都ニューデリーのラール・キラー（赤い城塞）でおこなわれ、つい先日、私も自身の毎夏の恒例行事として式典のライブ・ストリーミングを研究室のPCで見えています。

私の研究テーマのひとつは、約一世紀間にわたるインド独立運動史です。従来のナラティヴは、いわゆる「独立の父」ガンディーの指導下で実施された国内の運動にフォーカスを当てるものですが、私の関心はこれに留まらず、独立運動の地球大



の展開、すなわち多くの国々と地域を巻き込んで繰り広げられた文字どおりのグローバル、そしてトランスナショナルな独立運動の様相にあります。より広い文脈では、「民族・社会運動」「思想的越境」「移民史」「ディアスポラ」「ネットワーク史」「二〇世紀史」「記念顕彰」が研究上のキーワードになるでしょうか。

池田…私は大学で英文学を専攻しましたが、英文学史の片隅に収められたアイルランドの文学に惹かれるようになりまして。一九世紀末以降の英語による作品を中心に読んできましたが、その背後には古くからアイルランド語で紡がれてきた神話や伝説、アイルランド語の語りの伝統があることを知り、アイルランド語も学び始めました。アイルランドに興味を持った最初のきっかけは、学部の時の英文学史の授業で教授から「イギリスで妖精が信じられなくなっていた頃にもアイルランドでは妖精は生き延びていた」ということを聞いたことです。三回生の時にイギリスとアイルランドを一人旅し、アイルランドにより長く滞在しました。アイルランドに妖精はいましたか、と聞かれたことがあります。人懐っこいアイルランドの人たちが妖精だったのかもしれない、と思います。田舎のパブでは人々が歌い、「物語」を語ってくれる人の多い国でしたが、経済的な急成長を遂げて、国そのものはずいぶん変わりました。

現在アイルランド共和国はイギリスから独立していますが、一九二二年まではイギリスの一部でした。二〇二二年にどのように一〇〇周年が演出されるのかが注目されます。イギリスのアイルランド植民地化とは、何よりも物理的にアイルランドを制圧し、その土地をイギリスのものにすることで。精神的にもアイルランドをイギリス化し、合併しようとする同化政策が取られ、これが一三世紀初め頃からおよそ七〇〇年間続きました。清教徒革命以降プロテスタント国となっ

たイギリスは、カトリックを信奉するアイルランドを改宗する必要も感じることに、カトリックへの弾圧も行われました。イギリスによるアイルランド支配を確立、徹底するために、アイルランドの英語化も推し進められました。

本日はとりわけインドの言語状況についてバツテ先生からたくさんお話をうかがうことができるのを楽しみにしています。アイルランドの土着の言葉といえどアイルランド語ですが、インドでは複数の言語がせめぎ合っていますね。

岡…現代世界は、近代五〇〇年にわたるグローバルな植民地主義の歴史の上に成り立っており、私たちは依然、植民地主義の歴史的遺構のなかで生きている——それがいわゆる「ポストコロナル」の世界認識ですが、バツテ先生、ポストコロナルの観点から見たインドについて、もう少しお聞かせください。

バツテ…インドの「コロナアル・ヒストリー」の問題を考えてみますと、単に大英帝国の「Jewel in the Crown」としての観点だけでは語り尽くすことはできません。大英帝国だけでなく、英国によるインド支配の歴史、あるいは英国の支配の歴史と共にあった他の西欧諸国（ポルトガル、オランダ、フランス）の海外拡張と植民地事業との関わりも視野に入れる必要があります。

たとえば、インドから見た場合の「ゴアの解放」、ポルトガルから見れば「ゴアへの侵攻」というポルトガル領インドの解放／維持をめぐる問題です。「忘れられた独立闘争」とも言われるこの政治問題の公的な解決は、英国支配からの独立達成以降三〇年近くを経た一九七四年のことでした。とはいえ、「八月一五日の独立」に特別大きなシンパシーを持たないゴア州の人々がいるのも事実です。

このように過去への向き合い方に温度差があったり、人々のアイデンティティ、とりわけ言語・宗教・文化的アイデンティティのあり方が旧宗主国との関係の歴史に左右されることもあります。インド亜大陸内のみならず、世界に散らばるインド人・インド系ディアスポラの場合も同様です。

岡…独立後も、喉に刺さった小骨のように残された植民地の飛び地という問題。香港問題は、まさしくそれですね。歴史的文脈は異なりますが、キューバにおけるアメリカの租借地で米軍基地が置かれているグアンタナモも、まだキューバに返還されず、九・一一以降は、「テロリスト」容疑者が拘留され、人権の番外地として現在なお機能していることが思い出されます。池田先生、アイルランドはいかがでしょう。

池田…脱植民地化以降のアイルランドでは、イギリスの支配下で迫害されてきたカトリック教会が大きな力を持つことになりました。第二次世界大戦では中立の立場を取り、国際的には孤立し、経済的には低迷を続けました。EUとの緊密な関係を結んできたアイルランドは、目下多くの移民を受け入れ、民族的な多様化が進んでいます。二〇一七年から二〇二〇年までの首相であり現在の副首相レオ・バラツカー氏の父親は、バツテ先生の故郷のインドの出身です。移民の子の首相就任は日本ではなかなか起こりそうにはなく、また、アイルランドでも少し前であれば起こりえなかったことです。アイルランドの今を象徴しています。

現在、独立後のアイルランドで絶対的な力を持ち続けたカトリック教会の地位の低下は著しく、また、女性の社会的地位は向上してきました。独立直後は家長の社会が保たれ、公務員の男女が結婚すると女性の方が仕事を辞めなければならなかったほど、女性は家庭に、という風潮がありました。イギリス支配によっ

てアイルランド人の自由は抑圧されてきましたが、イギリスから独立すればすぐに平等で個人の自由が尊重される社会が実現されるといっわけではなかったという事です。

岡…中東世界の場合、独立は新たな抑圧の始まりを意味しました。体制の如何を問わず、多くの国が独裁国家となります。一〇年前、チュニジアに端を発する一連の革命がアラブ世界に瞬時に燃え広がったのも、国民が「パンと自由と人間の尊厳」を奪われているという状況がこの地域で何十年と続いていたからです。チュニジア、エジプト、リビアなど、独裁者を放逐した国もありますが、シリアは内戦となり、何十万という市民が殺され、国民の半数が故郷を追われ、四分の一が国外難民となったことは記憶に新しいと思います。

池田…脱植民地化がもたらしたものは国ごとに違いますが、共通項というべき現象の一つに「英語化」がありますね。脱植民地化を経て多くの国が英語を公用語と定めているのは、イギリス帝国主義の一つの帰結です。アイルランドでは英語が日常的に話されているのですが、実は第一公用語はアイルランド語です。アイルランド語はたいへん微妙な立場にあります。英語はアイルランドの経済的發展に大きく貢献してきました。イギリスがEUから脱退した現在、EU圏で英語話者が最も多い国はアイルランドです。他方、アイルランド語はナショナル・アイデンティティの象徴として保護されています。義務教育においても必修教科、大学入試にも必要な場合が多いのですが、だからと言って皆が流暢に話せるわけではないという状況があります。日本における英語に少し似ています。

岡…英米より学費が安いということで、かつて、ダブ

リンの大学に留学して、英語とアイリッシュ・ダンスをものにしてきた学生がいました。アイルランド語の話者はどれくらい、いるのですか？

池田…日常的にアイルランド語で暮らしている人たちはいますが、人口の二パーセント程度しかないといわれます。現在、アイルランド各地にアイルランド語使用地区と認定されている地域があり、そこに住むアイルランド語話者は過疎化に伴い減少傾向にあります。しかし、アイルランド語を使用したネット上のコミュニケーションには国境もなく、SNSでの交流は盛んだということです。言語としてのアイルランド語は英語と全く違います。英文学より長いとされる一五世紀以上の文学的伝統を有しており、読者が限られるという悩みを抱えながらも、今でもアイルランド語で詩や小説が生み出されています。アイルランド語に深い愛着を抱く人もたくさんいます。言語はそれぞれ固有の世界観に基づいているといわれますが、アイルランド語は目に見えない世界を内在させた言葉だといわれます。たとえば、テントウムシは英語ではLadybirdですが、アイルランド語ではBain Deとって、「神さまの小さな牛」を意味する名前と呼ばれています。神々のいる別世界を前提にした名前のように感じられます。アイルランドは異界伝説の宝庫です。

岡…まさに妖精の世界ですね。

バッテ…私は時折、日本人学生から「インドでは、いったい誰が、またどのくらいの人数が英語を話すのか？」と質問されます。シンプルな質問ですが、これに答えることはそう簡単ではありません。あらゆる角度からの検討や考察が求められるからです。

二〇一一年の統計によると、英語を第一言語かつ母語とするのは二五万六千人、第二言語は八三〇〇万人、

第三言語は四六〇〇万人とのことです。

一八五七年に起きた「セポイの反乱」とも呼ばれる、インド大反乱の後、イギリスがインド支配を確立して思い知らされたことは、多様な文化・言語を持つ数百万の民に対する統治の困難さでした。そうしたなか、インドの教育面に新たな転機をもたらしたのが、一八三五年の英語教育法の土台づくりに影響を与えた政治家のトマス・マコーリーです。教育政策の一環から、政府による教育面への援助はすべて、英語の使用と西洋式学問を採用する学校と大学の維持に向かいました。またこの方針は「新たな反乱が惹き起こされるのでは？」というイギリス植民地官僚側の恐怖感や懸念にも対応するものでもありました。マコーリーにとつては、英語を媒介として「有用な知」をあまたのインド人に授けることが大切であり、それはインド古来の学問や在地語の発展よりも重視されるべきものと思われるわけです。結果的に、マコーリーの決定で、ごく少数のインド人だけが教育を受ける対象になりました。インド人全体に教育を授けた場合、植民地政府の財源を超過してしまうからです。こうして、英語は一部のエリートのみが得られる「特権」となりました。その意味でインドにおける英語の歴史は、帝国のポリテクスと複雑に絡み合った植民地支配の歴史を想起させるものでもあり、権力と抵抗、侵攻と併合、服従とその脱却にまつわる議論を喚び起こすものであり続いています。

ただし現在のインドでは、英語と英国のインド支配の歴史を分けて考えるようになりつつあるのも事実です。というのも、インドはアメリカ合衆国に次いで最多の英語話者を擁する国であることを誇ってもいるからです。この大規模な英語話者があればこそ、インドはグローバル世界の「恩恵」を享受できるユニークな地位を得ているわけです。



池田…英語化による「恩恵」という点は、アイルランドも同じです。アイルランドはアメリカの多数のIT企業の誘致に成功し、一時はケルティック・タイガーと呼ばれるほどの経済的繁栄を遂げましたが、その一つの要因として、先ほど申し上げましたとおり、EU圏で最も英語話者の多い国であったことが挙げられています。

バッテ…英語の話者数の話に戻ると、約一三億人という人口規模で見ると、英語を母語とする人たちはごく一握りで、流暢に操れる人は一〇パーセント以下とされます。

インドにおける英語の位置づけや役割について補足すると、公用語のヒンディー語は南インドではやや受け入れ難い存在であり、その反面、英語はインド国内の南北問題に起因する複雑な感情を起こさせない言語として見なされています。

インドにおける英語は、中央政府と各州を結びつける政治面の言語として役割を担い、とりわけヒンディー語が通じない地域では欠かせません。経済界の主要言語であり、教育面も同様です。ほぼ全土において、いわゆる名門大学や私立学校の授業で用いられ、卒業生の三分の一は英語を話すことができます。英語による出版物も影響力をもち、学術界、特に理系分野で顕著です。

またインド人の多くは、英語の文学作品、特にインド人による作品の熱烈な愛好者であり、英語のラジオ・TV番組・音楽・映画・劇についても同様です。宗教・階層・ジェンダーの領域でも、英語の能力は重視されています。

岡…中東世界の場合、植民地支配が言語面で大きな影響を及ぼしたのは、フランスの植民地だったマグリブ（西アラブ）地方ですね。とりわけ一三〇年にわたり

フランスに支配されたアルジェリアでは、知識人の著述言語はフランス語でした。カテブ・ヤシンは独立戦争期のアルジェリアを代表する作家ですが、フランス支配から解放を求める彼の作品が、フランス語でしか書かれえないという矛盾をはらんでいました。一九一三年にエジプトで刊行されたムハンマド・フセイン・ヘイカルの『ゼイナブ』が一般に、アラビア語で書かれた最初の長編小説とされていますが、アルジェリアで最初のアラビア語小説が書かれたのは独立後一〇年以上たった一九七〇年代になってからです。東アラブ世界とは実に半世紀以上もの開きがあります。

バッテ先生、インドにおける民族言語、少数言語の状況はどのようなものでしょうか。

バッテ…インドでも少数言語や方言が消滅の危機に曝されています。ひとつの理由として、いくつかの部族が日々の生き残りのため、より支配的な言語、すなわち、英語はもちろんのこと、ヒンディー語、ベンガル語、テルグ語、マラーティー語、タミル語などを選択しつつあるからです。

一方、文化的、精神的アイデンティティを維持するために、地域ぐるみで少数言語の保護を口承でおこなう取り組みも進められています。少数言語としては、ドラヴィダ語族のゴーンデー語、シナ・チベット語族のマニプリ語などが知られています。一般に部族の諸言語は文字を持つ伝統がありませんでしたが、最近ではアルファベット表記を採用したり、周辺地域の文字を借りることも試みられています。

「少数」言語と言っても、一三億人超の人口を擁するインドは、世界の他の地域と比べて特殊なケースもあります。たとえば、インド・ヨーロッパ語族に属するサントラル語は、五〇〇万人以上の話者がいるとされています。二〇一一年の統計によると、一万人以上

の話者を持つ言語は二七〇言語と言われ、そのなかで英語を母語として使用する話者の総数は上から四四番目に位置します。また憲法が公式認めているのは、二言語となっています。

岡…インドの紙幣には、インドの一七の言語で額面が印刷されているのですよね。

中東のマイノリティ言語ですが、シリア出身で、ドイツ在住のジャン・ドストというクルド人の作家がいます。ほんの数キロ北で生まれていたら、自分はトルコ人とされトルコ語をしゃべっていたら、と語っています。一〇〇年前の植民地分割によって分断されたクルドイスタンの現状です（トルコでは長らく、クルド語という言語の存在を自己が否定されてきました）。ドストは母語のクルド語で著述する傍ら、自作をアラビア語に翻訳してもいます。アラビア語は自分にとって母語と同じように大切な「乳母の言語」だと彼は言います。

アラビア語はアラブ世界の主要言語ですが、イスラエルではマイノリティ言語になります。一九四八年に、七〇万人以上のパレスチナ人を民族浄化することで建国され、「ユダヤ人の民族国家」と自己規定するイスラエルでは、ヘブライ語が国語です。しかし、総人口の二割は民族浄化に抗い故国にとどまったパレスチナ人です。彼らは母語であるアラビア語とヘブライ語のバイリンガルです。母語のアラビア語で



200ルピー紙幣（画像提供：バッテ・パッラヴィ）

著述する作家が大半ですが、アントン・シャンマース、サイイド・カシューアは、敢えて、ユダヤ人の言語であるヘブライ語で著述しました。彼らはパレスチナ人であるだけでなく、ユダヤ人と共生するイスラエル人として、ヘブライ語で著述することで、ヘブライ語文学が「ユダヤ人文学」と同義である現状を、パレスチナ人を含む二民族文学としての「イスラエル文学」に開こうとしました。そうすることで、「ユダヤ国家」ではない二民族共生国家としてのイスラエルを希求したわけですが、残念ながら二人とも合衆国への移住を余儀なくされました。

いずれにせよ植民地主義が強制する支配者の言語と個々の人間がどのような関係性を生きたかは多種多様と言えます。

アイルランドでは、アイルランド語がむしろマイノリティ言語ですが、アイルランド語で著述する作家はいるのでしょうか。

池田…アイルランド語で執筆しても読者が限られるので、目下アイルランド語文学が非常に栄えている、とは言にくいものがあります。しかし、たいへん高い評価を得ている作家、詩人はいます。私の学生時代には京都大学でアイルランド語詩人ヌーラ・ニゴノルの朗読会が開かれ、そこで私は詩人の朗読を聞ききました。その時はアイルランド語も全く分からず、作品の価値もよくわかっていなかったのですが、のちに彼女の詩を真剣に読むようになりました。アイルランドで詩人に再会し、彼女の詩を訳して日本で出版することにもなりました。ニゴノルの詩はまずアイルランドの英語詩人たちに注目され、英訳され、優れた英語の詩として日の目を見たということもありますが、そこから多くの言語に翻訳され、世界中で読まれています。ニゴノルの作品の題材は、主にはアイルランド土着の民話や信仰です。すでにアイルランド人にも忘れら

れているような古い素材を現代的な設定で語り直し、伝統に新しい息吹を吹き込み、驚くべき作品世界を作り上げています。アイルランドでは一時期、女性が詩人になるのはタブーであるという、考えられないような偏見があったのですが、ニゴノルはその偏見を打ち崩しました。現在は女性詩人たちが英語、アイルランド語を問わず大活躍しています。

ところで、インドでは女性作家の活躍が目覚ましいのではないのでしょうか？受賞について話題になっていたように思いますが。

バッテ…一つはブッカー賞に三度ノミネートされ、ガーディアン児童文学賞を受賞したアニター・デザイの『ぼくの村が消える』¹です。この作品はかつて私も中・高校生時分にシェイクスピアやディケンズの諸作品とともに学び、成長を助けてくれた作品です。BBCのTVシリーズで実写化もされました。続いては、ピューリッツァー賞とPEN/ヘミングウェイ賞に輝いたジュンパ・ラヒリの『その名にちなんで』²です。この作品も映画化され、日本でも劇場公開されたことを知っている人も多はずです。彼女の作品の多くには、ロンドン生まれアメリカ育ちという彼女自身のバックグラウンドが示すような、インド系移民・ディアスポラの精神、あるいは彼らの置かれた環境をめぐる諸問題が投影されています。そして最近話題の映画作品として、現代インドの教育事情を扱った「ヒンディ・ミディアム」とその続編「アングレズイ・ミディアム」があります。「アングレズイ」とはヒンディー語で「英語」を意味します。

- 1 アニター・デザイ（一九三七）『ぼくの村が消える』国土社、一九八四年（Anita Desai, *A Village by the Sea*, 1982）
- 2 ジュンパ・ラヒリ（一九六七）『その名にちなんで』新潮社、二〇〇四年（Jhumpa Lahiri, *The Namesake*,

2003）

³ "Hindi Medium" directed by Saket Chaudhary, 2017, "Angezi Medium" directed by Homi Adajania, 2020.

池田…インド系移民・ディアスポラの精神、という言葉からは、アイルランド系移民・ディアスポラあるいはエグザイルの精神、というアイルランドの歴史を語る際のキーワードを思い出します。

かつてアイルランドは非常に貧しい国で、自国で職を得られなかった人たちが主にはイギリスやアメリカに移住しました。タイタニック号にはそういったアイルランド人がたくさん乗船していたことは知られていますね。アイリッシュ・ダンスのシーンもあります。岡先生の学生さんもこれを見られて、アイルランドでダンスを習おうと思われたのかもしれないですね。アイルランドから出て行く人々を送る際には「通夜」が営まれ、二度と会えないのが前提でした。移民を乗せた船は、沈むことまでは想定されていませんが、棺桶船と呼ばれたのです。アメリカにはアイルランド系移民の子孫が多く、その数はアイルランド国内のアイルランド人の数をはるかに超えます。アイルランド系の祖先をもつアメリカの大統領や政治家も少なくないですが、最も有名なのはジョン・F・ケネディ、ロナルド・レーガン、ビル・クリントン、といったところでしょうか。今は事情が変わってアイルランドは移民を受け入れる国になっています。

アラブ世界と言えば「ディアスポラ」は重い言葉だと思えますが。

岡…そのとおりです。先ほども述べたとおり、ユダヤ国家の建国に伴う民族浄化にて七〇万人以上のパレスチナ人が暴力的に故郷を追われ難民となりました。そのエグザイルの経験をアラビア語の小説作品に結晶化したのが、ガッサン・カナファニー⁴です。彼はそ

のペンの力ゆえに、イスラエルの諜報機関によって三六歳の若さで暗殺されてしまいます。

パレスチナ人が難民化してから、すでに七〇年以上。依然、ヨルダンやレバノンなど周辺アラブ諸国の難民キャンプで暮らしている者たちも大勢いますが、七〇年という年月のあいだに、パレスチナ人の離散は、グローバルなものになりました。現在では北米で、ディアスポラ・パレスチナ人の詩人や小説家たちが英語で、パレスチナをテーマにした作品を著しています。

また、シリア人作家ラフィク・シャミのドイツ語作品は、多数、日本語に訳されていますが、彼は独裁体制下の故国からドイツに亡命したエグザイルの作家です。二〇一一年以降の内戦で、何百万というシリア人が国外難民となり、ドイツに定住した人たちもいます。ジュンパ・ラヒリがアメリカを舞台に移民の経験を英語で描いているように、あと何年かしたら、これらのシリア人難民の中から、ドイツ語でドイツ社会に難民として生きる経験を文学作品として綴る作家が生まれるのではないかと思います。

4 ガッサーン・カナファニー (Gassan Kanafani, 一九三六—一九七二年) 『ハイファに戻って／太陽の男たち』河出文庫、二〇一七年。

池田…英語以外にも植民地支配は様々なものを残しましたね。アイルランドは地理的にイギリスに近いので、イギリスから取り入れたものはたくさんあります。それでもアイルランドらしさへのこだわりは随所に認められ、郵便ポストの形はイギリスと全く同じ、色だけが緑というのが典型的な例です。アイルランドでは文化やスポーツの面でもイギリスから大きな影響を受けてきましたが、あえて古来の伝統的なダンスやスポーツを復興させる、あるいは新たにアイルランドの伝統としてそれらを再創造しようとする試みも多くなされてきました。

インドはイギリスから遠いですが、イギリスの文化的影響は強く残りましたね。詳しく教えていただけませんか。

バッテ…言語以外の遺産として、イギリス古典文学の象徴であるウィリアム・シェイクスピアの劇作品とインドとの関わりについて少しお話ししたいと思います。

当時の総督ウォーレン・ヘースティングズの支援と保護のもと、一七七五年にカルカッタ劇場が開設され、以後一〇〇年以上にわたり、カルカッタではイギリス劇場が次々に設立され、インドのイギリス知識人、高官、商人、イギリス東インド会社員に娯楽を提供する場として機能しました。インドの貴族層、ベンガル人、エリート層たちも刺激を受け、イギリス演劇に対して強く関心をもつようになります。演劇を通じた民族主義的テーマが一八五〇年代後期に出現すると、ベンガル知識人も自分たちのための劇場に出入りしました。

紛れもなく一九世紀のインドにおいて、イギリス人は「文明化の使命」のもとに教育事業を展開していましたが、そこには教育の一環としてイギリスの古典も自ずと含まれることになりました。たとえば、シェイクスピアの三大悲劇は公立校のカリキュラムに組み込



(左から) Maqbool (2003)、Omkara (2006)、Haider (2014)
(画像提供: バッテ・パツラヴィ)

まれ、現在もそうです。イギリス勢力がインドの地を去った後も、「シェイクスピア」はインドに留まり続けたわけですね。

また教育現場のみならず、映画業界でもシェイクスピアは人気を誇っています。「マクベス」「ハムレット」「オセロー」の翻案作品として、その単語の頭文字を活かした『マクブール』、『オムカラ』、『ハイデル』が製作されました。これらはインドの地域社会や文化に根ざしたものです。シェイクスピアが今日、これらの作品を鑑賞したら、登場人物、テーマ、プロットがインド固有の地域性や社会情勢を反映し、同時にナシヨナリズム、アイデンティティ、帰属、祖国、平和といった普遍的メッセージを鮮やかに描き出していることに驚くことと思います。

英語が政府の方針、すなわち「上からの方針」として導入されたことに対して、スポーツのなかにはこれとは逆に「下からの受容」が見られたケースがあります。イギリス生まれの打球戯、クリケットです。

5 “Maqbool” (二〇〇三)・“Omkara” (二〇〇六)・“Haider” (二〇一四) directed by Vishal Bhardwaj.

岡…そう言えば、インドの作家、ムンシー・プレームチャンドの短編集『厳寒の夜』所収の作品に、主人公が友達とクリケットの試合の観戦に行くという話がありました。

6 ムンシー・プレームチャンド (Munshi Premchand, 一八八〇—一九三六) 『厳寒の夜』プレームチャンド短編集』日本アジア文学協会、一九九〇年。

バッテ…クリケットは一七〇〇年代初期にイギリス人兵士と水兵により導入され、その際はほぼヨーロッパ人の会員制の娯楽であり、文字通りともに楽しむ「倶楽部」でしたが、一八四八年に転機を迎えます。インドに亡命してきたパールシー(ゾロアスター教徒)の

コミュニティがオリエンタル・クリケット・クラブを組織したことです。次いで、インドウーのコミュニティのなかにも競技人口が増えてくると、一八六六年にボンベイ・ユニオンが結成され、以後はマイノリティ主体のクラブも相次いで出現します。

英領インドが公式に国際クリケット評議会（ICC）に加盟したのは、一九二六年のことです。今日、クリケットはインドの文化にとって不可欠な国民的スポーツとなっており、国民を結びつける重要な役割を果たしています。かつてのインド民族運動期にも、クリケットは民族意識の高揚に寄与しました。知識人によってインド国民会議派が設立されるかなり以前にも、若者たちは自分たちが平等に扱ってもらえる「アイルランド」を見つけることができました。

インドにおけるクリケットは、イギリス帝国主義の歴史と切っても切り離せないことも事実ですが、ある種の「宗教」と見なしても過言ではありません。というのも、クリケット大国のインドが隣国のパキスタン、あるいは旧宗主国のイギリスとの試合となると、「絶対には負けてはならない」という緊張感が国を覆い、国のあらゆるシステムが一時的に麻痺するほど、国民の関心と熱狂はその試合に向かいます。最近の話題としては、今年八月に開催された国際試合において、イングリッシュ・クリケットの「聖地」ともいうべきスタジアム「ロード・クリケット・グラウンド」でインドが五〇年ぶりにイギリスを打ち負かし、私も日本から試合の行方を注視していました。インドのクリケットへの熱狂はテレビの影響によるところが大きいです。インド国营放送のドゥールダルシャン（Doordarshan）はこれまで長期にわたりICCの試合の放送権を独占していました。インドのテレビ市場が民間にも開放されると、瞬く間に八〇〇以上のチャンネルを通じて、しかも二〇言語で放送されるようになります。そしてこれらの放送権をめぐる争いは、一種の「経済戦争」と

もいふべき現象も見られ、放送権をめぐる数億ドルをかけて放送局間で争われます。さらに、この競争からゆるる関連産業が巻き込まれ、クリケット経済が膨張を続けています。

また人々をつなぐ機会としてのクリケットという観点では、インドのプレミア・リーグ（IPL）に世界中から選手がスカウトされて集められます。今年の例では十一ヶ国から一二八名の選手がドラフト指名され、そこにはイギリス本国出身の選手も含まれています。もちろん現在でも、クリケットとは本来イギリス人（Englishness）を反映する流儀、服装などのスタイル、優雅な身のこなし、上流気取りなどと同義で、ある種の高尚なものとして認識される面がイギリスではごく僅かに残存しているのも否定できません。しかしながら、先ほどお話ししたIPLの事例は、かつての植民地の支配・被支配の歴史を塗り替えると言えらるかもしれません。

岡・先ほどインドに亡命してきたパールシーについて言及されましたが、英国のロックバンド「クイーン」のボーカル、フレディ・マーキュリーの両親は、西インド出身のパールシーで、フレディは英国の保護国だったザンジバル生まれ、インドを経て英国に移民しています。「ボヘミアン・ラプソディ」がフレディなくして生まれなかったとすれば、この作品はポストコロニアルの産物と言えますね。サルマン・ラシュディもインド出身のムスリムですし、植民地の文化や出身者も、宗主国の文化や社会に多大な影響を与えていますね。

7 サルマン・ラシュディ (Salman Rushdie, 一九四七-)、代表作に『真夜中の子どもたち (上・下)』岩波文庫、二〇二〇年、『悪魔の詩』新泉社、一九九〇年。

パッテ・インドからイギリスへの文化的影響としてす

ぐに思いつくのは、スパイス、紅茶、カレーなど食文化面での影響ですが、今回はあえて一般にそれほど知られていない側面として、ここでもスポーツの事例を紹介したいと思います。

先ほどお話ししたクリケットがもとも英国発祥であったのに対し、インド経由でイギリスにもたらされたスポーツとしては、「モダン・ポロ」が挙げられます。馬に乗りながら打球槌を持っておこなうホッケーのような競技です。一八五〇年代なかば、現在のアッサム地方を旅行していたイギリス人の茶栽培家が、マニプールの王子たちがこの競技に励んでいるところを目撃し、それを東インド会社の騎兵隊に紹介しました。あるマニプール王朝の王室年代記（三三二―一八九七）によるマニプール州と、その競技は「サゴル・カンジェイ」と呼ばれ、文字通りに訳せば「王たちの競技」となります。これは紀元三三三頃誕生し、マニプール州のインパールがその発祥地とされています。

インパールは第二次世界大戦の激戦地のひとつとして日本人にも広く知られている地域であり、スバス・チャンドラ・ボースにより組織されたインド国民軍も日本兵とともにイギリスと戦い、多くの命が失われた悲劇の場所としても知られています。ちなみに、私は二〇一九年二月に戦跡踏査に参加し、現地の人々の声や「記憶」をこの目で確かめました。

ポロの話題に戻りますと、一八五四年頃、東インド会社のプランテーション所有者たちがマニプーリ人とともに試合に参加し、競技ルールを学んだことが知られています。なおこの時期は、第二次ビルマ戦争の直後でもあり、またその後の一八五七年にはインド大反乱が勃発するなど、東インド会社の官僚たちにとって最も憂慮すべき時代状況でした。こうした状況が過ぎた一八五九年、アッサムでは東インド会社の会員制クラブであるシルチャル・カンジェイ・クラブが設立されました。そしてその後の一〇年間に、マニプール



の人々の伝統的競技はインド全土に普及し、さらに海をわたってイギリスにまで伝わりました。ロンドンではジェントルマン階級の遊戯として定着し、それがもとでハーリンガム・クラブの結成に至りました。これにより、スポーツとしてのモダン・ポロが形作られたわけです。現在このスポーツはイギリスをはじめ、オーストラリア、アルゼンチン、アメリカ合衆国などおよそ七〇ヶ国で親しまれ、互いに競い合っています。

こうした状況の一方、マニプールの人々にとってのポロは競技に留まらず、自然と人間を調和させる貴重な伝統文化であり、積極的に後世に残すべき遺産としても認識されています。なぜならその背景には、イギリスがインド支配を終えた後に、かつてマニプール王朝とイギリスによる経済的支援の対象であったポロがインド国内の政治状況の変動と混乱のなかで翻弄され、その伝統の存続が脅かされた歴史があるからです。現在では、女性の社会的地位の向上や意識の高まりも相まって、現地の女性チームの目覚ましい活躍が国内外の注目を浴び、二〇一八年にはこれを題材としたドキュメンタリー作品『Daughters of the Polo God』が制作されたことも補足しておきたいと思えます。

- 8 Sagol Kanjei
- 9 Slichar Kanjei Club
- 10 Hurlingham Club

池田：今日はインドに関する映画をいろいろ教えていただけで嬉しいです。見たい映画が増えました。アイルランド映画と言えば、植民地主義からの脱出がもたらした深い傷を扱ったものが目立ちます。アイルランドは独立に際して南のアイルランド共和国と北アイルランドの二つに分断された結果、一九六〇年代終わり「北アイルランド紛争」が勃発し、武力闘争やテロで多くの命が奪われました。基本的には、アイルランド島の分断に抗って統一アイルランドを求めるナショ

ナリストと、北アイルランドのイギリスへの残留を望むユニオニストの対立です。宗派としてはカトリックとプロテスタントの抗争になります。この紛争がブレグジット¹¹をめぐって再燃することが危惧されています。

11 Brexitと表記される。Britainとexitの二つの英単語を組み合わせて作られた造語で、イギリスの欧州連合(EU)からの離脱を意味する。二〇一六年六月三日の国民投票で僅差で離脱が支持され、二〇二〇年一月三十一日に正式にEUから離脱、目下大きな変動の只中にある。

岡：カンヌ映画祭グランプリのケン・ローチ監督の「麦の穂を揺らす風」¹²は、まさにその悲劇を描いた作品でした。独立と分断という点では、インドとパキスタンもそうですね。印パ分離独立の悲劇については、ウルドゥー語作家サアード・ハサン・マントーを主人公にした、ナンディータ・ダス監督の映画「マントー」¹³(二〇一八)が記憶に新しいですが、私は学生時代、クリシヤン・チャンドルの短編集『ペシヤール急行』¹⁴を読みました。表題作は、印パ分離独立の際に生じた凄惨な暴力を、鋼鉄でできた走る列車の視点から物語った非常に印象的な作品で、ぜひ、多くの方に読んでいただきたい名作です。

バッテ：たとえば先ほど紹介した映画「ハイデル」は、故郷に戻った大学生の主人公が行方不明の父親を捜し求めるところから話が始まります。作品の着想源は、一九九五年に実際に起ったカシミール人人行方不明事件で、これは印パ分離独立直後から現在まで続いている「カシミール紛争」¹⁵にその原因が求められるものです。またストーリーは、カシミール出身でアメリカ在住のジャーナリスト・脚本家・作家バシヤラト・ピールの小説『外出禁止令の夜』¹⁶にも基づいています。

なお、この映画のエンドロールが流れる前に、次のような教訓的メッセージが流れます。過去二〇年の間

に、カシミール紛争によって数千人が命を落としたりことや、近年では状況がやや緩和した結果、一九九五年に四二〇万人だった観光客が、映画が封切られる前年の二〇一三年には一億四千万人に増加したこと、主要部分の撮影が何の政治的混乱もなく実施されたことなどです。

- 12 "The Wind That Shakes the Barley", directed by Ken Loach, 2006 (カンヌ国際映画祭パルム・ドール賞受賞)
- 13 "Manto", directed by Nandita Das, (2018)
- 14 クリシヤン・チャンドル (Krishan Chander, 一九一四―一九七七年) 『ペシヤール急行』めこん、一九八六年。
- 15 Basharat Peer (1977-), *Curfewed Night: A Frontline Memoir of Life, Love and War in Kashmir*, 2008.

岡：バッテ先生、貴重なお話をいろいろとありがとうございました。中東世界でも、クルディスタン、パレスチナ、西サハラなど依然、植民地状態と分断、それに対する抵抗と闘争が続いています。一九七五年から一六年にわたって続いたレバノン内戦、そして一〇年前の一連のアラブ革命とシリア内戦、アラブ世界におけるこれらの問題の淵源はみな、植民地支配の歴史にあることを強調しておきたいと思えます。

話は尽きませんが、本日の座談会、これをもってひとまず幕引きとさせていただきます。

宇佐美達朗 著

評者・中村大介（豊橋技術科学大学総合教育院准教授）

『シモンドン哲学研究—関係の实在論の射程』

法政大学出版局

定価 四九五〇円

二〇二二年二月刊 二九三頁



年）や論文・草稿など、多くのリソースが投入されている。

まず考察の俎上に載せられるのは、「関係が存在の身分を持ち、その諸項と同時的である」（四三頁）ことを主張する「関係の实在論」である。シモンドンのこの着想は、先行研究においては、数学的な関係性を基にしたバシユラールの実在論に結び付けられてきたが、著者はむしろ中世の普遍論争とのつながりに着目する。その上で、ある領域における関係を、他領域との「働きにおける比例の一致」によって（個別性と差異を重視しつつ）発見する「類比」の認識論的・方法的意義が解明される。次に取り上げられるのは、彼の存在論的着想として有名な「前個体的实在」の身分である。著者は前個体的实在に対し、二つのオーダー（極小方向の極限、及び「自然」とも呼ばれる極大方向の極限）からなる下位区分を設け、その仮説的性格を指摘している。続く「トランスダクション」に対する考察は、関係の実在論と認識論をつなぐ点で本書の要と言ってよい。そこでは、「発明」において環境と技術的存在は、一方が他方を引き起こすのではなく相互に条件付け合う、という彼の技術論が参照されることで、環境と技術的存在の間に働く「循環的因果」としての「同時性」が取り出されている（一六〇―三頁）。この幅をもった「同時」こそ、本段落最初の引用における「同時」の意味であり、また人間の心的作動の領域（認識論）と機械の物理的作動の領域（存在論）の類比的関係を証し立てるものでもある。かくして、ある領域の個体化の「範例」から出発して「類比」を用いて別の領域へ移行するようにして思考を進めていく、彼の「類比的範例主義」としての哲学において、発明はその探究姿勢を規定する「範例の範例」としての側面をもつことになる。著者は本論の結論部

で、この（循環的因果としての同時性）をシモンドン哲学の一つの核心に据え、補論ではそれが精神・社会的な水準にある倫理の場面にも関わることを指摘している。

カントは『純粹理性批判』で、様々な探究がある課題に一括できればそれだけで大きな成果であると述べていたが、著者が提示する（循環的因果としての同時性）という概念もまた、本書の成果を集約するような優れた研究課題となっている。この点を最後に少し指摘しておく。クロノロジックでない円環的な時間というアイデアそのものは、ニーチェを引くまでもなく、今やそれほど珍しくないかもしれない。そのような中でシモンドンの議論のポイントは、それを「因果」という言葉で表現したところにある。だが実のところ、個体化論の中で循環的因果に相当する議論が登場するのは、生命的個体化のところであって、「因果性」の問題を含む筈の物理学的個体化のところではない。とするなら、著者の取り出したこの（循環的因果としての同時性）という概念が物理学の領域でいかに働いているのかを示すことは、この概念の範例性を示す上で重要な試金石になるように思われる。

つまるところ評者は、シモンドンの類比的範例主義を著者自身に遂行してもらうことを願っている。彼の特異で優れた形而上学の風景を堅実な読解によって示す、という困難な仕事を果たした著者に、この風景の一部となり、それをより豊かにしていくよう望むことを、誰も過大な要求とは思わない筈である。

*宇佐美達朗さんは、二〇二〇年三月人間・環境学研究所博士後期課程修了、同年同月博士号取得。現在、日本学術振興会特別研究員（PD）。

二〇二一年に日本語で刊行された哲学者のモノグラフとして、大きな収穫とみなされるであろう著作である。本書で取り上げられるフランスの哲学者ジルベール・シモンドン（Gilbert Simondon, 一九二四―一九八九）の思想は、その個体化論と技術論により、ドゥルーズやステイグレルに大きな影響を与えたことととりわけ知られる。本書の特徴は、こうした哲学者への影響関係を一旦括弧に入れ、シモンドンのテクストに徹底して内在的な読解を施すことで、彼の思想の「ポテンシャル」を引き出そうと努めている点にある。

本書の考察の中心となるのは、一九五七年に博士主論文として提出された『形態と情報概念に照らした個体化』である。この『個体化論』の基本構造を解明するために、博士副論文『技術的対象論』（一九五八

吉松寛^{II}著

評者・松田智裕 (国立情報学研究所情報学プリンシプル研究系特任研究員)

『生の力を別の仕方でも思考すること』
ジャック・デリダにおける生死の問題』

法政大学出版局

定価 四〇〇〇円

二〇二二年二月刊 二八六頁



本書は、「生」ととりわけ、「生死 (la vie la mort)」——の問題を軸にジャック・デリダの思想形成を考察した論考である。「生死」という用語は一九七五―七六年度の『生死』講義に登場する術語だが、著者によれば、この術語は、死との関係のなかで自己を解体しながらも存続するような生の持続を問題にしたものであるという。このような生と死の混交というモチーフは一九六七年の『声と現象』のなかにすでにその萌芽が見られるものであり、晩年にいたる数々の著作・論考にも一貫して読み取られる——このような見通しのもと、知覚と時間、細胞と遺伝子、翻訳と正義、民主主義などさまざまなトピックを經由してデリダが「生死」をいかに思考しようとしたのかを追跡することが、本書の中心的なテーマとなる。

概略を簡単に確認しておきたい。第一部「生死」概念の形成 一九六七―一九八〇年』では、精神分析受容や生命科学との関係からデリダが「生死」を主題化した経緯が検討される。まず、「リズム」という主題を中心に、生の欲動と死の欲動の拮抗としての時間が一九六〇年代のフロイト論に即して抽出され(第一章)、一九七五―一九七六年度の『生死』講義でも、ジャコブの『生命の論理』に依拠して、この生と死の拮抗が絶えず外へと開かれていく生命として思考されていることが指摘される(第二章)。そして、「自由エネルギー」と「拘束されたエネルギー」の対をプロイアーとは逆の意味で捉えたフロイトの身振りを論じた一九八〇年代のフロイト論にも、「生死」の問題が形を変えて登場していることが示される(第三章)。第二部「生死概念の展開 一九八〇―二〇〇三年』では、生と死の関係が翻訳や正義、民主主義へと結びつけられていく過程が検討される。まず、デリダのベンヤミン解釈が取りあげられ、一方で、完全な意味伝達が不可能であるがゆえにテクストが新たな意味を纏うという「生き延び」の問題が一九七〇年代の「生死」を翻訳論の文脈で語り直したものであり、他方で『法の力』に見られる正義論が、予定調和的な目的をあらかじめ設定することなく、絶えず変革を求めようとする運動性を問題にしている点で、「生き延び」の問題を引き継ぐものであることが指摘される(第四章)。こうした解体と変革の両義性は晩年の民主主義論にも活かされており、デリダが民主主義のなかに非民主的な政体に変化するような自己破壊的な危険性を読み取ると同時に、より善い方向へと無限に漸進するような民主主義の改善可能性を見ていたことが示される(第五章)。

このように著者は、「生死」という観点から一貫してデリダの思想を読み解き、この概念が精神分析や生命科学、正義や民主主義に結びつけられていく過程を考察している。その際に著者は、フロイトやジャコブ、ベンヤミン、さらにラプランシュやムフなど多様な文脈を踏まえたうえで、「生死」をめぐるデリダの思想形成を丁寧に論じており、こうした文献学的な態度からも本書の成果は高い水準に達していると言える。疑問点をひとつだけ挙げておく。本書のタイトルである「生の力を別の仕方でも思考すること」の「生」を著者は「生死」や「生き延び」に結びつけて考察しているが、では「力 (force)」はどうなるのか。別の仕方でも思考されない「力」と別の仕方でも思考される「力」とは具体的にどのようなものなのか。著者はデリダがニーチェ的な「諸力の差異」を受け継いだことを指摘しているが、それを踏まえたうえで彼がいかに「力」の概念を斥け、それに代わる「力」の概念をいかに思考したのかに関する踏み込んだ考察が必要なのではないか。本書の試みはデリダが「生」を「力」として捉えるにいたった過程を問題にするものでもあるだけに、こうした考察は避けられないのではないかとはいえ、二〇一九年に刊行されたばかりの『生死』講義をいち早く取りあげ、まとまりある視点を提示している点は大きな寄与である。この講義のなかに上述の論点を考えるヒントが散りばめられていることもあわせて考えるなら、本書は今後参照されるべき貴重な成果であると言える。

* 吉松寛さんは、二〇二〇年三月人間・環境学研究科 博士後期課程修了、同年同月博士号取得。現在は日本学術振興会特別研究員 (RPD)。

古川真宏 著

評者・香川檀 (武蔵大学人文学部教授)

『芸術家と医師たちの世紀末ウィーン』
——美術と精神医学の交差——

みすず書房

定価 四、九五〇円

二〇二一年三月刊 二八七頁



十九世紀末から二十世紀にかけてのウィーンは、オーストリー＝ハンガリー二重帝国の首都として多彩な人材があつめ、世界の最先端をいく学問と芸術を花開かせた。しかもこの都市文化のユニークなところは、生物学や医学などの科学と、文学・芸術とが、論壇ジャーナリズムやカフェでの文化談義をつうじて互いに影響を与えあっていたことだ。とりわけ、人の心や文化の病を診断してそのメカニズムを解明しようとした精神医学は、因習を打破して人間の内面の探究に向かっていた芸術家たちにとって無視できない理論的な参照先であった。フロイトの精神分析学も、その有力なひとつである。

本書は、まさにこの「知の交差」に着目してウィーン世紀末芸術を捉え返し、美術や建築などの言説や作品に、いかに精神医学の影響が見られるか、また芸術

のわがその科学的言説とやかに渡り合ったかを論じたものである。それはとりもなおさず、二十世紀の近代芸術において大きな意味をもつことになるウィーンの芸術モデルネを、根幹のところまで駆動させていたものが精神医学であったことをあきらかにする果敢な試みでもある。

扱う対象は絵画・建築・服飾・人形とひろい射程に及んでおり、それはこの時代が「総合芸術作品」をモットーに、統一的な様式のもとに諸芸術の統合をめざしていたことも関係していよう。絵画ではまずグスタフ・クリムトの描く女性像が俎上にのぼる。彼の絵には、体型やポーズの点で理想美を大きく逸脱した女性の身体像が登場するが、それは精神医学で「ヒステリー」や「神経衰弱」の女性患者について記述される症状とたしかに符合するものであった。クリムトがウィーン大学講堂のために描いた「学部の絵」のスクヤンダルは有名だが、画中の人物像が「病んだ身体」として批判されたのは故なきことではなかったのだ。建築に目を転じると、クリムトが会長をつとめた芸術家団体「分離派」の拠点である分離派館という展示空間がまず問題となる。外観こそ特徴的な金色の装飾をまとうていたものの、構造的には近代的ミュージアム建築の原点ともいえる白い壁で囲まれたホワイトキューブ型の建物であり、この芸術の館は、神経を疲れさせる都市の喧騒から逃げ込む「避難所」としての役割が期待されていた。さらにここでの白い壁は、同じ建築家が設計したウィーン郊外のサナトリウムにも通じる。かくして美術館と病院建築はともに静謐な白さに包まれ、神経衰弱ぎりぎりのブルジョアたちのための癒しの場となっていたのだ。飾り気のない、まっさらな白壁——じつは、この装飾を極力排した建築デザインは、世紀転換期のウィーンで論争の的となった「装飾」の是非という問題とも関わっていた。装飾とは、ウィーンの特異な文化風土においては、フロイト

理論でいう「性欲動」、つまり人間の根源的な性的欲望が発現したものと解釈されていたのである。装飾反対派は、装飾とは性欲動を文化が抑え込むことに失敗した淫らなものであるとし、逆に装飾肯定派は、その性欲動を芸術に昇華したものが装飾であるとしたのである。いずれにせよ、装飾芸術が精神分析のつよい影響のもとで議論されていたことが分かる。

一方、本書の第Ⅲ部で扱う画家オスカー・ココシユカの人形にまつわるエピソードは、精神分析を介させて肖像画という絵画芸術の主観主義的な一面を浮かびあがらせる。ココシユカは失った恋人の身代わりとして人形を作らせ、それを心理学用語をもちいて「フエティッシュ」と呼んだ。これをモデルに絵画を描くことでモチーフの人形に生氣を吹き込もうとするが、やがて人物を「肖像する」行為にひそむ主観(自己)投影という心理作用を画家みずから自覚していくことになる、と著者は結論するのだ。素描の読解など先行研究の引用が説得力を欠くところも一部に見受けられるが、膨大な文献を渉猟しての論述の積み上げは積年の研鑽をうかがわせる力技と言ってよいだろう。ウィーンの世紀末文化を語るうえで、従来の文化論・芸術論の枠を超えた、画期的な研究として、長く読み継がれるにちがいない。

* 古川真宏さんは、二〇一八年三月に人間・環境学研究所博士後期課程を研究指導認定退学、二〇二〇年一月に博士号取得。現在は大阪成蹊大学芸術学部が非常勤講師。四月から、関西学院大学文学部准教授。

今井瞳良 著

評者・板倉史明

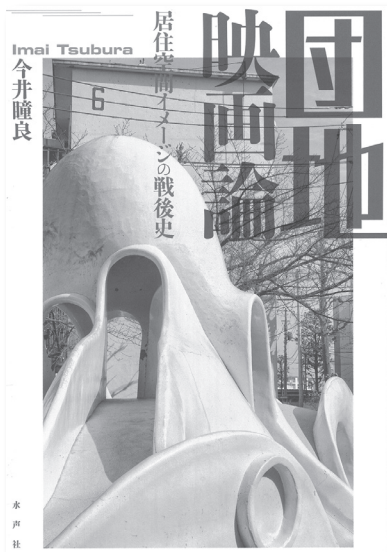
(神戸大学大学院国際文化学研究科 准教授)

『団地映画論——居住空間イメージの戦後史』

水声社

定価 四四〇〇円

二〇一二年三月刊 三三〇頁



日本映画のなかで「団地」はどのように描かれてきたのだろうか。団地に住んだ経験がある人でもない人でも、団地は日常生活のなかで幾度となく目にしてきた一般的な風景の一部であるがゆえに、この疑問にたどり着くことは簡単なようで実は難しい。本書は戦後日本の背景に埋もれてしまった団地を歴史化し、前景化することを通じて、映画における団地表象の特徴をはじめて学術的に浮かび上がらせたユニークな映画学書である。

今井氏は一〇〇本以上の「団地映画」の分析を通じて、各時代の日本社会で生み出された支配的な「団地」言説と、同時代の映画で描写された団地表象の役割とのあいだに横たわる「ズレ」に注目する。団地映画を読み直すことが重要なのは、各時代の団地に関する支配的言説に対して、団地映画はその言説から一定

の距離をとるような団地描写を行うことによって、映画が支配的言説に対する「批評性」を獲得していたからだと言井氏は強調する。

一九五五年、都市部における住宅不足を背景にして日本住宅公団（現在の「UR」）が設立され、全国各地に近代的な住空間を提供する団地建設ラッシュが始まり、高度成長期の中層層の生活基盤を支えた。鉄筋コンクリート製で上下水道が完備された2DKの居住空間、そして近くに駅や商店街があるような機能的な住環境は、都市部の中間層にとって憧れと羨望的であり、メディアは「団地族」なる用語を作って団地居住者の特別感をあおった。

しかるに今井氏によると、「憧れ言説」時代の一九六〇年代前半に製作された団地映画では、団地生活は意外にも農村や下町の価値観と対立するものとして否定的に描かれていた。『喜劇 駅前団地』（久松静児、一九六一）では、団地建設による農地売却で土地成金が生まれるなか、主要登場人物の青年男性は団地への入居を拒否し、これまで通り農業を続ける選択をする。また、山田洋次監督のデビュー作『下町の太陽』（一九六三）において、主人公の勤労女性が、団地に夫婦で住むことを夢見ている上昇志向の強い「サラリーマン」からプロポーズされる。しかし女性は、「きれいな部屋の中でいい服を着てお茶を入れたり編み物したりすることが女の幸せと思えない」と主張してプロポーズを拒否し、工場で地道に働く男性と結婚を決断するところで映画は終わる。今井氏は、このような「団地拒否」のテーマを、単に物語のあらすじレベルの分析だけでなく、団地がどのようにフレージングされ、撮影され、編集されているかなど映画学的な分析を加えることで、より説得力のある議論を展開している。

団地言説と団地表象との「ズレ」は、その後の映画でも繰り返された。その一部を紹介すると、一九七〇年にはじまった日活ロマンポルノ第一弾『団地妻 昼

下がりの情事』のヒットによって、男女の性的役割を固定化する「団地妻」の言説がメディアで流布したが、約二〇年にわたって製作された映画「団地妻シリーズ」においてはその言説と異なり、多様で自由な女性主人公たちが描かれていた（第5章）。また、一九九〇年代以降、昭和三〇年代を懐かしむ「昭和ノスタルジア」ブームの一環として団地言説もノスタルジックな傾向を帯びる。しかし同時期の団地映画はそのブームを相対化するように、団地家族の紐帯の危機や、父親の居場所の消滅といったテーマが描かれた。（第8章）。そして二〇〇〇年代以降、団地の老朽化と居住者の減少および高齢化によって閑散とした団地風景が全国に目立ちはじめると、団地がホラー映画ジャンルの舞台としても機能するようになる（『クロユリ団地』（二〇一三）、第9章）。

著者に導かれて団地映画の歴史を振り返ってみると、団地映画は、団地生活者が毎日の生活に追われるなかで意識下に押し込めてきた不安やストレス、そして過密空間で長期的に集団生活を行うことに伴うマイクロレベルの「居心地の悪さ」を象徴的に顕在化させてきたことが明確になる。著者が結尾で指摘するように、団地映画は一種の「日常生活批判」の役割を果たしていたのであり、本書は私たちの日常生活のなかに潜んでいるマイクロなポリテクスに気が付くためのレッスン書だともいえるだろう。

*今井瞳良さんは、二〇二〇年三月人間・環境学研究科博士課程修了、同年同月博士号取得。現在、山形県立米沢女子短期大学講師。

山内由賀^{II}著

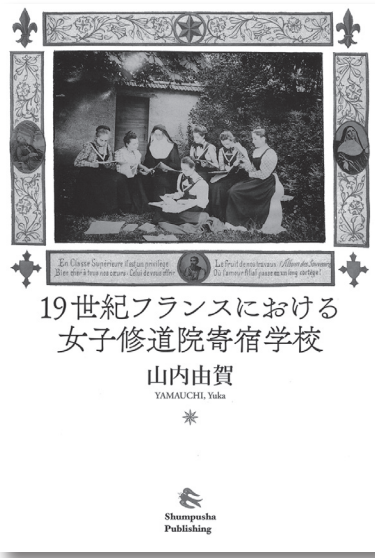
評者・井岡瑞日（大阪総合保育大学児童保育学部講師）

『一九世紀フランスにおける女子修道院寄宿学校』

春風社

定価 三六〇〇円

二〇二一年三月刊 二五六頁



19世紀フランスにおける
女子修道院寄宿学校

山内由賀
YAMAUCHI Yuko

Shumusha
Publishing

本書は二〇一九年三月に京都大学から博士（人間・環境学）の学位を授与された論文に加筆修正の上、刊行されたものである。一九世紀フランスの女子修道院寄宿学校の盛衰のプロセスから、女子中等教育史研究に一石を投じる意欲作である。この中で著者は、女子修道院寄宿学校にまつわるステレオタイプに実証的にアンチテーゼを唱えていく。ここでいうステレオタイプとは、一つには、バルザックやモーパッサンら男性の文豪による文学作中で描かれるような、沈鬱で神秘的なイメージとして想起されるものである。二つには、信仰と強く結びつき、「それゆえに」知的レベルで劣っていると理解される点で、女子中等教育の公教育化が実現していくまでの通過点と位置づけられるものである。後者は、女子中等教育が政治的スローガン通り「教会の膝の上からユニヴェルシテの腕の中へ」移

讓したという、女子リセ・コレージュを誕生させたカミーユ・セー法（一八八〇）を最大の転換点と見なす従前の歴史認識を扱った所としている。

本書の概要を紹介しよう。全体は序章と五つの章から成る本論、終章で構成される。第一章では、女子修道院寄宿学校がフランス革命後の相次ぐ閉鎖を経て再興していく流れが整理される。国家による公的支援の欠如や社会の要請を背景に、女子修道院寄宿学校は第二帝政下で女子教育の主翼を担うまでになる。

第二章では、女子教育修道会を代表するウルスラ会と聖心会に残される貴重な史料をもとに、女子修道院寄宿学校での教育実態が明らかにされる。重要なのは、必ずしも知育が軽視されたり、「良妻賢母」育成のみに終始していたわけではなかったという点である。続く第三章では、女子修道院寄宿学校における宗教教育の占める重要性が、修道会史料や実際に教育を受けた娘の日記などから複合的に論じられる。また、女子教育と宗教との強い結びつきが、カトリック教会による社会のキリスト教化の強力な手段にもなっていた点で、第三共和政下の世俗化政策の布石となったことが示される。

第四章と第五章が扱うのは、第二帝政から第三共和世にかけて女子教育の非宗教モデルが模索されていく時期である。第四章では、カミーユ・セー法成立以前の過渡期の状況を、女子教育の世俗化政策に着目した公教育大臣デュリュイの改革を軸に整理している。改革におけるナポレオン三世の皇后ウジェニーの果たした役割を明確にしつつ、第二帝政期にはすでに女子教育と教会権力との切り離しが目指されたことを確認する。第五章では、第三共和政の反教権主義政策として、カミーユ・セー法を旗印に女子中等教育の公教育化が進められる経緯が述べられる。その中で、女子修道会寄宿学校が政教分離法（一九〇五）成立により撤退を余儀なくされるまで、宗教教育を前面に出して女子リ

セ・コレージュに抗しつつ、様々な学校拡充策を講じながら存続を図ろうとしたことが明らかにされる。

以上のように、本書は先行研究の空白地帯にあった女子修道院寄宿学校を主軸に据えることで、フランスの女子教育が強固にカトリシズムと紐づけられていた歴史的経緯を解明した。このことにより、国家と教会とのヘゲモニー闘争を中心に組み立てられがちな研究状況に対し、その前提となる女子教育と宗教との紐帯そのものを分析の俎上に載せ、その構築と解体を軸に繰り広げられる複雑な様相を読み解くことの重要性を提起している。本書はその意味で、フランス女子教育史研究の進展に貢献するばかりか、宗教を盾に女性の教育が著しく制限されるといった、現在進行形の問題を考える上でも多くの示唆に富んでいる。また、評者は公的な史料が十分でない（半）私的な領域での教育の史的解明に挑むことのおもしろさを改めて実感した。

分析対象の内外に広く目配りしながら論が展開されるため、女子教育全体の動向説明に紙幅を割いた分、弱体化する女子修道院寄宿学校についての叙述に物足りなさを感じるなど、部分的に屋台骨のぐらつきもみられる。しかし、それは本書の功績をいささかも削ぐものではない。第二章で採用された、女子教育と男子教育とを対置させ両者の差異を浮かび上がらせる視点や、「上からの」制度史に市井の女性の声が続く「下からの」社会史を接合させていく研究方法が今後の筆者の研究でますます開花していくことを楽しみにしたい。

*山内由賀さんは、二〇一七年三月に人間・環境学研究科博士後期課程を研究指導認定退学、二〇一九年三月に博士号取得。現在、神戸大学、神戸女子大学、佛教大学、立命館大学非常勤講師。

松原史二著

評者・勝盛典子（香雪美術館・中之島香雪美術館 館長）

『刺繍（ぬい）の近代 輸出刺繍の日欧交流史』

思文閣出版

定価 八二五〇円

二〇二一年三月刊 三九四頁＋カラー口絵八頁



これまで研究対象としてほとんど取り上げられたことがなかった日本の近代刺繍——明治から太平洋戦争前までの約五〇年間の刺繍——について、現存作品を網羅的に調査したうえで、その魅力を伝える一方、日欧交流史の視点をもって包括的に考察した意欲的な論考である。

徳川幕府の終焉にともなう呉服全般の需要の激変や廃仏毀釈の風潮のなかで、刺繍の職人たちは一気に仕事を失い新たな販路を求めた。日本の近代刺繍は、明治維新という変革期を経て海外への輸出を主眼として制作されたことから、コレクションの多くが海外にあり、調査研究の障害となっていた。著者は、国内はもとより、ヨーロッパ九か国一八の施設に、トルコ宮殿群など、海外所在の作品についても悉皆的な調査を実施して研究基盤となる国内外五二九件の作例を集積し、

それらの情報をもとに、制作・販路・西洋における流通と受容など様々な角度から近代刺繍について検討し、「刺繍（ぬい）の近代」の実態を明らかにしようとする。

本書は全六章と巻末の資料編からなる。刺繍史を概観し、近代刺繍成立の背景を考察する「第一章 刺繍史の中の近代」。貿易関係資料と現存作品から輸出刺繍の変遷と実態について、国内需要もあわせて考察する「第二章 輸出刺繍の諸相」。近代刺繍にかかわる商人・絵師・職人に加えてその技術教育まで、制作の現場について詳述する「第三章 近代刺繍の担い手——分業が生み出した近代の刺繍」。五〇件以上リストアップした各機関への問い合わせから始めたという海外所在の刺繍作品についての調査報告「第四章 欧州に残る日本刺繍コレクション」「付論 トルコに残る日本の刺繍」は、各作品の検討はもとより、在欧コレクションの来歴から近代刺繍の流通にも迫ろうとする意欲的な論考である。また、こうした作品調査を踏まえて、ホイットスラーやマネなど同時代の絵画作品から西洋での受容実態を考察する「第五章 描かれた刺繍」。最後の「第六章 刺繍作品に見る日欧交流」では、高島屋写真帖図案や現存作品から、日欧相互の影響関係を論じている。

著者は学生時代に京都で日本刺繍と出会い、研究の空白地帯であった近代の刺繍を研究テーマとして一〇年以上という。評者は、近世の東西交流史研究の一環として、更紗について長崎貿易や近世の輸入工芸品の受容という視点で興味を持ち続け、そこから派生する形で輸出漆器の問題にも関わってきた。輸出漆器の場合、南蛮貿易から日蘭貿易の時代、引き続いて近代まで、時代や注文主に対応しながら変化していく状況を追跡することが可能で、更紗や輸出漆器についていえば、工芸史や貿易史の先行研究に助けられることも多かった。しかし、工芸研究のなかでも層が薄い分野で、

まして維新時に劇的な変化を遂げ、近世以前を対象とした先行研究を利用するのが難しい近代刺繍をテーマとすること自体、著者の熱意と行動力をもってしても簡単ではなかったことが想像できる。

本書について特筆すべきは、「資料1 国内外刺繍コレクション 調査結果」「資料2 刺繍作品一覽」「資料3 近代刺繍家列伝」「資料4 聞き取り調査記録」「資料5 刺繍関連年表」という、著者が国内外で渉猟した一七〇頁におよぶ近代刺繍に関する情報である。実証的、多角的にまとめられた本資料は、今後近代刺繍研究に必須となるはずである。

本書は、近代刺繍を、近年注目を集めつつある超絶技巧の明治工芸としての魅力を紹介するにとどまらず、美術（工芸）史、貿易史、東西交流史といった幅広いフィールドで地道に情報を積み上げることによって、副題である「輸出刺繍の日欧交流史」に相応しい内容となっている。一方で、近代刺繍の芸術作品としての魅力は、この判型では伝わりづらい点は否めない。興味を持たれた方には、参考文献に挙がっている展覧会図録などを参照されることをお勧めしたい。評者の興味分野からは、劇的な変化を遂げたとはいえず近世から近代へ連続する刺繍の側面についての考察を期待したいことがひとつ。「獅子図刺繍額」のように各章に分散して扱われた作品やテーマについて、纏まったかたちで読んでみたいという感想がひとつ。今後さらなる著者の活躍に期待したい。

*松原史二さんは、二〇一五年三月人間・環境学研究科博士課程単位取得・研究指導認定退学。二〇一八年七月博士号取得。現在、北野天満宮北野文化研究所室長、立命館大学ほか非常勤講師。

松波烈二著

評者・桂山康司（京都大学大学院人間・環境学研究科教授）

『ドイツ語のヘクサメタ』

松籟社

二〇二二年三月刊 一六〇頁

定価 三三〇〇円



韻律論の華やかなりし頃が懐かしい。「詩は音楽に憧れる」は、「文は人なり」と同様、よく知られた格言であった。詩の調べの美しさの秘密を解き明かすのが韻律論で、文学を志す者はこれに通暁していると思ひ込んでいた―私事にわたり恐縮だが、半世紀近くも前のこと、大学に入学するや、英語の必修クラスで英詩と出会い、また、たまたま耳にした衝撃的な「詩は舌の快楽」という言葉が、その後の私の人生を決定づけることになった。詩に心惹かれ、当時の教養部英語教室に集った詩を専門とする先生方に導かれ、二回生時には、英詩の代表作をせつせと筆写し、韻律分析(scansion)に余念がなかった―詩が文学を代表し、皆、そのように文学に親しんでいると思ひ込んでいたが、実際は、違った。私は少数派で、同学の士に出会うことは、今もって、まれである。

それが、ついに、出会ったのだ。松波君との出会いは、私には、ドイツ語と英語という違いはあれ、嬉しい限りであった。ここに紹介したい彼の快著はドイツ詩の韻律論にまつわる専門書、いわゆる、モノグラフである。実際、博士論文に基づくもので、一般向けとはとても言えない。しかし、言葉の魅力に取りつかれ

た人には、ぜひ、一読願いたい。いや、読まねばならない。

詩にはリズムがある。そしてそのリズムは、言語自体に内在する本質的言語特性の体现である。したがって、一言でリズムと言っても、言語特性の違いによりその表れが異なる。例えば、日本語やフランス語は音節数に基づくリズム、我らが英語、ドイツ語は強勢の強弱に、古代ギリシア語詩は音量の長短に、基づくとされる。しかし、稀に、文化的影響力が言語特性を凌ぐということが起きる。実際、古代ローマ帝国の公用語であるラテン語詩においては、文化的規範としてのギリシア詩の影響は絶大で、ウエルギリウスをはじめ、ローマの詩人たちは、自らの言語に、自己と異なる、規範とすべきギリシア詩の響きを強要し、なんと、その獲得に成功した。

ルネサンス以降のヨーロッパにおいて、西洋古典文学の影響力は圧倒的であり、その創作原理は「創造的模倣」(creative imitation)と呼ばれ、現在もてはやされる独りよがりの「独創性」とは違って、規範に基づき創意を発揮する。その規範は、詩のリズムにあつては、ギリシア詩やラテン詩に基づくものとなるが、ここで問題になるのが、例えば、英語の言語特性が、規範となる西洋古典語とは異なるということだ。というわけで、強勢によるリズムの英詩では、用語はそのまま規範となるギリシア詩のものを引き継ぎ dactylic と呼んでも、実際は、強弱弱調のことであり、本来のギリシア詩における長短短調とはずいぶん味わいが違うことになる。

それに加えて、「創造的模倣」が発揮されるのは用語にとどまらない。ラテン詩がギリシア詩の響きを自己のものとしたように、英詩においてもまた、古典詩の響きを獲得しようとする企てが少なからずみられた。英国ルネサンス期を代表する詩人 Sir Philip Sidney (1554-86) や Thomas Campion (1567-1620) の試みが名高いが、残念ながら、思い通りの成果は残せなかったとされる。この野望は、ヴィクトリア朝末期になつても完全には消え去ることなく、例えば、Robert Bridges (1844-1930) によつて、再度、挑まれることになる。一方で、彼の同窓生であつた Gerard Manley

Hopkins (1844-1889) は、英詩のリズムは強勢に基づくという確信から、独自の sprung rhythm を創出し、英詩史に新生面を切り開いた。

英詩の専門家として英語のリズムは基本的に強勢に基づく (accentual) と信じていた私は、同じゲルマン語派に属するドイツ詩も事情は同様であると安易に思ひ込んでいた。しかし、私は、ドイツに、英国よりもはるかに刺激的な、古典詩との格闘があつたことを単に知らずに、著者の批判する「ステレオタイプ」(十頁) な言説に安住していただけだったのだ。しかも、それは英詩の場合とは違って、著者によれば、「異言語の原理の移植、音韻原理の改造」(十八頁) によつて、古典詩の響きをドイツ語において再現することに、苦心の上、見事に成功したというのだ。

本書が主題的に取り上げる詩人は Johann Heinrich Voss (1751-1826) である。とつて、西洋文学に詳しい人にも決して馴染みのある名前ではないだろう。彼は、そのホメロス翻訳において、ヘクサメタと呼ばれる西洋古典詩ではおなじみの叙事詩に用いられる詩形の味わいをドイツ語に導入したことで知られる。しかも、その功績を、その後の権威ある批評家たちの多くは過小評価した―それも、「テキストの文言そのものに直接当たることをしない」(八頁) でだ。著者の批判の舌鋒は鋭い―フォスの詩文を舐めるように味わつたという実感が著者にはあるからであろう。

もちろん、本書のハイライトは何といつても「オリジナルを超える」と題された第三章における、もとのギリシア詩における味わいと比較しながら、フォスが、「オリジナルを超え」ていく実相を、詩文に即して著者が紐解いて見せる手際の見事さにある。ドイツ語を強弱アクセント言語と決めつけることなく、ドイツ語の可能性に賭けたひた向きな詩人の姿には、著者自身の、詩の理解にかけた熱情と相まって、読み手の胸に迫ってくるものがある。本書を専門家のみならず広く文学研究を志す若人に推薦する所以である。

*松波列さんは、二〇一七年三月人間・環境学研究科博士後期過程修了、二〇一九年九月博士号取得。現在、京都大学ほか非常勤講師。

千田豊 著

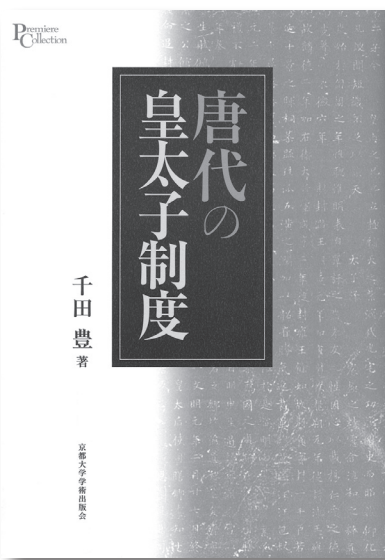
評者・猪俣貴幸（立命館大学文学研究科博士後期課程、京都外国語大学非常勤講師）

『唐代の皇太子制度』

京都大学学術出版会

定価 三、二〇〇円

二〇二一年三月刊 二二〇頁



このたび、「皇太子の千田」と渾名される著者が、その博士論文をもとにした本書を公刊したことは、専門を同じくする評者にとっても、洵に心うれしいことである。

王権の世襲が始まってよりこのかた、その安定的な継承を目的としてできたのが、次なる帝王を後継指名しておく儲貳（皇太子）の制度であった。前近代中国において皇帝制度を補完する重要なものでありながら、意外にも従来の研究において皇太子そのものに焦点を絞ったものは少なく、その意味で本書は中国史研究に新たな地平を開く意欲作といえる。

著者も指摘するように、一口に「皇太子」といっても、秦漢時代に成立してより、魏晋南北朝を経て隋唐にいたるまで、王朝ごとに異なる国制のもとで、種々のマイナーチェンジがおこなわれてきた。それらを、

丁寧史料を引用しつつ、懇切に説明してゆく姿勢には、著者の実直な人柄があらわれている。

まず第一章、もともと皇太子の教導役とされた太子師傅・賓友の任命件数が、西晋時代に拡大する原因を考察する。貴族制の時代にあつて、名譽職化した当該官職を名聲ある士大夫に兼官させることで、朝廷の支持基盤を固める意図を指摘する。漢代には帝室内の問題であつた皇位継承が、魏晋にもなると外戚や閹係勢力を広く巻き込んだ派閥抗争へと複雑化し、そこで太子を取り巻く東宮官が重視・利用されていくという論旨は明快である。

第二章では皇太子の正当性を象徴する儀礼の「積奠」に注目し、南北朝では恒常的な戦乱により、万一の時の皇帝のスペアとして皇太子が重視され、監国などに先んじて積奠が行われることを確認した。また唐代になると、「鹵冑の礼」が強調されることを指摘する。これは皇太子が長幼の序をわきまえることを百官に顕示する意味をもつたという。つまり、積奠と鹵冑にはいずれも皇位継承者としての資質を百官にアピールするねらいがあつた。

唐代に特有の太子号の追贈や太子廟に着目する第三章・第四章では、皇太子位が唐代において官爵化してゆく過程と、皇帝の兄弟を手篤く祭る「悌」の実践という観点で一連の動きを理解する。先行研究が、評者も含めて礼制ばかりに気を取られていたのを、著者はその枠組みを超えた視野で、この結論を導き出していることは評価すべきだ。

第五章については疑問が残つた。皇位継承過程で重視された「監国」が「権勾当軍国事」へと置き換わつてゆくさまを分析する本章で、著者は「監国」の定義を明確には示しておらず、史料上の「監国」の字句をその判断基準にしているようである。しかし、憲宗以降「勾当」と「監国」を区別せず用いている史料が見られるほか、『冊府元龜』の監国項には「監国」とは

明記されないものまで含まれる。その史料蒐集基準などに今少し踏み込むべきではなかったろうか。また、文宗以降の立太子が崩御間際の発詔のみでおこなわれている事実には触れていないが、これと「監国」の実施がなくなることは無関係であろうか。たとえば、文宗末に立太子された陳王は、詔により太子指名されたものの冊立儀礼は行われていなかった。武宗擁立劇における宦官仇士良らの動きは、①潁王（武宗）を迎え、②文宗の遺詔を矯めて陳王の太子監国を中止し、潁王を皇太弟に立て、③少陽院に赴き、④東宮の思賢殿で百官と謁見させるといふもので、②により立太子されていた陳王を無力化し、③④により潁王の正統性を担保せんする動きは、「権勾当軍国事」の効用というよりは、監国できる（立太子儀礼を経た）皇太子の不在に起因するのではなからうか。もちろん、その背後にうごめく宦官の分析も忘れてはならない。

著者は結論に、こうした皇太子の変容は、宋代以降のいわゆる「君主独裁制」に向かう変化の一端として認識でき、近世の皇帝制度は、魏晋南北朝隋唐のいわゆる中世において、徐々に醸成されたものであるという巨視的展望を示している。であるならば、五代から宋への接続部分（すなわち、唐末から北宋真宗朝までの皇太子不在のおよそ百年間）についての言及がないのは惜しい。また、全体を通して少々残念なのは、基礎的な訓読の誤りが少なくないことである。

しかし、それらは著者がこれからの研究生活の中で一つ一つ解明してくれるだろうし、本書に触発されたものが、皇位継承や皇太子位に関する研究を展開し、ますますこの分野の研究を盛んにしてくれることだろう。本書の真価はそこにある。

*千田豊さんは、二〇一九年三月人間・環境学研究科博士後期課程修了、同年同月博士号取得。現在、大手前大学非常勤講師。

谷川嘉浩^{ちがわ けいこう} 著

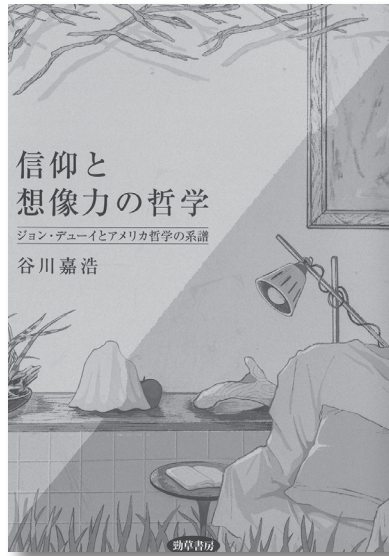
評者・朱喜哲^{しゆき せつ} (大阪大学 社会技術共創研究センター 招へい教員)

『信仰と想像力の哲学——ジョン・デューイとアメリカ哲学の系譜』

勁草書房

定価 五七〇〇円

二〇二二年二月刊 三五一頁



ある哲学者を中心に据えた学術的テキストは、どのように書かれるか。典型は、一次文献にこだわり、その体系的や論証の当否を吟味するスタイルである。その際、影響関係や二次文献に目配せしつつも、主要な「登場人物」は必要最小限に絞り、それぞれの位置づけ（配役）を整理するのが、論旨と構図を明確にし、主役を引き立てるうえでのセオリーだろう。

本書は、副題の通り、アメリカを代表する哲学者のひとりジョン・デューイを中心的に扱う著作である。著者の独自性は、主題の通り「信仰」と「想像力」を鍵概念とし、デューイの宗教哲学に光を当てることで、その哲学像全体を更新する点にある。

こう紹介すると本書もまた典型的な哲学者研究の書であると思われる。しかし実際に読めば、本書の異彩さはすぐに明らかになる。本書では導入と序論、終章を除いた本論八章すべてにおいて、タイトルロールたるデューイの登場シーンは限られ、同等かそれ以上

の紙幅が「ゲスト」に割かれる。その人選の多彩さもさることながら、配役もバリエーションに富み、各々が「斬られ役」などの類型に収まらない複雑な魅力を放つ。

こうした「セオリー」外のスタイルは、もちろん意識的に選ばれている。著者はデューイを、現在に至る大衆社会が史上はじめて成立したアメリカ合衆国に生き、先人や同時代の知識人との影響関係のなかで自身の思想を紡ぎつづけた「時代の集合知」と捉える。ゆえにこそ、本書は各章でトピックとキャストを入れ替えた群像劇を展開しつつも、全体を通じてこれ以外にはないと思われるほど見事に「アメリカの哲学者」知識人」デューイの姿を描き切っている。

八章にわたる群像劇は二部構成だが、気になった章から読むことができる。評者としては、W・リップマンの「ステレオタイプ」論におけるデューイ誤読を指摘し、理路をとまげずことで彼が陥った隘路を突破する小気味よい第二章、デューイを「悪しき楽観主義」とする人口に膾炙した旧来のイメージを相手どり、建国の政治家ジェファソンをも参照しながら鮮やかに一変させる第八章をまず推したい。

ただ本書の真価は、各章の反復と共鳴にこそある。どの順であれ読み通し、再読することによってしか得られない読書体験を提供する一冊であることは重ねて強調したい。以下では、本書全体をより滋味深く味わうための手がかりを二点提示しよう。

一点目は、多彩なキャスト陣のなかでとくに注目すべき「系譜」だ。本書の複数章に登場する、デューイ（一八五九—一九五二）から一世代後のリップマン（一八八九—一九七四）、さらにもう一世代後のD・ブーアスティン（一九一四—二〇〇四）である。哲学研究において言及されることは珍しいこの両名と関係づけながらデューイを読むことで、読者は「各々の時代に対峙する知識人」像を立体視することができる。

二点目は、この「知識人」の実践例こそが、序論で提示され、本書を貫くデューイの宗教論にはかならないということだ。なぜ本書はデューイという「典型的な近代の自然主義哲学者」の宗教論に着目するのか。

端的な回答は、まさしく彼が当代きつての自然主義者として、宗教における「超自然的な説明の一切を拒む」からだ。

かつては宗教こそが個人々人を結びつけ、社会単位での共同性・公共性の感覚を担保した。ところがデューイの時代には、自然科学を載いて産業化された近代社会が出現する。宗教はかつての権能を失い、孤立した人々は大規模化・複雑化した社会を漂っていた。デューイはそこで知識人としての役割を果たそうとする。それは、過去から連なる「知的遺産」に「どんな改訂や放棄が必要か」を提示することだ。彼はまさしく「信仰」のような宗教的語彙を制度的宗教から切り離し、心理学をはじめとした当時の科学的知見を動員しながら再記述・改訂を試みたのである。

残る問いは次だ。当時のデューイの営為から、現在の私たちは何を学べるのだろうか。その時代の課題を受けての「改訂」は、そのまま現在も効力をもつわけではあるまい。さらには、そもそも「知識人」というあり方自体が今日において成立するだろうか。

本書は前者の問いに対しても理論的な応答をなしている。ここでは後者の問いに対してのみ評者なりの応答を示しておきたい。それはデューイならぬ著者自身の営為を指摘することだからである。本書に数多く登場する固有名には、現代の日本語詩人である最果夕ヒや漫画家のヤマシタトモコまでもが含まれる。また各章冒頭の註などでは、著者が影響を受け、そして与えたであろう者たちの名が分野を越えて連ねられている。同時代において、それぞれが引き継ぐ「知的遺産」を改訂・放棄しながら何らかのことは紡ごうとする者たちの連帯は、こうして明示され、具現化していく。少なくとも評者は、この振る舞いそのものに著者の「信仰」を見、そして自らの希望を新たにしたい。

* 谷川嘉浩さんは、二〇二〇年三月人間・環境学研究科博士後期課程修了、同年同月博士号取得。現在、京都市立芸術大学美術学部デザイン科特任講師ほか。

黒田一平 著

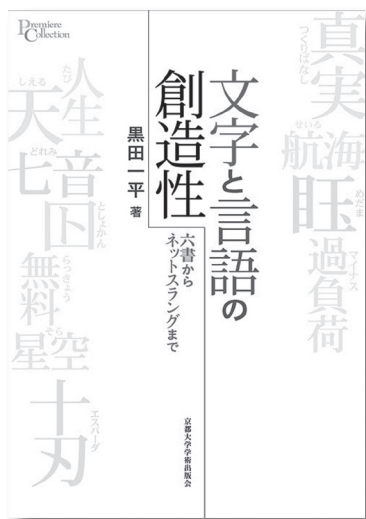
評者・宮川創 (京都大学大学院文学研究科・助教)

『文字と言語の創造性
六書からネットスラングまで』

京都大学学術出版会

定価 四四〇〇円

二〇二一年三月刊 三三八頁



本書は、認知言語学において研究がこれまで体系的に行われてこなかった文字論、すなわち認知文字論を打ち立てた大作である。認知言語学は二〇世紀後半にアメリカ西海岸で生まれた理論言語学の一分野である。しかし、認知言語学では、主に、語や文の意味を研究する意味論や語を組み合わせて文にする過程や仕組みを研究する統語論を中心に研究がなされてきた。それに対して、統語論よりもよりミクロな視点をもつ、語の形成法を研究する形態論、音の言語内での体系を研究する音韻論、言語音の調音位置・調音方法や音響的分析、聴覚の仕組みなどを研究する音声学を、認知言語学の枠組みで扱った研究は多くはない。そのような流れのなか、本書のように、文字論まで認知言語学の枠組みの中で体型立てて論じたものは、管見では、世界的に見ても珍しい。書評者が研究しているエジプト言語学では、ヒエログリフの一部の文字の使用法について、メタファーやメトニミーなど認知意味論を使用しているものはいくつか存在する。しかし、本

書は、ある特定の文字のある特定の現象を認知言語学的に分析するこれまでの研究とは異なり、世界の全ての文字について適用できるように一般性を持たせた画期的なフレームワークを提示する。

本書が提示する認知文字論の核となるのは「拡張記号モデル」である。これは、認知文法の創設者のロナルド・ラネカーの「記号モデル」を拡張したものである。ラネカーのモデルでは、言語の記号としての性質を唱えるために、音韻極と意味極を設定した(これは、チョムスキーのPFとLFの対立に似ている)。これに対して、黒田の拡張記号モデルは、文字の記号としての性質を表すために、音韻極と意味極に、書記極を追加したものである。

まず、黒田は、古代エジプトのヒエログリフ、古代メソポタミアの楔形文字、そして漢字など世界の様々な文字体系について、楔形文字のトークンからの発生など歴史的知識を踏まえながら概観した後、この拡張記号モデルを用いて漢字を分析する。分析方法としては、後漢の許慎が表した『説文解字』における六書と呼ばれる文字の六分類、すなわち、象形・指事・形声・会意・転注・仮借を用いながら、漢字を中心に、ヒエログリフや楔形文字における同類の現象にも視野を広げて、それぞれの現象を拡張記号モデルで説明していく。中には、「木」、「林」、「森」などの重複型会意など「複数性」のプロトタイプから拡張事例として生じ、意味的にもより抽象化したケースなど、一見文字固有であると思われるような様々な現象がある。しかし、そのような現象の多くが、文法化など言語変化一般に見られるプロセスと類似することを本書は指摘している。そして、文字に特有の変化に関しては、意味極と音韻極だけの音声言語と異なり、書記極が追加され、さらに複雑になった文字言語の、音声言語との違いによるものであると本書は分析している。文字の変化や多義性などで見られる様々な現象は、音声言語と同様、メトニミー、メタファー、シネクドキ、類像性、スキーマと拡張事例、構文化、プロファイルシフト、トラジェクターとランドマーク、前景化、メンタルスペース、概念ブレインディングなど、認知言語学で用いられている理論的道具で説明することが可能であ

る。そういった認知言語学における理論的道具を用いた文字現象の分析が本書の大部分を占めている。

本書の大変優れた点の一つは、様々な文字における類型の変化や、現代のインターネット上での、旺盛な文字ベースの創造的言語活動による新たな文字用法の創造が、文法化理論で盛んになっている文法化・語彙化・構文変化のメカニズムとそれぞれ同じ認知プロセスを経て形成されることを見抜いたことである。文法化とは、英語の *be going to*「しに行っている」が、未来時制の標識へと変化し、さらに口語では *gonna* になったように、内容語の機能語への変化、そして、音韻的縮約が生じ、句が語に、語が接辞に、とレベルが変化する言語変化である。インターネットスラングの「(笑)」は、書記極と音韻極の縮減、および、意味極の抽象化をともなう「w」に変化し、さらにそれが重複的会意として迂言法的に「草」に変化した。この原因は、書記極における *w w w* と草原に生える草の視覚的類似性からであると本書は説明している。さらに憂鬱や理想郷などのルビ、愛夜姫や月などの、いわゆる「キラキラネーム」についても、本書は、拡張記号モデルでそのような複雑な読み方の認知プロセスを分析している。

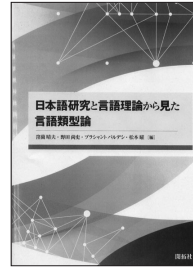
日本語は、ひらがな・カタカナ・漢字・ローマ字など、様々な文字種を混合する、世界でも希少な複雑な文字体系を有する。さらに、日本語は、ルビなどの印刷文化、アスキーアートやネットスラングなど、文字を使った新しい表現が日々創造されている豊かな文字文化を持つ。本書は古代の楔形文字・ヒエログリフ・漢字の成り立ちから現代日本のインターネットの文字文化まで、認知文字論という新しい理論を用いて体系的に分析した大作である。本書のように、認知言語学の枠組みで文字の様々な現象を統一的に分析したものは、ヒエログリフを研究している評者の管見では皆無である。海外の研究者にも本書を薦めたいので、ぜひ本書の英訳を出版したい。

* 黒田一平さんは、二〇一六年三月人間・環境学研究科博士課程単位認定退学、二〇二〇年三月博士号取得。現在、京都大学ほか非常勤講師。

人環図書 — 教員自らが語る新著 —

日本語研究と言語理論から見た言語類型論

窪園晴夫、野田尚史、ブラジヤントパルデシ、松本曜編
開拓社 二〇二一年二月



本書は国立国語研究所で二〇一六年から行われてきた対照言語学プロジェクトの集大成の一つとして出版された論文集である。各論文はプロジェクト発足以来、

毎年開催されてきた Prosody and Grammar Festa という全体会議で発表されたものの一部であり、第一部は、とりたててオノマトベといった日本語に特徴的だと考えられがちな現象を類型論の中に位置づけて考察する論文からなり、第二部は、生成文法や認知言語学、最適性理論といった言語理論と類型論の関係そのものを問題とする論文で構成されている。

話者人口こそ多いものの、世界の言語学の中で日本語が対象となることはそう多くはない。そのため、日本語を研究することにどのような意義があるのか、日本語の研究とは何をすることなのかという根本的な問いから逃れることは難しい。また、基本的には英語の研究から生まれた言語理論を使って他の言語の研究をすることにどのような妥当性があるのかという、理論言語学ならではの原理的な悩みもある。本書収録の各論文は、記述を重視する類型論という枠組みに位置づけたときにどのような日本語の姿が見えてくるのか、言語理論と類型論を接続するときにどのような利点や問題点があるのかという問いに向き合うものであり、日本語の研究や理論研究の意義についてそれぞれの展望を示している。

個別言語の丹念な記述やそこからの理論化は言語学にとって不可欠である。それらの研究がどのような射程のもとでなされるのかという問いもまた不可欠であることを、類型論という分野は改めて考えさせてくれる。(守田貴弘)

〔A五判 三三八頁〕 四、四〇〇円

文化冷戦と科学技術—アメリカの対外情報プログラムとアジア

土屋由香著
京都大学学術出版会 二〇二一年二月
日本学術振興会・二〇二〇年度科研成果公開促進費・課題番号#20HP5241



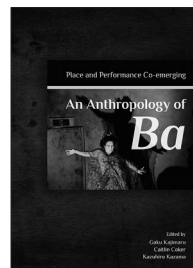
科学技術が「文化の一部」であるなどと主張すると、理系の先生からお叱りを受けてしまいそうだが、本書は、科学技術がいかに冷戦期の国際社会と共振し、

アメリカおよびアメリカの技術援助を受けた国々の文化を形成したかという物語である。筆者はアーカイブを使った実証歴史学の手法とアメリカ文化史を学び、アメリカの文化外交・広報外交を研究してきた。しかし今から十年余り前に、ある転機が訪れた。いわゆる狭義の「文化」だけではなく、科学技術を「文化」としてとらえると、冷戦はどのように見えるだろうか。その時抱いた疑問への一応の回答が、本書である。前半(一〜四章)は、アメリカの推進する「アトムズ・フォー・ピース」(平和のための原子力)が外国、特にアジアの政治家・技術者・留学生たちにどう受け止められたのかというテーマを中心に展開する。しかし、太平洋の核実験がアメリカの核・原子力のイメージ低下をもたらし、原子力がもはや「夢の技術」ではなくとなると、アメリカの対外情報プログラム(今の言葉では「広報外交」)の中心は、医療や宇宙開発などの分野へとシフトして行く。後半(五〜七章)では、医療援助船「ホープ号」やアメリカ初の有人宇宙飛行計画「マーキュリー計画」に焦点を当て、これらが自由・博愛・公開性などアメリカの「文化的」特徴を表すものとして喧伝されたこと、そしてその限界についても論じている。外交史と文化史、科学と政治を架橋する研究になっているだろうか。(土屋由香)

〔A五判上製 二五〇頁〕 三、五二〇円

An Anthropology of Ba: Place and Performance Co-emerging

KAJIMARU Gaku, Caitlin Coker, KAZAMA Kazuhiro 編
京都大学学術出版会 & Trans Pacific Press
二〇二一年三月出版



本社未来形発信ユニットの支援企画として出版された論集。従来様々なアクターを包摂する容器のようなものとして場所を論じてきた人類学的場所論や空間論に対して、それ自体がエイジェンシーを持ち人々の行動に影響を及ぼすものとして場所を捉えるための概念として「場」を提起し、場所とパフォーマンスの共創的関係性を描き出しています。

執筆陣は人環文化人類学分野で研鑽を積み現在中堅・若手研究者として活躍する文化人類学者です。本書では暗黒舞踏や秋田県の民謡大会といった日本の事例から、ポーンペイ島の儀礼的祭宴、トルコの一大民族フェスティバル、オセアニアの太平洋アートフェスティバル、北インドのチベット難民芸能集団、ジャマイカのラスタコミュニティ、スピリチュアルな人々が集まるイギリスのグラストンベリーといった、グローバルで多彩な事例から、様々な「場」とパフォーマンスのありかたが描き出されます。

「場」は日本語由来の概念ですが、東洋対西洋といった陳腐な対立を持ちだしたいわけではありません。本書を、あらゆる場所が「場」的側面を持っていること、自身を含め誰もが「場」とともにのなかで生きていることを理解する手掛かりとしていただければ嬉しいのです。(梶丸岳)

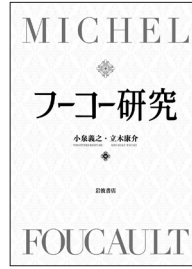
〔菊判並製 二〇四頁〕 三、五二〇円

フーコー研究

小泉義之、立木康介編
岩波書店 二〇二一年三月

ミシェル・フーコー『コレージュ・ド・フランス講義』を読む

佐藤嘉幸、立木康介編
水声社 二〇二一年三月



二〇一七年四月から二〇二〇年三月にかけて京都大学人文科学研究所を拠点として行われた共同研究（「フーコー研究…人文科学の再批判と新展開」）の成果となる書籍である。二〇世紀フランスを代表する哲学者のミシェル・フーコーが亡くなってはや四〇年近くがたつが、その著作はいまだ多くの人に読まれてきている。たとえば最近では、コロナ禍において人間の生が政治的な賭け金として前景化するなかで、フーコーの提唱した生政治概念にあらためて注目が集まった。

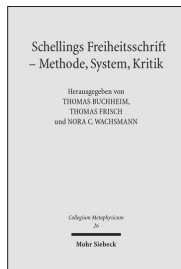
フーコーといえは、『狂気の歴史』『言葉と物』『監獄の誕生』といった名著が有名だが、一方で彼は、一九六九年にフランス最高の教育機関とも言われるコレージュ・ド・フランスの教授に選出されると、翌七〇年から死去する八四年まで毎年多様なテーマを講じ、「教師」としても名声を博した。生前の著作には結実することのなかった多くのアイデアを含む本講義の講義録は、一九九七年に刊行が始まり二〇一五年に完結した。上述の共同研究はそれゆえ、こうしてフーコー関連の資料が一通り出揃った後に開始されたものとして、世界初と言ってもよい大規模なフーコー研究となる。その充実した成果（と熱気）が詰め込まれた

両書をぜひ手に取って、哲学、文学、政治学、精神医学、社会学、西洋古典学など、多面的な角度から光をあてられた新たなフーコー像を目の当たりにしていただきたい。（武田宙也）

「A五判 五九〇頁」 一七、六〇〇円
「A五判 三八六頁」 六、六〇〇円

Schellings Freiheitsschrift—Methode, System, Kritik

Thomas Buchheim, Thomas Frisch und Nora C. Wachsmann 編
Mohr Siebeck 二〇二一年四月



ドイツ古典哲学の精華、シェリングの『人間の自由の本質』を巡る今日の研究の到達点の一つを示す大部の論文集。本書所収の二十三篇は、ドイツ研究振興協会（DFG）の助成による積年の国際的共同研究が結実したものである。拙論「Schelling und Spinoza über menschliche Freiheit」は、シェリングがスピノザによる「自由」の定義を殆どその儘踏襲しつつも、スピノザ流の決定論に抗して、人間の自由を擁護する立場を取りえた理由を探り、以てその自由論における独自の理路の闡明を試みた。（安部浩）

「二七×二五・一cm 五〇三頁」 九九ユーロ

中国農漁村の歴史を歩く

太田出著
京都大学学術出版会 二〇二一年四月



本書は、筆者が大学院生時代から取り組んできたフィールドワークの成果を取り入れながら、中国の農漁村の一般庶民の歴史を描き出そうとしたものである。

一般に文献史料は文字を駆使できる知識人層の手になるものであり、非文献の世界に生きる一般庶民の生活についてはほとんどページを割かなかつたからである。本書の構成は、第一章／地域社会論とは何か、第二章／太湖流域におけるフィールドワークの系譜、第三章／歴史学者とフィールドワークの実践、第四章／華南農村を歩く、第五章／村のなかの村の名残、第六章／水上に暮らす人々、第七章／近現代の水上世界と今もなお生き続ける「伝統」、第八章／近現代中国の政治と日本住血吸虫病、第九章／近現代中国の日本住血吸虫病と語られる血防、第一〇章／現代中国の輸入性血吸虫病と「一带一路」構想、となっており、写真や図表を多数掲載したヴィジュアルなものとなっている。周知のとおり、近年中国は急速な勢いで経済的な成長を遂げており、都市も農村も北京オリンピック、上海万博以降とでは大きく変貌している。一方で、経済的な格差も広がり、農村はやや取り残され、今もまだ貧困にあえぐ人びとが少なくない。本書では、実際に中国の農漁村を歩くなかで、農漁民に正面から向き合っている。彼らの歴史と現状を克明に書き残そうとしたものである。近現代中国の歴史と現代のグローバル化のなかで、彼らが政治や経済の変化に翻弄されながらも、いかに自らの生活を維持しようとしているのか、読みとっていただければ幸いである（太田出）。

「四六判 二九七頁」 一、八〇〇円

小説読解入門―「ミドルマーチ」教養講義

廣野由美子著
中央公論新社 二〇二一年四月



本書は、二〇〇五年に上梓した『批評理論入門―フランケンシュタイン』「解剖講義」の姉妹編である。前回は、メアリ・シェリーの一人称小説『フランケンシュタイン』を具体例として用いながら、第一部では「小説技法」について十五の観点から、第二部では「批評理論」について十三の観点から解説した。今回は、ジョージ・エリオットの三人称小説『ミドルマーチ』を具体例として、第一部では「小説技法」について前とは別の十五の観点から、第二部では「教養」の十一部門を挙げて各観点から解説した。両書は共通のコンセプトで貫かれ、相互補完的な役割を果たしつつ、小説の分析方法を提示したものである。

ここで、本の成り立ちについての内幕を述べさせていた。前著は、私が京都大学に着任して間もなく総合人間学部で行った講義をもとに、まとめた。今回は、出来立ての本をもとに、定年退職がそう遠くもない現在、同講義で話をしている。いずれにせよ、姉妹編二冊をとおして、私の本に最も「濃厚に」接してくれたのは、総合人間学部の受講生たちである。新書は五時間ほどあれば読めるが、授業では（前期に第一部後期に第二部を扱い、一年かけて講義している）四十数時間ほど、学生は私の話につき合ってくれているわけだ。そういう意味では――教科書は原書テキストなので、学生には私の本を読ませてはいないが――どんな読者よりも、まずは彼らに感謝しなければならない。（廣野由美子）

〔新書判 二七三頁〕 九九〇円

大航海時代の群像…エンリケ・ガマ・マゼラン
(世界史リブレット人47)

合田昌史著
山川出版社 二〇二一年五月



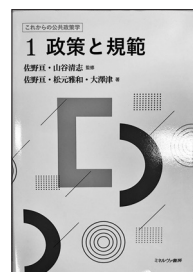
大航海時代は日本・アメリカ銀の流通による経済のグローバル化という観点から近代世界への端緒とみなされることが多いが、時代の動因として経済は過大に

評価されるべきではない。海上拡大が国家の財政に大きな影響を与えるほど儲かる事業となったのは、開幕から約七〇年経た頃からである。本書では代表的な担い手として三名のポルトガル人、すなわち王族のエンリケおよび下層貴族のヴァスコ・ダ・ガマとマゼランをとりあげ、中世の世界の延長上にある時代としての側面を描出した。手掛かりとしたのは二つのキーワード、マグリブと騎士修道会である。かつてマグリブはイベリア半島の戦士階級にとつて社会的昇進の機会をもたらす場であった。その西部モロッコへの進出はポルトガルが先行し、セウタ総督エンリケはモロッコ軍に執着する貴族層の代弁者となった。一五世紀末、アジア・アメリカへ進出がなされた後も、マグリブにおける戦いは強化された。新たにスペインが参入し、両王室内に十字軍熱が再燃したことがその背景にあった。この頃、十字軍精神の器、騎士修道会が海上拡大の重要な担い手となった。ポルトガルの遠征隊と海外領諸拠点の要職は騎士修道会員によって占められていた。同会に庇護されたガマが英雄への道を辿ったのと対照的に、同会と縁がなかったマゼランは王宮で軽んぜられたが、スペインに移ると同会で昇進し遠征隊の総司令となった。コンキスタドールのなかにも新大陸とマグリブを股にかける者がいた。（合田昌史）

〔A五変判 一一〇頁〕 八八〇円

政策と規範

佐野亘、松元雅和、大澤津著
ミネルヴァ書房 二〇二一年五月



マイケル・サンデルの『これからの「正義」の話をしよう』などにみられるように、少し前から政治哲学や倫理学の議論を実際の社会問題に当てはめる試み

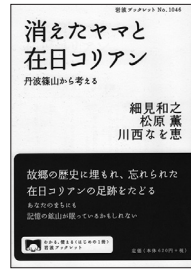
が増えています。ただその多くは表面的な単なる「機械的当てはめ」に終わりがちで、実際に政策づくりに悩んでいるひとたちにはいまいピンとこないものでした。簡単にいえば「Aの理論をXの問題に適用すると……の結論になる」ということなのですが、現場としては「そりゃそうだけど……」ということになりやすかったです。また、応用するにしても、応用方法そのものが明確に確立されているわけではないため、実際には、なんとなく思い付きで、都合のよいところだけできとうに当てはめてみる、ということになりやすかったです。もちろん「理論」の勉強は大切なのですが、それを現実に応用すること自体にもほんとうは適切な理論が必要になるはずで、にもかかわらずその点はじゅうぶん検討されてこなかったのです。そこで本書では、そもそもなぜ公共政策を考えるうえで規範理論を学ぶことが必要なのか、というところからていねいに説明したうえで、「理論を現実に応用する」とはそもそもどういうことなのか」というところまで理解してもらおうように考えて書きました。執筆者はわたしを含めて三名なのですが、わたしはともかく、あとのふたりは、理論を現実に応用することの難しさとおもしろさを身に染みてわかっているひとたちで、その迫力というか、切実さは読者によく伝わるのでは、と自負しています。（佐野亘）

〔A五判 二八二頁〕 三、〇八〇円

消えたヤマと在日コリアン―丹波篠山から考える

細見和之、松原薫、川西なを恵著

岩波書店 二〇二一年五月



私の出身地で現在も暮らしている丹波篠山市における在日コリアンの足跡を掘り起こしたものだ。

丹波篠山は戦前から戦後にかけて硅石の発掘を中心に鉱山産業が栄え、そこには多くの朝鮮人が労働力として組み込まれていた（「ヤマ」は鉱山を指す地元の言葉である）。戦後は、その家族の子どもたちへの民族教育が不可欠となり、民族学校の開設から民族学級の設置にいたった。

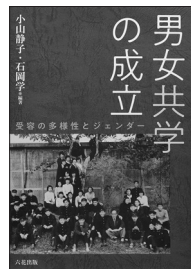
しかし、その歴史が丹波篠山市の公的な記録にはいつさい残されておらず、私自身、四〇歳で帰郷するまでじつは知ってはいなかった。そこから歴史の掘り起こし、大事な地点への銘板設置などを地元のひとたちと続けてきた。三人の執筆者はそのメンバー。市民活動の成果としても大事だと考えている。（細見和之）

〔四六判、岩波ブックスレット 八八頁〕 六八八円

男女共学の成立―受容の多様性とジェンダー―

小山静子、石岡学編著

六花出版 二〇二一年六月



戦前日本の学校制度において、中等・高等教育は完全な男女別学であり、カリキュラム自体も全く異なる差別的な構造であった。

戦後、日本の学校教育は「男女共学」が原則とされた。制度的に男女平等が実現したことの意味は大きいですが、果たしてそれによって本当に教育におけるジェンダー構造は解体されたのでしょうか。「男女共学」によって何が変わり、何が変わらなかったのか。本書は、各地の新制高校における男女共学のありようを歴史的に検討し、この問いへの解答を試みたものである。

それにしても、各地における男女共学の展開は、実に多様であった。本書は、足かけ約十年にわたって継続した科研費課題研究による成果であり、北海道から鹿児島まで全国十一の地域について十名の執筆陣による論考が収められている。このような研究はとても一人のできるようなものではなく、まずはそのこと自体に本書の大きな意義があると自負している。

また、本書は歴史研究ではあるが、全体を貫く「教育におけるジェンダー平等とは何なのか」という問題関心は、今日でも極めてアクチュアルなものである。学生の男女比が不均衡なこの京都大学において、それは全く他人事ではない。というより、学校教育に関わる者全員が、この問題の「当事者」である。その意味で、是非とも多くの人が本書を手に取り、関心をもつて一読いただければ幸いである。もちろん、興味本位でいろいろな地域の「男女共学」のようすを知るだけでも、読み物として十分に面白いものであることを付け加えておきたい。（石岡学）

〔A五判 二二六頁〕 三、三〇〇円

教育福祉の社会学―「包摂と排除」を超えるメタ理論

倉石一郎著

明石書店 二〇二一年六月



本書は、著者が様々な場書き散らかしてきた教育における「包摂と排除」に関する論稿を集め、ある程度全体の整合をとって一書としたものである。自分なりに打ち出した概念・アイデアは、①包摂と排除の同心円モデル、②包摂と排除の入れ子構造論、③包摂の一手手前、④創発的包摂の四つであり、章の順を追ってこれらを説き進めている。

同心円モデルとは、貧困や格差に心痛め何とかそれをテクニカルに解消しようとする善意の政策・制度が陥りがちな発想を概念化したものである。（序章）。②以下の概念はこの同心円モデルを批判的に乗り越えようとする企図からしぼり出した。第一章では、悪としての排除のあとに善たる包摂がやってくる、という自明化された時間的・価値的序列を揺さぶるべく、マイノリティ教育の具体例から、包摂の中に排除が、排除の中に包摂がすでに入れ子構造となつて種として宿され、それが実体化する様を例証した。第二章はニクラス・ルーマンの包摂／排除論を手がかりに、両者の表裏一体性の議論をさらに突き詰め、もはや問題は「包摂を立ち上げることにはなく、「平凡でないマシーン」としての人間存在の受け止めにあると論じた。第三章

はルーマンの議論を受け、「包摂の一手手前」の姿を、在日朝鮮人生徒を描いたビデオドキュメンタリーから読み取った。第四章では、同心円モデルで如何ともしがたいパタナリズムを克服する議論として、マイノリティ自身を包摂の主体と位置づける創発的包摂の視点を提起し、戦後日本の教育をめぐる「必要の政治」の事例からその有効性を例証した。第五章では米國映画の問題作『プレシヤス』を手がかりに創発的包摂の主体像を肉づけた。第六章は新自由主義色が強まる二一世紀の秩序の中で教育と家庭をめぐる綱引きを

論じた。

各章別々の機会に書かれたので書物としての統一性は弱い、底流にある問題意識の一貫性を読み取っていただければ幸いである。(倉石一郎)

「A五判 二二二頁」 二、五三〇円

CEFRの理念と現実―理念編 言語政策からの考察

西山教行、大木充編著

くろしお出版 二〇二一年八月

CEFRの理念と現実―現実編 教育現場へのインパクト

西山教行、大木充編著

くろしお出版 二〇二一年八月



本書はCEFR(『ヨーロッパ言語共通参照枠』)の教育現場への導入と言語政策からの考察をめぐる論集で、二〇一九年三月に本学にて開催された国際研究会「CEFRの理念と現実」の成果を中心として、それを増補したものである。

この数年來、大学入試への民間試験の導入をめぐる一連の騒動のなかでCEFRが英語のさまざまな民間テストを位置づける国際基準であり、CEFRのお墨付きがあればたどころに各種試験の導入に問題がないかのような言説が流布していた。しかしこれはすべて外国語能力の評価やCEFRをめぐる妄想にすぎない。

CEFRとは欧州評議会というヨーロッパの国際組織がヨーロッパの外国語教育、学習、評価の改善の指標として作成した資料であり、英語だけではなく、

ヨーロッパの諸言語に開かれた装置である。そして欧州統合の観点から市民や学生の流動性を高め、相互理解をうながすという政治的文脈に外国語教育・学習を位置づけるもので、複教言語を運用する欧州市民を養成する教育を構想している。これは複言語主義と呼ばれる、CEFRの推進する重要な理念となっている。ところがCEFRは国際社会で高く評価されているとはいえ、日本の英語教育をめぐる騒動でも議論された共通参照レベル、いわゆるA1からC2までの六段階の能力基準だけ注目を集め、複言語主義などの理念は置き去りにされている。

本書はこのような動向に焦点を当て、言語政策から教室へいたる課題の解明を試みる。(西山教行)

「A五判 二四〇頁」、 「A五判 二二二頁」
各三、三〇〇円

イマジナリーキューブパズル3HII6T

立木秀樹 考案・解説

株式会社イメージ・ソリューションズ 二〇二一年八月



立方体と同じように、直交する三方向から見て正方形に見える立体(イマジナリーキューブと名付けました)に興味を持ちはじめたのは十年以上前です。数学的に調べるだけでなく、オブジェを作ったり、パズルにしたり、小学校から大学までの教材として使ったり、この面白さを一般の人に伝えたいと思い、さまざまな活動をしてきました。

このパズルは、十年前に京都大学総合博物館ショップで商品化していただいた木製パズルの普及版です。木製パズルは手触りや見た目もよく、パズルとして最高でしたが、量産には向かず博物館ショップのみでの販売でした。今回は、博物館ショップや時計台ショップはもちろん、Amazonなどでも入手可能です。

パズルを解くこと自体が楽しいですが、私の狙いは、その奥にある数学に気がつき、数学を楽しんでもらうことにあります。このパズルは立方体の箱に二種類の立体を詰めるものですが、本当に解けているという確証は、人間の視覚や感覚ではなく、数学的な証明のみ得られるはず。説明書の裏面には、そのことの中学生にも分かるような証明や、この二種類の立体がなす空間充填構造の説明が書かれています。それを読んで、さらに興味をもって私のネットページも見てください。…というのが私の目論見ですが、そうならなくても、パズルを楽しんで、箱に九個の立体が対称的に入っている姿をながめるだけでも、数学的センスが身につくと思っっています。(立木秀樹)

「プラスチック(ABS樹脂、アクリル、PET)」
二、七五〇円

感銘を受けた3点

安部浩（哲学）

1. 保田與重郎、『萬葉集の精神―その成立と大伴家持』

「いきものとしての思想」と保田は言う。人麻呂の高市皇子挽歌を繰り返し誦する中に、この言の深意がゆくりなく見えてきた。「思想とはいきたいのちの何ものかである。それは何かを生む点で、神のものである」。

2. 「聖徳太子と法隆寺」展（於・奈良国立博物館）

幼少の頃から幾度となく詣でてきた法隆寺金堂。だが内陣は常に暗闇の帳に覆われ、見通し難い。その全容を本展覧会で初めて目に目の当たりにする。何と峻厳にして高雅な空間であろう。

3. 黛敏郎、「金閣寺」

岩城宏之の指揮による本邦初演の録音を聴く。これを機に三島の原作も再読。金閣を焼く「行為」への無私の跳躍を経て、恩寵の如く齎される生の意欲。原作の掉尾に見える右の主題が歌劇台本では省かれていることに、画龍点睛を欠く憾みを禁じ得ない。だが黛の筆になる底籠る拉鬼の響きと無明の歌の調べは緊迫した力に満ちている。

吉田純（社会学）

・太田愛『彼らは世界にはなればなれに立っている』（角川書店、二〇二〇年）

ファンタジーの形式のゆえにこそ、ディストピアの苦い幻滅へと収束してゆく寓話、そしてかすかに残される「人の奇跡」への希望。「人がよりよい世界を願い、それを実現しようとする時、そこには長く困難な歳月が横たわっている。……人の奇跡は時間の軸の中にあるのだ。」

・映画『デューン 砂の惑星』Part 1（ドゥニ・ヴィ

ルヌーヴ監督、二〇二一年）

学生時代に親しんだフランク・ハーバートの原作の政治劇・貴種流離譚・ビルドゥングスロマーン・環境SFといった多層性の魅力が、縮減されることなく、映像の一貫した流れとしてきわめて忠実に再現されていることが印象的。

・歌劇『夕鶴』（岡田利規演出、鈴木優人指揮、二〇二一年一〇月三〇日、東京芸術劇場）

夫・与ひょう（与儀巧）に見切りをつけたヒロインつう（小林沙羅）の別離は、私たちが住むこの現実の世界全体との別離でもあり、私たちは彼女に象徴される何かが去って不在のままの世界を今も生きているという現実気づかされる。原作の民話的世界の再現ではない、現代劇としての岡田利規演出は、その意味からすれば、むしろ自然な印象。

佐野亘（公共政策学）

毎年、この原稿執筆の時期になると、なんとなく緊張します。

・武田百合子『あの頃―単行本未収録エッセイ集』

ひよっとするとこのひとの文章がいちばん好きかもしれませぬ。単行本未収録の文章が読めるのがあまりにうれしくて、一気に読んでしまうのがもったいなく、毎晩少しずつドキドキしながら読みました。

・庄野潤三『エイヴォン記』

エイヴォンという名前のバラの花（など）をくれるご近所のひとの話と、孫のフーちゃんの話と、著者のお気に入りの短編小説の紹介の話が、バラバラなままひとつの文章のなかで語られていて、ものすごく不思議な感じですが、とても心地よいです。

・増田俊也『木村政彦はなぜ力道山を殺さなかったのか』

木村政彦は戦前に活躍した史上最強の柔道家で、戦後はプロ柔道やプロレスに「転向」したひとです。戦後も引き続き猛烈に強かったのですが、その木村がなぜ力道山に負けたのか、という問いがタイトルになっています。登場人物がいずれも破天荒で魅力的で、知らなかったことがたくさん出てくるのが楽しいのですが、それだけでなく「戦後の日本って何だったのか」とかいろいろ考えさせられます。

細見和之（ドイツ思想）

① 発見された、金時鐘さんの詩稿ノート

この夏、在日朝鮮人の詩人、金時鐘さんが一九四九年に日本に渡ってこられてから綴られてきた詩稿ノート八冊が見つかった。発見者は金時鐘さんご本人である。これによって、刊行直前に途絶し、原稿まで散逸してしまっていた幻の第三詩集『日本風土記Ⅱ』に収録されるはずだった作品で、これまで未発見にとどまった九篇も復元することができた。ノートの最初のほうにはハンデル書きの詩や文章も丁寧な字体で記されている。この詩稿ノートをもとに金時鐘さんの表現の原点を問うことができるようになった。引越しを繰り返して、さらには吹田事件とのかかわりで警察に持ち物を持ち去られ、詩稿ノートの類はすべて紛失してしまつたと語っていたのが金時鐘さんだった。この「発見」にはおそらくフロイト的な事態が大いに関わっているに違いない。

② 二〇年前のNSPの復活コンサート

中学から高校にかけてよく聴いていた日本のフォークグループNSP。自宅にあった彼らのレコードを研究室に持ち込んで、ポータルのプレイヤーでかけてみた。するとにわかになんかになって、Youtubeで検索してみると、リーダーの天野滋さんは二〇〇五年ごろに亡くなり（さすがにそのニュースは聞いていたような気がする）、さらに中村貴之さんも最近亡くなっていたのだった。いまでは平賀和人とただひとりなのだった（NSPはこの三人のグループ）。いったん休止状態にはいついていた彼らが二〇〇二年から復活コン

サートを続けていて、その模様が何本か YouTube にアップされていたのだ。最初の東京でのコンサートでは最後から二番目の曲「歌は世につれ」で、歌の途中で天野滋さんが感無量の涙で歌えなくなっているのだった。歌を歌うなら（私は一〇年前から曲作りをして、バンドで演奏もしているのだが）あんなふうに感情があふれるぐらい歌ってゆきたいものだった。

③低温調理器としての電気炊飯器

安い肉で絶妙なローストビーフを作ってみせようと、オープンでいろいろやってみた。そこそこのものではできないのだが、安定して作ることができなかった。火が入りすぎて固くなったり、時間が足りなくて血がしたたる状態であったり……。肉の形状・分量との関係が微妙なのだと思う。ところが、電気炊飯器を低温調理器として使う方法を知ってから、ほぼ間違いなしに理想的なローストビーフを作ることができるようになった。室温に戻した肉をまずオリブオイルでマリネし、塩と胡椒をまぶし、さらにすり下ろしたニンニクを塗りたくる。三〇分ラップで包んでおいて、フライパンで六面を焼き、それをラップでもう一度包んでから、ジップロックに入れて空気をしっかりと抜く。ここからが電気炊飯器の登場。炊飯器の下に皿を置き、ジップロックを入れ、六〇度ぐらいのお湯をジップロックの肉が埋まるだけ注ぎ、さらに重しとして皿の上に置く。炊飯器の蓋を閉じ、二十五分程度「保温」状態に設定しておく。二十五分たったところで炊飯器から取り出し、冷めるまで置いておく。あまり厚く切らないこともおいしく食べるコツ。百グラム二百円しないスパーの塊肉で十分おいしいものができます。

山川曉（博物館文化財分野）

歴史文化社会論講座には、京都国立博物館で開講する科目があります。担当教員は博物館の研究者です。マニアックな気質も重なって、博物館や専門とする染織品関係の世界に閉じ籠ってしまいがちな私ですが、この不穏なパンデミックの渦中、自身の感覚が揺れ動いた瞬間を振り返ってみました。

■鑑真和上像

唐招提寺が所蔵する、あまりにも名高い奈良時代の肖像彫刻を、特別展「鑑真和上と戒律のあゆみ」（三月二十七日～五月十六日）で博物館にお迎えしました。和上が着用する袈裟は、人が捨てて顧みない汚れた生地を拾い集めて継ぎ合わせ、雑巾のように運針を施し補強した糞掃衣（ふんぞうえ）であることが明らかです。無数に描かれる小さな針目に和上に寄せる製作者たちの心情が示されるようで、幾度も展示室に足を運び見入りました。

■山道に菊桐紋と枝垂桜模様段替唐織打敷

なんとも長い作品名ですが、段替わりに文様を織り出した唐織という生地でできた「打敷」と呼ばれる染織品です。博物館が受託管理する高台寺の所蔵品で、二か年に亘って修理を行っていました。九月、その完成記念記者発表が高台寺の本堂で催され、所縁の地で安定した状態の作品に再会しました。打敷とは仏前の机に掛けるテーブルクロスですが、俗人から寄進された衣服を再構成して製作されることがあります。この一枚も高台寺を開創した豊臣家関係者の衣服の仕立て替えです。拝観者もなく静かな高台寺で、この唐織を身に着けた人物を偲びました。

■東福寺方丈からの景観

十一月、ご近所の東福寺に作品調査に伺いました。入宋僧ゆかりの袈裟を研究する私にとって、東福寺の開山である円爾にはひとしおの思い入れがあります。調査の合間に昼食となり、方丈の東側にある部屋を使得せていただきました。窓の下は通天橋へと続く溪谷。偃月橋が近くに見えます。この景観を円爾も目にしたのでしょうか。歴史都市・京都に在る幸いを実感するひとときでした。

■柴山桂太（経済思想）

1. 小川三夫『技を伝え、人を育てる 棟梁』（文春文庫）

昨夏、ある雑誌の企画で宮大工の小川三夫氏にインタビューをした。「法隆寺の鬼」と呼ばれた昭和の大

名工、西岡常一氏の弟子として薬師寺西塔の再建などに関わり、現在は鶴工舎の代表として後進の育成に注力されている。インタビューの事前準備に小川氏の本を立て続けに読んだが、自らの経験から絞り出された言葉の強度と素直さに何度も心打たれた。『宮大工と歩く奈良の古寺』（文春新書）と合わせて、記憶に残る読書体験となった。

2. 五百旗頭真監修『評伝 福田越夫』（岩波書店）

福田越夫には、同時代の田中角栄と比べて地味な宰相というイメージがつかまとう。福田派から小泉純一郎が出たこともあって、「新自由主義右派」の元祖と見なされることも多い。だが本書を読んでイメージが変わった。大蔵省時代に高橋財政を支え、戦時中は汪兆銘政権の財政顧問を務め、戦後は政界随一の政治家として不動の地位を築いた福田は、（佐久間象山の薫陶を受けた）漢学者の祖父に漢籍の手ほどきを受けた大教養人でもあった。善悪両面でスケールの大きかった、昭和時代の典型的なエリート政治家だったと言える。

3. ショシャナ・ズボフ『監視資本主義』（野中香方子訳、東洋経済新報社）

グーグルやアマゾンに代表される米国のビック・テック企業を、個人情報無断で搾取して利益をあげていると非難する声は以前からあった。本書がひと味違うのは、新興デジタル企業の支配を、近代化論や資本主義論という大きな枠組みで位置づけ直したことにある。今後十年はこの分野で基本文献と見なされることとが確実な、「デジタル資本主義」解剖の書。

■勝又直也（中世へブライ文学）

最近視聴した、お気に入りの配信ドラマを紹介する。『The Shrink Next Door (Apple TV+, 2021)』【英語】コメディだと思って観たら面白くなって期待外れという意見もあるが、これは、精神科医と患者の危険な関係性を描いた、とても悲しい話。途中で胸糞悪くなって観るのを止めたくなるが、それだけ演者の演技が上手だということ。また、ユダヤ人である登場人物

たちの「ユダヤ性」の扱われ方もよい。「ユダヤ人だから」とか、「ユダヤ人なのに」ではなく、たまたま彼らはユダヤ人であるだけ。バル・ミツバやペサハのセデルも、ごく自然に描く。米国におけるユダヤ人の一つの「成熟した」あり方を垣間見ることができるといえる。

・ Shisel (yes Or: Netflix, 2013-2020) 【ヘブライ語】
私自身も十年間過ごしたエルサレムの一角で、前近代な暮らしを続ける超正統派（ハレディーム）のユダヤ人を描いた有名な作品。現代の日本に生きる我々から見たら正反対ともいえる、厳格なユダヤ教の戒律に基づき生き方や考え方について、実際に知ることができる。それと同時に、そういう彼らだが、当然のことながら、家庭や仕事のことでも悩んだりする「普通」の人間であり、その点では我々と何ら変わりはないということにも気づかされる。ニューヨークの超正統派ユダヤ人社会を（やや否定的に）描いた *Unorthodox* (Netflix, 2020) よりも、こちらの方がお勧め。

・ Omni Haroun (Shahid, 2020) 【アラビア語】
クウェートで作られたドラマで、中東の架空の村に住むユダヤ人女性が主人公。もちろん、話を盛り上げるために、ムスリムとユダヤ人の男女が恋に落ち、家族同士が揉めて、二人は駆け落ちをする、といった「トラブル」も描かれているが、むしろ我々にとって、この小さな村では、ムスリムも、ユダヤ人も、キリスト教徒も、ごく普通に一緒に暮らしているということの方が印象的。村で何かトラブルが起ると、イスラームのイマーム、ユダヤ教のラビ、キリスト教の神父と一緒にやってきて解決する。中世のアラブ社会でも、様々な隣人たちがこのように自然な形で一緒に暮らしていたのだろうか、想像が膨らむ。

小倉紀蔵（韓国思想）

韓国の李御寧先生といえは名著『縮み志向の日本人』で日本でも有名だが、三年前からこの先生の人生をオーラル・ヒストリーとして聴き取る作業をしている。そのお話から三点。一九三四年生まれの先生が併合植民地朝鮮で経験したことである。一つ目は、国民

学校にはいつて身体検査というものを受けて驚いたこと。自分のこのからだは親からもらった大事なもののに、学校が「検査」するとはどういうことか。二つ目は日本のイメージ。朝鮮では、清潔にしすぎると福が来ないという。だが日本人は掃除ばかりする。木箱などのものも、朝鮮製は分厚くて重いが、日本製はすべて軽くて薄くてきちんとつくられている。きちんとしたのを見ると「日本的」と思ったという。三つ目は姉の便箋。当時、朝鮮の女学生たちはみな、初恋をしたらきれいな便箋に恋文というのを書いてみたいという夢を持っていた。だが先生の姉は恋文を書く年頃になるまえに突然、親に命じられて見知らぬひとと結婚してしまった。「年頃の娘は挺身隊に連れて行かれる」という噂話があったから、親が姉を守ったのだ。姉が家を去ったあと、先生がそと姉の机のひきだしを開けてみると、そこにはきれいな便箋が、一枚も使われぬまま残されてあった。かつて先生が日本の講演でこの話をすれば、高齢の日本人女性はみな泣いた、という。

小林哲也（ドイツ文学・精神史）

1. Klaus Vondung: *Die Apokalypse in Deutschland*
ゼミで購読した一冊。一九八八年出版。キリスト教における「黙示録」が近・現代のドイツにいかにか生きていくかを考察する書。「黙示録的」であるとはどういうことかを方法論的に問いつながら、「千年王国論」、「メシアニズム」、「ユートピア」といった関連概念も思想的に整理する議論に大いに啓発された。院生が真面目に取り組み、内容を汲み取っていく様子にも感心した。

2. 『秘密の祈り』二〇〇七年、イスラエル映画。
ネットで視聴。ラビの娘として学識を尊びながら、女性であるがゆえに学識で社会的自己実現が阻まれていく主人公が、自らに目覚めていく過程を描く。もっと紹介されるべき映画。

3. スーザン・バクラー・モース『ヘーゲルとハイチー 普遍史の可能性に向けて』（法政大学出版局）。原書は

二〇〇九年、邦訳は二〇一七年出版。「世界史」の視点が西洋中心主義的であるという批判は数多いが、本書は単に認識を云々するのではなく、「普遍史の可能性」を実践的に考察し、現実化しようとしている。

仁井田千絵（アメリカ映画史）

・ 京都南座の顔見世
東京から京都へ引越したことで、コロナ渦による様々な自粛が重なったことで、二年ぶりの舞台観劇となった。歌舞伎座に比べると客席数も少なく小ぶりなせい、二階席の後ろの席でも舞台が近く見えた。感染対策のため、客席からの掛け声がないのは少し戸惑ったが（声が入るはずの間の微妙な沈黙）、慣れればしまと違和感なく観劇できてしまう。長唄や三味線奏者のマスク姿（着物と同じ色のロング・マスクでお洒落）、ロビーですれ違う芸妓さんのマスク姿（紐を耳にかけていないのにちゃんと顔の上にとまってる）にも感銘を受けた。

・ シン・エヴァンゲリオン劇場版

九〇年代のテレビアニメ版に始まり、二〇〇〇年代の劇場版で大ヒットした庵野秀明監督のエヴァンゲリオン・シリーズ。世代的にはドンピシャであるにもかかわらず、不思議と今まで全く見たことがなかった。映画の完結版が公開されたのを機に、アマゾン・プライムとネットフリックスを駆使して過去二十五年間のテレビアニメ版、劇場版を一気に鑑賞（予習としてYouTubeの解説動画もいくつか見た）。突っ込みどころも多かったが、なんだかんだ言って最後にシンジ君が大人になった姿にはホッとした。

・ 吉田南キャンパス

京大に着任してからずっとオンライン授業だったため、キャンパスはものすごく静かだった（パンプスの靴を履いて歩いているとヒールの音が響いて気になるため、履くのをやめてしまったぐらいだ）。対面授業が始まれば騒がしくなるのだろう、逆に静かなのは今のうちだけと思っていたが、いざ秋から対面授業が始まったでも静かなまま。自転車だけが容赦なくキャン

ンパス内を疾走している（轢かれそうで怖い）。コロナ禍でマスクをつけているから静かなのか、それともマスクを外しても静かなのか。いずれにせよ、現在のキャンパスの静けさと落ち着きに感銘を受けた。

菅利恵（ドイツ演劇）

・『戦争と平和』 光文社古典新訳文庫（全六巻）

四月から遠距離通勤になった。体はきついが良いこともあり、読書の時間ができた。読み残していた長編をいくつか読了。なかでもトルストイは、遠距離通勤にびつたり作家だ。毎回電車が楽しみになるくらいに面白く、かといって日常生活に支障をきたすほどではない。『戦争と平和』は、望月哲男訳が出そろったところ。どこか「人間的」な戦場の描写も興味深く、人生を浮かび上がらせる筆致に感銘を受けた。ただ、超えられない壁も。大好きな登場人物の死も、みごとな流れに説得されて泣きながら受け入れたのだが、カナリアのように歌う少女に用意された未来にだけは、「それはない」と思った。

・『刑事コロンボ』 シリーズ

子どもたちが、テレビで某人気探偵アニメを見る。楽しみを邪魔したくはないが、それにしても時々「あまりにも子どもだましだ」と思う。もつと本格的な推理ものを知れば卒業してくれるかな…と、『刑事コロンボ』を借りることにした。私自身、真面目に観るのは初めて。毎回「一線を越えた」人の悪あがきをえんえんと見せられる。そのうちに、コロンボが迷子に道を教える交通整理の人のように思えてきた。線を踏み越えたことに気づかない人に、「あなたはもうあちら側ですよ」と教えてあげる役回り。怖い話なのに引き込まれ、いつの間にかシリーズを制覇。子どもたちも引き込まれて観ていた。「本格的な推理もの」をしっかりと経験したことになるのだが、あいかわらず某人気アニメも喜んで観ている。

・『行く、行った、行ってしまった』 ジェニー・エルペンベック 白水社 二〇二一年

gehen, ging, gegangen—「行く」の現在、過去、過

去分詞を題名とした本書は、ドイツ語の入門書ではなく、ドイツの今を切り取った繊細な小説。動詞の変化を口ずさむのはドイツに流れ着いた難民たちで、無味乾燥な暗唱に未来への祈りが込められている。言葉の知識は明日を押し開くのだ。大学を定年退職したりヒャルトは、ふとしたきっかけで難民の暮らす施設に通い始める。彼の目を通して、難民たちの生きた顔が少しずつ見えてくる。ときにとらえどころなく、ときに驚くほど近い顔。ドイツの難民受け入れ事情を垣間見ることできる、おすすめの一冊。翻訳の浅井晶子さんは、人環の出身だ。

西川完途（動物系統分類学）

・伊藤章治『ジャガイモの世界史』 中公新書

ジャガイモがいかに世界を変えたか、について多角的に論じている本。ペルーのインカ帝国を滅ぼしたピサロは、大量の金を略奪して母国スペインに送ったが、そのために母国でインフレを招いた。しかし同じ頃に持ち帰ったジャガイモは、その後のヨーロッパを救ったと言われる。ジャガイモは寒冷地でも痩せた土地でも育つ野菜で、保存もできて主食にもなるため、ヨーロッパの食糧事情を大幅に改善したのである。さらにジャガイモは土中の地下茎にできるため鳥に食べられることもなかったという。ただし聖書に出ていない作物であるという理由で、ヨーロッパで普及するには、実は時間がかかっている。一九世紀にジャガイモの病気が流行したことで、アイルランドから大量の移民が北米に流れ、そこからアメリカ合衆国の大統領が生まれている。ポテトフライ、コロッケ、はたまたデンブンの原料として、ジャガイモは世界中で欠かせない食材となっており、かつ世界の政治も変えてきた。生物多様性の重要性を再認識する上でもオススメの一冊である。

・キヤロル・キサク・ヨーン『自然を名づける』 NT出版

果たしてサカナという存在は生物学的に定義できるのか？ギリシャの哲学者アリストテレスは、クジラは

サカナではないと見抜いたが、分岐分類学という現代の系統分類学の一派によればクジラはサカナであるか、またはサカナは存在しない、ということになる。なぜかと言うと、サカナという系統的なまとまりはなく、クジラなどの哺乳類、両生類、爬虫類、鳥類などをまとめる脊椎動物亜門のレベルで初めて一つの系統的なまとまり（単系統群という）をなすからである。しかし、これでは人間本来の持つ自然認識から大きなズレを生じてしまう。世界中のどの民族もサカナという存在を無意識で認めてしまうからだ。特に現代人にとって自然との乖離は過去に例を見ないくらい大きくなり、様々な問題を生じている。科学的知識を用いず、目の前の生き物を観察し、色、形、匂い、音を五感で感じ、生物に自分なりの名前をつける、そのことで我々ヒトは動物としての感覚が研ぎ澄まされるのではないか、そのことが現代に必要なことではないかと著者は言う。

・奥野克己『ありがたうもごめんさいもいらぬ森の民と暮らして人類学者が考えたこと』 亜紀書房

プナン族はボルネオ島の先住民族の一つで、筆者のジャングルでの調査でガイドやポーターとして協力して頂いてきた。その縁でプナン族に興味を持ち、本書を手にとった。本書はプナン族の村に滞在して調査を行ってきた文化人類学者のエッセイである。プナン族は独自の文化を持ち、本来は定住しない狩猟採集民族である。家もなければ、農業もしないし、学校も試験もない（現在は定住生活を強いられ、または様々な事情から、過去の本来の生活をするプナンはほとんどいなくなっている）。個人レベルでは失敗に対して全く反省しないし、あやまらないが、集団としては反省するという。まるで野生化した人間である。筆者が彼らとキャンプした際、朝には皆で放屁合戦をするので記憶に残っていたが、それも彼らのコミュニケーションである。新型コロナウィルスの流行で海外調査からいぶ足が遠のき、ボルネオには二年ほど行けていないが、本書を読んでまた彼らに会いたくなくなってきたところである。

池田寛子（アイルランド文学）

・風

早朝、川端丸太町の橋のたもとを自転車で曲がった瞬間、清々しい風を感じた。その風と同じ香りの木にどこか別の場所で会ったことがあるという気がした。後でその木を突きとめて葉っぱを一枚もらおうと心に決めた。なかなか同じ場所に立ち止まる機会は訪れなかったが、やがてほんの短い間自転車を止めることができた。ところがそのあたりの木を一本ずつめぐって見ても、あの香りにたどり着かない。葉っぱに鼻を近づけたりしながらうろろし続けていると、怪しい人に見えるに違いない。後ろ髪をひかれながら帰途に就いた。

風唄う 木々のみどりの息吹を集め
消えた香氣の余韻は今も

・梅シロップ

八百屋の軒先で完熟の梅の実が売られていて、思わず買ってしまった。実家ではいつも梅の木が鈴なりで、父母が梅干しや梅酒づくりに励んでいるが、私に梅仕事の才覚はない。母が梅シロップなるものを作っていたことを思い出し、ほんの少し調べ物をし、これならできそうな気がした。冷凍した梅ときび砂糖を層になるように瓶に詰め、上から蜂蜜を垂らし、お気に入りの米酢をちよっぴり入れてみた。砂糖が溶けるように思い出したときに振ってみる。梅たちはしわしわになっていった。できたのだろうと思っただけなら、シロップに冷たい水を注いで飲んでみた。

これがおどろくほどおいしい。瓶の中の液体を眺め、次の六月までとても待てない、と真剣に思った。時間が早く流れるとすればそれはそれで非常に困るのだが。

それにしても配合も作り方もよく覚えていない。目にしたいくつかのレシピを思いだしながら組み合わせただけだった。二度と同じものは作れない。二〇二一年限定の味わい。

・アロエ

鉢植えのアロエを手に入れた。小さなプラスチック

の鉢に二本のアロエが窮屈そうに植わっている。水をやりすぎではいけない、根が腐ってしまう、とあった。二酸化炭素を吸い取ってくれる、ということだった。なにもなくなってよいらしい。こうしてアロエとの共存が始まる。なんの世話をするわけでもない。飼い主に似て太陽の光を好むということだった。時折いそいそとベランダに出したり、屋内に入れたりする。そして一日の終わりにじっと見つめることもある。不思議なことにアロエはだんだん元気になり、狭い空間にしっかりとくつろぎ、のびのびとしたしぐさを見せるようになった。ついにはコアの部分から一ミリ程度の棘のような芽がでてきた。私は何もしていない。透明感のある黄緑色の芽が一週間に一ミリ程度、ゆるゆると伸びていく。けっして縮まないみどりの蠟燭。凍えるような日々にもめげず、今日もおそらく。

土屋徹（分子生物学者）

・この世界の（さらにいくつもの）片隅に、
二〇一六年十一月に公開された映画、「この世界の片隅に」でカットされたシーンを追加して二〇一九年十二月に公開された映画。「この世界の片隅に」は映画館へ観に行ったのですが、そのときは原作漫画を読んではいなかったためよく理解できないシーンもありました。制作者が作製するはずだった「完全版」とも言える本作に興味を持っていたのですが、公開されたことに気がつかなかったため、いつかは観たいと思っていました。そこで、今回ネタとして本作を観ることにしました。前作では、戦時下の呉を舞台に主人公のすずが生きてゆく日常に焦点をあてた内容になっており、そこが予想外のヒットにつながった理由だと考えられています。それに対して本作では、追加シーンによりすずと遊女のリンとの関係などがきちんと描かれており、別の作品といっても良いような内容に変わっています。映画館で観て五年も経って内容をかなり忘れたことで、とても新鮮に全編を鑑賞することができました。まだ観ていない方には、両方の作品を見比べることをお勧めします。

・コロナ騒動での日常

昨年度から続くコロナ騒動で、どこかに出掛けることもなくなりました。美術館にも行かず、映画館にも行かず、このところ毎春秋に観に行っていた紅葉も今年も断念しました。よく考えてみれば、本来の自分の日常に戻っただけなので、それほど困ることもないのですが、社会全体のことを思うと、もうそろそろこの不自由な状況が終わると良いなど切望しています。この原稿を執筆するために一生懸命ネタを探してみたのですが、これが限界でした。以前購入していたDVDも観る予定でしたが、いくら探しても引越の際に段ボールに詰めたものが見つからず諦めました。ここまですら苦労すると、このネタ探しに苦心する日常を「感銘した」ことにしても良いのではないかと開き直っています。

藤井悠里（惑星科学）

・「凧に溺れる」

この界限で有名な某小説家先生の作品。ネタバラになるので詳細は書かないが、読み終わった後に何度もいろんなページを読み返してしまいました。

・縞模様様の岩

天川村に流れる洞川の川原というよりは川の真ん中に、黒っぽい部分と白っぽい部分が縞々になっている岩があった。この縞は海洋プレートが大陸プレートに沈み込むときにできた説明を受け、衝撃を受けた。まさに沈み込む時にぐちゃっとなつてできた模様が今こうして川のご真ん中にあり、なんなら自分たちがその上を歩くとは思ってもみなかった。その辺の石ころにも歳月を経た歴史があるだろうし、他にも珍しい地形を見る機会に恵まれた一年だったが、意外性なのだろうか、これが強く印象に残っている。

・最近のサークル事情

四月の初回の実験の授業で自己紹介をしてもらった時のこと。一回生が多いので、コロナ禍なのであまり盛り上がりがないかもしれないと思いつつも、何かサークルには入りましただか？と質問したところ、意外

と色々なサークルや部活が挙がった。自分で聞いておいてなんだが、え？もう？早くない？と言ってしまった。たまたま興味があるサークルに巡り会った人が多い班だったのかも知れないが、こんな世の中でも、上回生も新入生もしっかり情報発信・入手し、可能な範囲で活動しているということだろうか。新しい人と交流する機会が中々なくてばやいていたが、見習わなければならぬと思った。

木下千花 (映画学)

① *The Autobiography of Malcolm X, As Told to Alex Haley*, narrated by Laurence Fishburne (Audible版、二〇二〇年)

正確に言うとは昨年度あたりからなのですが、料理したり、掃除したり、コピーしたり、走ったり、歩いたり、バスに乗ったりする間に書物を「聴く」ことが多くなりました。聴くことでカヴァーしているのは、(1) 話題の一般書、(2) 今更読んでいないとは言えないが読む時間も見当たらない超名作、(3) 映画の授業などのために押さえる必要がある「原作」、の三つのカテゴリに分けられます。ものすごい重要なのに英語版で聴いて済ませてしまったカテゴリー(2)のタイトルは、ここでは秘密にしておきますが、このような聴取による時間の最適化(ああ、なんて新自由主義的な発想でしょう)をとりわけ後押ししてくれた名作が、『マルコムX自伝』を名優ローレンス・フィッシュボーンが朗読するこの一作です。

② ジョルジュ・フランジュ『ジュデックス』(一九六三年)

サイレント時代のフランス連続活劇の巨匠ルイ・フィヤードのオリジナル版(一九一六年)は大好きな作品ですが、恥ずかしながら、こちらのリメイクは今年度まで見たことがありませんでした。秘密組織の長ジュデックスが、父を破滅させた銀行家に復讐してゆくお話です。出席者がなぜか鳥の頭を被った仮面舞踏会とか、ピタピタのボディースーツを纏って女賊に化ける家庭教師とか、ほぼ全てのシーンが私のファンタス

ムを完膚なきまでに具現化しており、ストーリーミングで鑑賞している間は笑いとため息の連続でした。フランジュではホラーの金字塔『顔のない眼』(一九六〇年)より実はこちらのほうが好みます。

③ ヴィルジニー・デパント『キングコング・セオリー』相川千尋訳、柏書房、二〇二〇年

作者のデパントは『ペーゼ・モア』(一九九四年)でデビューしたフランスの小説家で、同作の映画化(二〇〇〇年)にあたってはボルノ女優のコラリー・トラン・ティと共同監督しています(映画についてはまた別の機会に)。今年度は、思えば十ヶ月に亘る人事をきっかけにちよとした「フランス回帰」をしましたが、年の瀬にこの本に出会うことができたのは、締め括りとして最高でした。レイプ被害や性労働の当事者たるデパントが、理論とかも読みながら自分の頭で考え抜いて書いた本書は、「女性活躍」は言うに及ばず、「エンパワメント」にも「ケア」にも騙される気がする不良フェミニストにとって、得がたいサバイバルガイドです。

齋藤嘉臣 (外交史)

・ベン・マッキンタイア(小林朋則訳)『キム・フィルビー かくも親密な裏切り』中央公論新社

かつて「ケンブリッジ・ファイブ」と呼ばれたグループの一人でイギリスとソ連の二重スパイ、キム・フィルビーの人生を追った評伝。生い立ちから共産主義に魅せられた大学時代、MI6で活躍しながらKGBの指令を受けて情報活動に従事する戦中〜戦後期、ソ連への亡命を果たす一九六〇年代以降の人生を縦軸に、MI6の同僚で親友でもあったニコラス・エリオットとの関係を横軸に据えて、フィルビーの豪放な魅力が隠し続けた素性と、その秘密がいつか暴露されるのではないかという誰にも共有されない苦悩が丁寧に描かれている。

・Christina Ezrahi, *Swans of the Kremlin: Ballet and Power in Soviet Russia*, University of Pittsburgh Press.

ロシア帝政を象徴するバレエ芸術がソ連で生き残っただけでなく、どのようにして国家的威信を体现するにまでなったのか、本書はマリインスキー・バレエ団とポリシヨイ・バレエ団を中心にソ連の演劇的バレエの発展の様子について教えてくれる。古典作品『白鳥の湖』や『ロミオとジュリエット』等の上演に際して、イデオロギーとの共存を模索した振付師やダンサーらが抱えた苦悩や凝らされた工夫についても面白い。

・映画『ダンサー、セルゲイ・ポルーニン 世界一優雅な野獣』

英国ロイヤル・バレエ団等でプリンシパルとして活躍したウクライナ出身のバレエダンサーの半生を追ったドキュメンタリー映画。「家族」や「孤立」がテーマとなっており、彼自身ディアスポラの存在である。時に物議をかす社会的主張はさておき、副題に示されるようなダイナミックでありながら軽やかでもある踊りは必見。

佐藤博俊 (菌類系統分類学)

① 科学のアルバム キノコの世界 (伊沢正名著)

キノコの生態や食毒について解説した子供向けの書籍です。私が小学生の当時、図書館でこの本を読んだことがきっかけでキノコに興味をもつようになりました。本文は解説もさることながら、伊沢さんの撮ったキノコ写真がどれも美しく、何ともいえない不思議なキノコの魅力を訴えかけており、図書館で何度も何度も本書を読み返しました。当時、私はキノコの知識などほとんどなくて、野外でキノコ観察をした経験もなかったもので、「この本と同じキノコを見てみたい」、「探ってみよう」と強く思うようになりました。それで、父の知り合いでキノコ狩りの経験のある方をお願いしてキノコ狩りに行き、その際にこの本で見たシヤカシメジを実際に採って感動したのを覚えています。当時は遊び感覚だったのですが、今思い返せば、この本を読んだのが菌類の研究を始めたきっかけだったように思います。本書は、改訂を重ねて私が読んだ当時

のものとは少々中身が変わってはいるようですが、子供向けとは言え、大人が読んでも楽しめる一冊です。

② ジョジョの奇妙な冒険（荒木飛呂彦著）

少年ジャンプに連載されていた（現在はウルトラジャンプに連載の）少年漫画です。ズキウウウン（キスの効果音）、メメタア（カエルを叩いた時の効果音）、ズビズバー（イカ墨パスタを食べた時の効果音）やゴゴゴゴゴゴ（背景の効果音）といった効果音や、「お前は今まで食べたパンの枚数を覚えているのか?」、「その圧倒的破壊空間はまさに菌車的砂嵐の小宇宙!」、「HBの鉛筆をベキッ!へし折る事と同じようにッできて当然と思うことですじゃ!」や「激しい喜びはいらない、そのかわり深い絶望もない」「植物の心」のような人生」など数々の独特のセリフで知られる本作の魅力は読んでいただければ、「言葉」ではなく「心」で理解していただけることでしょう。本作は三十年以上連載の続いている長期連載作で、単行本も百巻以上出版されていますが、試験終了チャイム間際まで問題を解いている受験生のような必死こいた気持ちで読んでいただければ一日で読み切ることも可能でしょう。ちなみに、好きなジョジョネタは、「精神的動揺によるキノコの同定ミスは決してない!」と思っただけだこうッ!」です。

③ おかあさんといっしょ（NHK教育テレビ）

世代を問わずおそろく誰でも知っている、乳児・幼児向け番組です。私も子供の時は、その内容まではおぼろげにしか覚えていないのですが、毎日テレビで見ていた記憶があります。娘が生まれたのを機に娘と一緒にこの番組を毎朝見るようになったのですが、大人の視点で見ると、この番組の偉大さを改めて思い知りました。うた、絵、アニメーションや体操など、子ども好きな要素が随所に散りばめられており、子供の食いつきの良さには驚かされるものがありました。本学にある「赤ちゃん研究員」制度に参加した際に、こういった番組はどういう風にすれば子供の興味を引くのかを綿密に計算されているということを知り、奥が深いなと感心しました。ちなみに、類似番組の「いないいないばあ!」についても同様のことが言えるの

ですが、放送時間の関係でたまにしか見ることができないのが残念です。

文字から文明社会を見る

鵜飼 大介

読み書きという基礎的技能

活字離れ、新聞離れ、出版不況などと言われて久しい。「日本人の情報行動調査」に基づく研究によると、日本人が新聞・雑誌・書籍など活字に接する時間は、1995年以降、全ての年齢層で減り続けている（橋元 2017）。他方でパソコンや携帯、スマートフォンなどで電子的な文字に接している時間は、若年層を中心に増加傾向にある。21世紀に入ってインターネットが普及し、ここ10年ほどは若年層を中心にソーシャルメディア上での文字のやりとりが盛んになっている。活字に接する時間は減っても、電子文字を読み書きしている時間は顕著に増えており、若者（10代および20代）の文字の消費量は、「有史以来、最高のレベルにある」とする見方もある（橋元 2017）。日本に限らず、携帯電話やスマートフォンが普及した国々では似たような状況であろう。今や文字を書く行為にしても、筆記用具を使って紙に書くことよりも、キーボードで画面に入力することの方が圧倒的に多い。文字は、電子メディアの著しい発展と普及に促されて、21世紀に入って新たな展開を見せている。

現在の日本の15才以上の識字率——日常生活の簡単な内容についての読み書きができる人の割合——は100%に近い。日本のように識字率が非常に高く、文字情報があふれている国にいと忘れがちなことだが、今でも識字率がそれほど高くない国、低迷している国も多い。開発途上国、とくに開発が遅れている後発開発途上国で識字率が低迷しており、なかでもニジェールやチャド、南スーダンなどアフリカの後発開発途上国の識字率は低い（総務省統計局 2021）。

おおまかにいうと識字率が低迷している地域は、経済発展が遅れていたり、独裁や戦争・紛争などで民主主義が定着していなかったり、教育制度があまり整備されておらず学校が不足していたりする地域である。つまり、近代的な諸制度が十分に普及・定着していない地域である。ただ、それでもここ半世紀の間、世界全体の識字率はゆるやかに上昇し続けていることも付言しておこう。

現代の生活で読み書きができなければ、なにかと不便である。読み書きができなければ、公共サービスが利用しづらかったり、アクセスできる知識や情報が限られたり、職業選択の範囲が狭くなったりと、現代の生活ではさまざまな制約や不利益をこうむらざるをえない。読み書きは、さまざまなサービス、情報、技能にアクセスするための基礎

的な技能になっている。読み書きを身につけることによって可能な行為の選択肢が増え、「本人が選べる生き方の幅」が広がることにつながる。

読み書きの習熟はそれほど容易ではない

人間を他の動物から区別する指標として、言語の使用が挙げられることが多い。もっとも、人間以外の霊長類も言語の使用能力が皆無ではないので厳密な指標ではないが、それでも高度で複雑な言語を使うことは人間の特徴である。人間の脳と言語とは、100万年以上の期間をかけて共に進化してきたのであり、その結果、言語の処理を司る領域が人間の脳にはそなわっている。しかし文字はそうではない。文字は——ごく初歩的な絵文字的記号は除くとして——せいぜい数千年程度の歴史しかない。文字の歴史は浅く、人間の脳には文字を読むための専門領域がそなわっていない。結局、人間は既存の脳の領域（視覚野、39野・40野、ブローカ野など）を複合的に用いて、どうにか読み書きしているにすぎない。文字情報の処理は、いふならば脳に結構な負荷がかかることであり、人間にとって文字は必ずしも使い勝手のよい技術ではなさそうである。

実際、読み書きの習得には時間と労力がかかるものだ。主に学校教育を通して、人は読み書きができるようになっていくが、現在でも学校教育の中心的目標のひとつは、自国語および他国語の読み書きに習熟することである。試験にも自国語および他国語の読み書きの能力をはかるものが多い。文章を速く正確に読んだり、文字や綴りを間違えずに書いたりすることはさほど容易ではなく、そのためには長年の教育と訓練が必要である。アルファベットは字数の多い漢字よりも習得が容易であるという話が今でもあるが、アルファベットは綴りを覚えなくてはならないので、アルファベットであろうと漢字であろうと、読み書きの習得には苦勞するものである。

また、識字率の表面的な調査にはあらわれないが、基礎的な読み書きはできるものの高度な読解ができない人々がかなりいることが、とりわけ1980年以降、先進国内で問題になってきた。高度な読解とは、文字が読めるだけではなく文脈に照らして文意が理解できる、少し複雑な文章が読みこなせるといったことである。今や先進国では文字とは無縁な人、読み書きを学ぶ機会が全くなかった人、つまり完全な非識字者はごくまれである。しかし読み書きの習熟には至っていない人が少なくない。それはたとえば

SNSにおける文章の惨状や、そこで誤読によるトラブルが絶えないことを見ればすぐにわかることであろう。

読むことの習得の困難が顕著にあらわれているのが「読字障害」(dyslexia)である。それは正常な視力を持ち、一つ一つの文字は正しく知覚できるのに、文字で書かれた文章を正確に読めないという障害である(酒井 2002: 188)。読字障害は決して珍しい障害ではなく、欧米では全人口の5%から10%の人に読字障害の可能性があるという。この障害を社会的次元で捉えるならば、社会の急速な識字化に誰もが適応できているわけではないことを示しているだろう。翻って考えれば、今日の社会が読み書きの能力を重視しすぎているのかもしれない。

帝國的な社会と文字

万人が読み書きを習得するのが望ましいと考えられるようになったのは、近代に入ってからである。歴史を振り返ってみれば、そもそも文字をもたない社会も多かった。帝国のように地理的に広大で、階層的な構造をもつ社会においても、文字を使わない場合があった。たとえばインカ帝国は、キープと呼ばれる計数手段はあっても文字はなかったし、初期のモンゴル帝国はあまり文字を使わなかった。反対に、支配の媒体やアイデンティティの拠り所として、文字を十分に活用した帝国もある。漢字を用いた中華帝国や、アラビア文字を用いたイスラームの諸帝国がそうである。

コミュニケーションの範囲が対面的な相識関係を大幅に超えない程度の、小規模な共同体ではもちろんのこと、帝国のような大規模な社会ですら、文字の使用は必然ではなかった。とはいえ、帝國的な社会がしばしば文字を支配の媒体として用いたのも事実である。当初は文字をあまり使っていなかったモンゴル帝国も、勢力の拡大にともなってウイグル文字を採用し、さらにそれに手を加えたモンゴル文字を使うようになっていった。一般的に帝國的な社会のもとでは、文字が使えたのは一部の人々であったし、大部分の人々は文字とは無縁な生活を送っていた。帝国では法が成文法として記されたり、支配を正統化するような神話や歴史が書かれて編纂されたり、文書による行政がなされたりした。

なかでも注目すべき帝國的な文字は漢字である。20世紀の中国ではさまざまな漢字廃止論が唱えられたが、それでも漢字の使用は全く廃れなかった。中国における漢字使用の継続性・根強さは特筆に値するが、その要因のひとつは漢字と集権的権力との結びつきに求められるだろう。漢字の原型とされる甲骨文字は殷の王権のもとで発展したし、秦の始皇帝のもとで漢字の字体や用字法が統一された。その後の科挙にも窺えるように、集権的権力は字体の規範に関与した。20世紀の中国における漢字の簡略化(簡体字化)も、強力な政府の主導により推進された。中華帝国および中国の強大な権力と漢字とは、相互に支え合うような相補的な関係にあったように思われる。

他方、「アルファベット」もまた漢字と同様、紀元前に形成された文字である。古代エジプトのヒエログリフからシナイ文字が生まれたが、シナイ文字をもとにフェニキア文字ができた。フェニキア文字は子音を表記する表音文字である。フェニキア文字は地中海東部でおもに交易を通じて広がり、帝国のような集権的権力の域外でも使われる傾向があった。そして、フェニキア文字からは母音をも表記するギリシア文字が作られ、ギリシア文字からは(イタリア地方のエトルリア文字を介して)ラテン文字が作られた。われわれが「アルファベット」として想像するのは、たいていこのラテン文字である。ラテン文字は、ローマ帝国の拡大とともにヨーロッパ各地(とくに西ヨーロッパ)に広まっていったが、帝国の権力が衰えた後も使われ続けた。アルファベットが、特定の(帝国のような)集権的権力と必ずしも強固に結びついていなかったことは、中華帝国と漢字との緊密な結びつきとは対照的であるように思われる。

印刷技術についても手短かに触れておこう。文字(で書かれた書物)は、印刷技術によって大量に生産され拡散されることが可能になったが、ユーラシアの東西(東アジアとヨーロッパ)で、印刷技術と権力との結びつき方が異なったのである。東アジアにおける木版印刷術は、少なくとも当初は集権的権力の周囲で用いられるにとどまった。それに対して、15世紀ヨーロッパでグーテンベルクが発明した活版印刷術は、発明の当初から特定の権力によって独占的に用いられたのではない。活版印刷術による出版は、さまざまな宗教的・政治的権力と関わりながらも、営利追求活動を展開したのだった。活版印刷術はその発端から、初期の資本主義的な活動のなかで用いられ、聖書をはじめさまざまな書物が広く普及するとともに、ヨーロッパ各地で出版市場を形成していった。

宗教と文字

宗教はしばしば文字で記された聖なるテキスト(聖典)を信仰の拠り所とするので、文字は宗教とも密接な関係を結んできた。もっとも顕著なのは、アラビア文字とイスラーム教との関係であろう。言うまでもなく、アラビア文字は聖典クルアーンを記す文字である。アラビア文字は、フェニキア文字・アラム文字の系統に属するが、イスラーム教が誕生した7世紀頃に整えられた文字である。イスラーム教は軍事的征服をとめないながら広がり、同時にアラビア文字も広まっていった。イスラーム教が広まらなければ、アラビア文字もさして広まらなかったであろう。

イスラーム教ではクルアーンの翻訳には否定的・消極的であり、「翻訳された」クルアーンはせいぜいクルアーンの註釈にすぎないとされる。イスラーム教は、アラビア語とアラビア文字に密着した宗教であり、それ以外の言語や文字で聖典を読むことは重要性の点で劣ることとみなされる。特定の文字と宗教との密着という点では、たとえばキリスト教や仏教よりも、イスラーム教において目立ってい

る。アラビア文字の利用者は今も非常に多いが、この文字はクルアーンや宗教生活から完全に切り離されるものではなく、究極的にはイスラームという宗教共同体（ウンマ）を中心としている文字といえよう。また、アラビア文字は子音表記を中心とする文字であり、母音が必ずしも明示されないことは、子音も母音も等しく表記するアルファベットに比べて、あえて言えばこの文字がいささか閉鎖的な性格をとどめていることを示している。

D・ディリンジャーは、「アルファベットは宗教の後を追う (Alphabet follows religion)」と述べたが、アルファベットに限らず、文字は宗教の伝播に伴うものであった。ブラフミー文字を祖とするインド系の文字は東南アジアへと伝わり、それをもとにビルマ文字、クメール文字、タイ文字、ラオ文字（ラオス文字）などが作られた。東南アジアは——中華帝国と漢字・漢文の影響が強かったベトナムを除いて——いわば「梵字世界」を形成することになった。こうしたインド系の文字の東南アジアへの伝播は、東南アジアへの仏教（上座部仏教）の伝来と無関係ではないと考えられる。ただ、仏教誕生の地のインドでは、仏教徒は少数派にとどまる一方で、さまざまなインド系文字が使われていることからわかるように、仏教とインド系文字との結びつきは強固なものではない。

ところで、パキスタンで話されているウルドゥー語と、インドで話されているヒンディー語とはよく似ている。だがイスラーム教が主流のパキスタンではアラビア系文字が使われており、ヒンドゥー教が主流のインドではインド系文字が使われている。つまり話されている言葉はほとんど同じなのに、宗教も文字も異なるのである。

東欧を見れば、セルビアとクロアチアではほとんど同じ言語が話されているのに、正教会が強かったセルビアではキリル文字、カトリックが主流のクロアチアではラテン文字が使われている。F・クルマスは「文字使用の境界線は、信仰の境界線と概ね一致している」(Coulmas 2003=2014: 230) と述べたが、そのような一面はたしかにあるのだろう。東方正教が信仰の主流であるブルガリアではキリル文字が、カトリックが主に信仰されていたポーランドやチェコではラテン文字が使われている。世俗化が進んだ現代においても、使われている文字には宗教的な歴史や背景が絡んでいる。

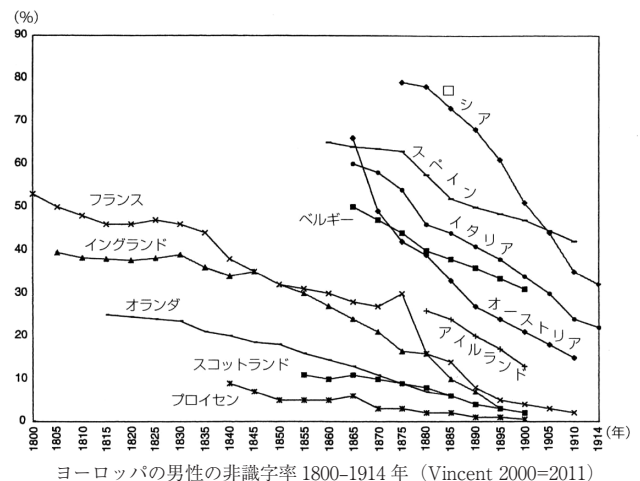
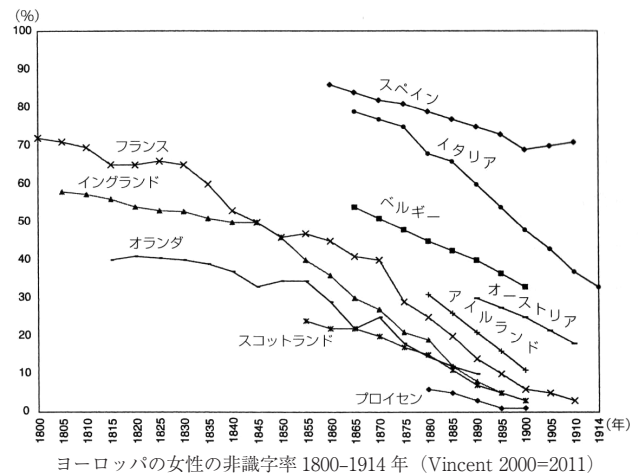
近代世界における識字化とラテン文字化

文字は各国語の形成にも大きく寄与した。ダンテが北イタリアで『俗語論 (De Vulgari Eloquentia)』を記したのは14世紀初頭だが、それ以降、文字による表記を獲得したさまざまな俗語が地位を高めていった。俗語とはヨーロッパにおいては、ラテン語——ヨーロッパにおけるいわば帝國的な言語——との対比で「俗なる言語」ということである。俗語が文字によって書かれ、それが印刷されて広まり、俗語の統語的な規範を示す文法書が記されるように

なるなどして、その俗語は国家語の下地となっていった。文字がなければ各国語（国家語）の形成はおよそ不可能であったはずだ。

さて、読み書き能力が万人に求められるようになるのは、近代化という社会変動の趨勢においてである。宗教改革のなかで誰もが聖書を自ら読むべきであるという考え方が生まれたが、実際に数多の人々が読む能力を身につけていったのは、宗教改革からずいぶん後のことである。ヨーロッパの国々で識字率が著しく上昇したのは19世紀である (Vincent 2000=2011)。つまり産業化が進行し、ナショナリズムが勃興し、国民国家という制度が定着していく時期である。それぞれの国内の共通語としての国家語の教育、新聞や書物等の普及などを通じて識字率は上昇していった。読み書き能力を前提とするような労働、肉体的ではなくいわず意味的な労働もしだいに増加した。

「大航海時代」を皮切りに、ヨーロッパ（とくに西欧）が世界各地に進出していったことはよく知られている。西欧のさまざまな制度文物とともに、ラテン文字も世界各地に進出していった。北米や南米ではラテン文字が広まった。ベトナムでは、17世紀頃からカトリックの宣教師たちがラテン文字を一部改変してベトナム語を表記したが、それが後にクオックゲーとなった。インドネシア、マレーシア、フィリピンなど東南アジアの島嶼部の国々でも、現在では



ラテン文字が使われている。トルコでは1928年にムスタファ・ケマルが、アラビア文字を廃止してラテン文字を採用した。かつてイギリスの植民地であったオーストラリアもラテン文字を用いている。今でもアラビア文字、インド系文字、キリル文字が広く使われているのは見逃せない事実であるが、近現代世界でラテン文字（アルファベット）はグローバル化し、世界標準化したとさえ言えるだろう。

そのような状況下で今でも漢字を主要な文字として使い続けているのは、中国と台湾と日本だけである。かつて「漢字文化圏」に属していた朝鮮や韓国やベトナムでは、漢字の使用をほぼ廃止した。漢字の「本場」である中国が漢字を使い続けていることはともかく、日本ではひらがなとカタカナという独自の文字がありながら、漢字が使われ続けている。日本語の文章は漢字かな交じり文で綴られる。それどころかアルファベットが交じっても許容されるように、日本における文字使用は混成的である。

そして、いささか誇張されてきたきらいがあるとはいえ、日本の識字率は（おそらく近代以前から）比較的高かった。中国では、中華人民共和国が建国された時、読み書きがほとんどできない人が全人口の8割以上もいた（阿辻1999:7）。同時期の日本では、非識字者はわずか2.1%であった（1948年「日本人の読み書き能力調査」）。これらの数値に疑問の余地があるとしても、両国の識字率の差が歴然としていたことはわかる。漢字・漢文を使いこなすことは、長らくエリートやサブ・エリートの所作であったが、日本におけるかなの使用には、それをいささかはみ出していく部分があったのかもしれない。今後の課題は多いものの、文

字は文明社会の変容や多様性を見ていく鍵になる。

参考文献

- 阿辻哲次, 1999, 「21世紀の漢字文化圏を考える」 蘇培成・尹斌庸編, 阿辻哲次・清水政明・李長波編訳, 1999, 『中国の漢字問題』大修館書店, 1-34.
- Coulmas, Florian, 2003, *Writing Systems: An Introduction to Their Linguistic Analysis*, Cambridge: Cambridge University Press. (斎藤伸治訳, 2014, 『文字の言語学——現代文字論入門』大修館書店.)
- Diringer, David, 1948, *The Alphabet: A Key to the History of Mankind*, New York: Philosophical Library.
- 橋元良明, 2017, 「文字の消費時間の推移と文字消費に関するタイポロジー ——「日本人の情報行動調査」から」『社会言語科学』20 (1), 5-15.
- 酒井邦嘉, 2002, 『言語の脳科学』中公新書.
- 総務省統計局, 2021, 「世界の統計2021」(2021年10月30日取得, <https://www.stat.go.jp/data/sekai/pdf/2021al.pdf#page=261>)
- 鈴木董, 2020, 『文字世界で読む文明論——比較人類史七つの視点』講談社現代新書.
- Vincent, David, 2000, *The Rise of Mass Literacy: Reading and Writing in Modern Europe*, Cambridge: Polity Press. (岩下誠・相澤真一・北田佳子・渡邊福太郎訳, 2011, 『マス・リテラシーの時代——近代ヨーロッパにおける読み書きの普及と教育』新曜社.)

大航海時代は文明史上どのような意味を持つのか

合田 昌史

1. 大航海時代とはなにか。

タイトルに掲げた問いに答える前に、「大航海時代」の定義にふれる必要があるでしょう。南蛮・紅毛が活躍したこの時代の呼称は日本発です。欧米では「(地理的) 発見の時代」と呼ばれていたのですが、1960年代前半、「発見」という言葉にこめられたユーロセントリズムを克服するために導入されました。その契機となったのは、西欧人による非西洋世界への航海記等の日本語訳シリーズ『大航海時代叢書』(岩波書店)の編纂・刊行でした。今日、この呼称は多くの書籍論文のなかで用いられるばかりか、オンライン化されたシミュレーションゲームのタイトルにも採用されており、我が国のみならず韓国でも定着しました。

ただ、「大航海時代」には内陸部の踏査検分が含まれないこと、そして初期の「地理的発見」においては「大航海」と呼べない航海がほとんどであったことから、近年、欧米では「海上拡大の時代」を意味する用語がよく使われています。

「大航海」をかりに「陸標を見ない、途中で上陸補給をしない、ひとつながりの外洋航海」とするならば、大航海時代はコロンブスの登場する15世紀末からですが、私を含む多くの研究者は、「海上拡大の時代」は15世紀初頭から始まった、と考えています。大航海時代のおわりについては確たる定説はありません。『大航海時代叢書』では17世紀半ばとされていますが、「海上拡大の時代」は18世紀まで続くとする説もあります。ここでは、1415年から1480年頃までのポルトガル人が先行する時期を海上拡大の時代初期、1480年頃から16世紀末までのスペインがポルトガルと競合した時期を海上拡大の時代中期、16世紀末以降のオランダ・イギリスが台頭した時期を海上拡大の時代後期とします。

2. 「グローバル化の第一波」

さて、冒頭の問いにもどりましょう。ごくありふれた答え方としてあげられるのは、大航海時代は「グローバル化の第一波」であったというものでしょう。アメリカの「発見」、海路によるアジア・アフリカ・アメリカの連結、アメリカ・日本銀の流通による世界経済の一体化は、近代世界の黎明をつげる現象と見なされてきました。20世紀末からのグローバル化を第三波、19世紀末のイギリスを中心としたグローバル化を第二波とする見方を前提としてい

ますが、第一波に関しては、モンゴル帝国が覇権を握った13世紀に遡るとする説や、中国からインド・アラビア半島・東アフリカまで海上交易でつながり、ノルマン人が北米に到達した西暦1000年頃に起こったとする説さえ提示されています。

3. 「コロンブスの交換」

新型コロナ禍のなかで思い起こされるのは、アメリカの歴史家アルフレッド・クロスビーの『コロンブスの交換』(1972)です。クロスビーによると、大航海時代、新旧両世界間で人・動物・植物・鉄器・火器・病原菌の大交流がおこり、旧世界から伝来した天然痘・チフスなどの疫病により免疫のないアメリカ先住民人口の壊滅的減少という空前の悲劇を招きました。スペインによるアステカやインカの征服が成功したのは、主として病原菌のせいだとされます。他方で、アメリカ原産のトウモロコシやジャガイモな



1538年メキシコの天然痘流行『テレリアノ・レメンシス絵文書(1560年代前半)』より

どのおかげで19世紀の世界的人口爆発が可能となった、といえます。

クロスビーのいわば生態学的・環境史的な視点は、文明史家ウィリアム・マクニール(1976)、生理学者ジャレド・ダイヤモンド(1997)、ジャーナリストのチャールズ・マン(2011)らによって引き継がれています。ただし、これはアカデミズムにおいて傍流扱いをされてきました。『コロンブスの交換』には邦訳がありません。主流とみなされてきたのはマクロな経済史的な視点にたつ学説です。

4. 「近代世界システム」

アメリカの社会学者イマニュエル・ウォーラーステインの『近代世界システム I』(1974)は、大航海時代の位置づけに関して通説を担ってきました。ウォーラーステインによると、ヨーロッパは「中世末の危機」を解決するために地理的に拡大したのであり、この対外進出が成功し、ヨーロッパ世界経済が成立した。この世界経済は中核・辺境・半辺境の三層からなり、互いに補完的な分業体制をなす。自由な労働力による西欧諸国が中核となり、辺境の東欧(再販農奴制)とスペイン領アメリカ(エンコミエンダ)、半辺境の地中海地域(分益小作制)から余剰を吸い上げる。やがて西欧諸国間で競争が激化し、一六四〇年頃までにイギリスとオランダが中核に登りつめた、と。

川北稔氏による邦訳出版の頃、大航海時代史研究を志しはじめた私にとって、南北問題が構造化された現代世界の起源は500年前の大航海時代にある、という考え方は新鮮でした。当時、産業革命以前の西洋史に研究の意義を認めない一部の歴史家たちに対して、前近代史の研究者らが有効な反論を用意できていないように見えていたのです。ウォーラーステイン説は細部の実証性や西洋中心史観が問題視され、様々な批判を被りましたが、フェルナン・ブローデル流の長期的なパースペクティブのなかで事象をとらえる視点は、現在でも魅力を失わず、引用され続けています。

5. 「長篠合戦の世界史」

1980年代後半以降、大航海時代のとらえ方にあらたな視点をもたらしたのは、軍事史研究の進展でした。かつて日本の西洋史研究の現場では、地政学的な視点を持つ研究や軍事面に焦点をあてる研究をタブー視する傾向がありましたが、マイケル・ロバーツが提唱しジェフリー・パーカーによって流布された「軍事革命」論は、それを打破するインパクトを斯界に与えました。パーカーの『軍事革命と西洋の勃興 1500-1800年』(1988)は、邦訳『長篠合戦の世界史』(1995)の出版で我が国でも評判となりました。

軍事革命とは、16世紀のヨーロッパで生じた軍事技術上の革新、とくに火器による包囲戦とそれに対抗するイタリア式築城術による城郭(低く分厚い城壁で守られ、城壁に張り付く敵に十字砲火を浴びせられる稜堡を備えた星形

要塞)の普及、軍隊の規模の飛躍的拡大、その政治的社会的影響を総合的に説明する概念で、ヨーロッパのみならずアジアやアフリカにおける新たな政治秩序の形成を促したとする点で様々な議論を呼びました。

大航海時代の文脈において重要なのは、帆船に舷側砲が搭載され艦砲斉射が可能となったことでしょう。強化された海軍力は、戦略上交渉上の要地におかれた商館=要塞とリンクすることで、非ヨーロッパ世界における優位性をヨーロッパ、とくにポルトガルやオランダに与えた、と考えられています。

6. 「財政=軍事国家」論

しかし、イタリア式築城術による城郭にせよ、大砲を満載した軍船にせよ、調達には莫大な費用が必要で、財政に大きな負担がかかります。1989年に歴史家ジョン・ブリュアが提唱した「財政=軍事国家」論によると、イギリスは対外進出でポルトガル・スペイン・オランダの後塵を拝していたが、大国フランスとの「第2次百年戦争」を勝ち抜き、ヨーロッパ内外で覇権を確立することに成功した。その要因は、国債の増発・ロンドン証券市場の成立・効率的な徴税機構によって、膨大な軍事費をまかなえたことにある。戦勝は経済活動をさらに発展させ国債の信用を向上させるという好循環を生んだ、というのです。「財政=軍事国家」論は勝ち組の変遷を説明するうえで有効であり、「軍



船首に砲門が開かれた帆船 15世紀写本挿絵より
フランス国立図書館 Ms fr 2829 f.32v

事革命」論を吸収するかののような勢いがあります。とはいえ、主要な論点は17世紀末～19世紀初頭に及んでおり、大航海時代の位置づけに直接寄与するとは言えません。

7. 「宇宙大航海時代」

近年、私は経済史的あるいは財政史的な視点に立つ大航海時代のとらえ方には限界があると考えてようになりました。2018～2021年、私はJAXA（宇宙航空研究開発機構）の会議に招聘され、その考えを確認する機会を得ました。宇宙開発と歴史学は縁遠いように思えますが、JAXAは「宇宙大航海時代」という概念をもうけ、初期段階にある現代の宇宙開発が大航海時代となんらかの類似性があるかどうか、あるいは大航海時代の事象から学ぶべきことがあるかどうかについて、歴史家と語り合おうと考えたのです。招聘された歴史家は、キリシタン史の浅見雅一氏、川村信三氏、スペイン中近世史の関哲行氏、ポルトガル近世史の私の4名です。

私は当初、理系のエリートたちとの対話はかみ合わないのではないかと危惧していましたが、何度か会議を重ねるうちに、現代の宇宙開発と大航海時代の間いくつか類似点があることが確認できました。ひとつは国家事業と私的事業が並立しているという点です。周知のように、宇宙開発は第二次大戦後、アメリカとソ連による国家の威信をかけた事業として加率的に展開されましたが、冷戦終結後は民営化への流れが生まれ、近年「スペースX」社などのベンチャー企業が次々と立ち上げられています。中世末のポルトガルは、国家の命運をかけたモロッコのセウタ（現スペイン領）への遠征で大航海時代を先駆けしましたが、大西洋沿岸への航海事業では「民活」に依存していました。後続のスペインでも、コロンブスの航海は国家事業でしたが、コルテスやピサロらコンキスタドーレスたちはいわば手弁当で一族郎党を率いて海を渡りました。

もうひとつの類似点は動機付けに関わります。大航海も宇宙飛行も危険な事業です。宇宙飛行士の死亡率は約5%だそうです。16世紀の喜望峰航路によるヨーロッパ・インド間の航海の難破率は約8%でした。船が沈まなくても壊血病で命を落とす航海者も珍しくありませんでした。何のために命をかけた冒険にのりだすのか。いずれの場合も大赤字覚悟の国家事業はともかく、私的事業体あるいは国家事業に参画する私人としては、一攫千金の経済的動機付けがありそうに見えます。

しかし、一部の宇宙ビジネスに収益が見込めるようになったのは、つい10年ほど前からです。大航海時代の経済的動機付けは、アジアの物産（香料・生糸・磁器）や金銀への欲求などいろいろと挙げられています。もちろん、軽視はできませんが、過度に評価するべきではないでしょう。実際、ポルトガルの対外進出は、奴隷貿易など一部の私的事業で利益があがるまでにおよそ30年、金・香料貿易などで国家の財政を潤すほどとなるまでに、そこからさ

らに30年以上の歳月を要しました。このようなタイムラグは大航海時代初期において経済外的要因が強く働いていたことを示唆しています。

では、大航海時代の経済外的要因とは具体的にどのようなものだったのでしょうか。

8. 「ステイタス」を求めて

ヨーロッパの一部の国々には今も身分社会が残っており、貴族と王室も維持されていますが、かつてのような影響力はありません。大航海時代においては、身分の壁は厚く高く、乗り越えがたいものでしたが、同じ貴族層といっても爵位を持つ高位貴族と下級貴族の差異は明白でした。身分の壁あるいは身分内の差異を克服すること、すなわちステイタス向上への欲求が大航海時代における経済外的要因のひとつです。以下、大航海時代を代表する航海者、マゼランの事例をとりあげます。

ポルトガルの下級貴族マゼラン（フェルナン・デ・マガリャンイス）は1480年頃、北部内陸部のポンテ・ダ・バルカあるいはポルトガル第二の都市ポルトの出身で、10代のある時期に国王ジョアン2世の妃レオノールの宮廷に入り、小姓として奉職しながら養育を受けました。のちに次の国王マヌエル1世のもとで1505～12年頃、インド・東アフリカ・東南アジアの沿岸各地で軍人として転戦しましたが、帰国後、奉職の対価である廷臣手当の増額や年金の下賜がなされた形跡はありません。このころの一部下級



サンティアゴ騎士修道会の徽章を身につけたマゼラン
（マドリッド海事博物館）

貴族は国王に抱え込まれる存在となっており、月給の廷臣手当や年金の額は経済的な意味合いばかりでなく、ステータスの指標ともなっていました。17世紀の歴史家マヌエル・デ・ファリア・イ・ソウザは「5レアルの加増は多大なる等級の加増に等しい」と述べています。

1513年8月、マゼランは弟ディオゴとともに武器・軍馬を自弁して今度はモロッコのアザモール遠征に参画しました。戦いのなかで膝に傷を負い馬を失ったマゼランは廷臣手当の加増百レアル（現給の8%に相当）を国王に要求しましたが、マゼランを嫌っていたマヌエルはこれを退けました。その後もマゼランは廷臣手当の加増を求め、やはり拒否されたため、忠誠替えの許可をえて王宮を去りました。

マゼランが隣国のセビーリャに姿を現したのは1517年10月、同年末頃までにセビーリャ在住のポルトガル人ディオゴ・バルボザの娘ベアトリスと結婚しました。バルボザはポルトガル随一の大貴族ブラガンサ家の庇護下にあり、マゼランの受け入れ役を担った人物です。セビーリャ王宮と造船所の長官代理および市参事会員という要職にあり、サンティアゴ騎士修道会の受領騎士でした。受領騎士は騎士より上位で騎士修道会の地所を受領されました。

騎士修道会の所領はイベリア半島南部に集中していたため、北部出身のマゼランは母国で騎士修道会と縁が無かったのですが、スペインに移った後、権威最上のサンティアゴ騎士修道会の一員となり、まもなく同会の受領騎士に昇格しました。同会受領騎士であった義父バルボザとの関係も影響しているでしょうが、それ以上に重要なのは、西回りアジア航路「発見」を託された艦隊の総司令に相応しい格付けとしての意味です。総司令は渡来先でスペイン王の代理として現地権力と交渉する権限が与えられていました。マゼラン隊の航跡を辿った遠征隊の総司令ガルシア・ホフレ・デ・ロアイサもホスピタル騎士修道会の受領騎士でした。

新大陸進出の牽引者たちの間にも騎士修道会員の姿があります。コロンブスの後を継いで第二代インディアス総督となるフランシスコ・フェルナンデス・デ・ボバディージャはカラトラバ騎士修道会の受領騎士、その後継総督ニコラス・デ・オバンドも、アルカンタラ騎士修道会の受領騎士でした。ポルトガルでも同様に、ヴァスコ・ダ・ガマは最初のインド遠征隊総司令に任命される前にサンティアゴ騎士修道会（スペインと同名ながら別組織）の受領騎士に昇格されていました。ガマ以降のインド遠征隊と海外領諸拠点の要職は騎士修道会員によって占められていました。十字軍時代の遺物とも言うべき騎士修道会が海上拡大の器として機能していたという事実は、大航海時代に中世的心性が残存していたことを示唆しています。

9. 「世界分割」と「世界布教」

海上拡大にいかなる動機付けがあったにせよ、それが拡大の対象とされた側の権利を侵すことになることは明白でした。海上拡大初期ポルトガルの年代記家アズララは、西アフリカで奴隷狩り・奴隷貿易の対象となった人々に同情の言葉を述べながらも、キリスト教への強制改宗によって彼らの魂が救済されることを強調しました。海上拡大には正当化の論理が求められたのです。1452～56年、教皇庁はアフリカ西岸からインドに至るまでの地域を征服予定領域としてポルトガル王に「贈与」しました。その対価は布教活動への支援で、これがいわゆる「(海外) 布教保護権」の原型となりました。

スペイン王のためにコロンブスがカリブ海域に達する航海に成功すると、1493年今度はスペインに同様の「贈与」がなされ、大西洋上に引かれた分界線の西側がスペインの征服予定領域とされました。これに抗議したポルトガルとの間で翌年トルデシーリャ条約が結ばれ、分界線が西へ移動したことはよく知られています。しかし、二国間条約に第三国をしぼる効力はありません。この条約が意味するところは、両国に与えられた「贈与」の教皇勅書の国際法的権威を認め合ったうえでの微調整です。

両王権に与えられた教皇勅書は、非キリスト教世界の支配権が神からキリスト・ペテロを経て歴代教皇に伝わったとする「教皇権至上主義」に立脚していました。13世紀のホステイエンシスに代表されるこの立場は、中世末の知識人らの間で少数派となっていたのですが、教会大分裂や公会議主義の台頭に直面し、オスマン帝国の圧力に危機感を募らせた教皇らはこの立場に回帰しました。

「世界分割」と「世界布教」の理念は表裏一体となって地球の反対側に及びました。16世紀末～17世紀初頭、ポルトガル王の支援を受けたイエズス会士とスペイン王の支援を受けた托鉢修道会士は分界と布教保護権を念頭に日本布教を争うこととなりました。一部の研究者らは、このような海上拡大の有り様が近世日本の国家意識を変革させたとする「イベリア・インパクト」論を展開しています。

私は四国の地方都市に生まれました。幼少時、西洋コンプレックスの強かった両親は私をカトリック系の幼稚園に入れました。マイクロバスで連れられた幼稚園の敷地には聖母子像をいだく教会堂があり、そこにはスペイン人神父が勤務していました。日曜日、園児たちは神父から英語を教わりました。これが私と西洋との遭遇でした。人口たかだか4万人の町にこのような施設を黒字で維持することは難しいでしょうが、今もこの幼稚園は存続しています。「世界分割」の夢は消えても、「世界布教」の理念は生きているのでしょうか。

グローバルゼーション時代の芸術作品

武田 宙也

芸術は、それが生存の必要とかかわりなくなされる営みであるという点において、人間を動物から画する、いわば人間性のかきであるとしばしばみなされる。また、先史時代にさかんにつくられた壁画や彫像、さらにはボディペインティングや多彩な装飾品などを思い浮かべてみればわかるように、それは人類の歴史のかなり初期の段階から行われていたことが推察される活動でもある。先史時代の人類の営みを「文明」の範疇に含めるべきか否かは議論の余地があるかもしれないが、ともあれ芸術の歴史は文明（的なもの）の歴史とおおよそ同程度に古いものであって、その意味においてそれは文明史の一翼を担い続けてきた、ということではできそうである。とはいえ、ここで文明の歴史を芸術の観点から総ざらいすることは小論の手に余る。代わりに本稿では、近年の芸術論のいくつかのキーワードを切り口として、芸術と文明の関係についてささやかな考察を行ってみたい。

グローバルゼーション

いうまでもなく、芸術はそれが生まれ育った場所や地域と深いかわりをもつ。たとえばエジプト美術やギリシア美術、あるいはフランス美術や日本美術といったように、国名を冠した美術の呼び名がわたしたちにとって一定のなじみ深さをもつのはこのためである。各国の美術は必然的に、その国の社会や文化のありよう、つまり文明を反映したのものとなる。ただし、芸術に限らずあらゆる文化についていえることだが、一般にある国や地域に独自のものとされる文化は、しかしじつは必ずしもその領域の内部だけで自閉的に発展してきたわけではなく、つねに領域外との接触にさらされ、ときにそこから予期しない変化を被るかたちで形成されてきたものがほとんどである。こうした文化の相互交流、相互触発は、交通・輸送手段がある程度発達し交易がさかんになった16世紀以降、世界規模での展開を見せるようになった。それは、以前なら相互に影響を及ぼしあうことが稀であった、遠く隔たった国や地域同士が緊密なかかわりをもつようになった時代であり、政治・経

済から文化にまでいたるそれら影響の結果が世界規模で、しかも比較的短期間で顕著になるようになった時代である。現代的な表現を用いるならば、それは「グローバルゼーション」の段階に入った時代といえることができるかもしれない。

一般にグローバルゼーションといえば、1970年代から80年代にかけて、人やモノの流動性が世界規模でいよいよ高まった時代に対して使われることが多い。それに対してマンフレッド・B・スティーガーは、この「世界化」過程の起源が必ずしもそこまで新しいものではなく、場合によってはもっとずっと古い時代にまでさかのぼれるかもしれない、と示唆している。実際、スティーガーのように、この言葉を「世界時間と世界空間を横断した社会関係および意識の拡大・強化」¹とみなすならば、先に見たような理由で、その画期を16世紀以降の初期近代に見ることにそれほど無理はなさそうに思われるし、歴史家のヴァレリー・ハンセンのように、その起源を大航海時代よりさらに前の西暦1000年頃に推定する論者もいる²。いずれにせよ、このようにある程度広い意味でグローバルゼーションという言葉を用いるならば、つまり文明史のある時期から顕在化してきた「世界の圧縮」現象を指してこの語を用いるならば、それは世界規模の文化混交のなかで醸成されてきた各地の芸術——便宜上国名を冠した名で呼ばれてきたそれぞれについて考えなおす上でも示唆に富むものとなる。

根をめぐって

キュレーターのニコラ・プリオーは、2009年に発表した『ラディカント——グローバルゼーションの美学に向けて』のなかで、まさにグローバルゼーションの時代における芸術の可能性について論じている³。ここでプリオーは、モダニズム芸術の特徴である「ラディカル」な前衛性を、ラディカルという語の語源（「根を張る」）を参照しつつ、根に固執するような存在様態——つまり起源や純粋性へと執拗に回帰しようとする姿勢——と結びつけたうえで、グローバルゼーションの時代によりふさわしい芸術のあり方として「ラディカント」な存在様態をこれに対置する。プ

1 マンフレッド・B・スティーガー 『グローバルゼーション』 櫻井公人・櫻井純理・高嶋正晴訳、2010年、20頁。

2 ヴァレリー・ハンセン 『西暦一〇〇〇年 グローバリゼーションの誕生』 赤根洋子訳、文藝春秋、2021年。

3 Nicolas Bourriaud, *Radicant : Pour une esthétique de la globalisation*, Denoël, 2009 [ニコラ・プリオー 『ラディカント——グローバルゼーションの美学に向けて』 武田宙也訳、フィルムアート社、2022年]。

リオーによれば、ラディカントとは、地面にしっかりと根を張って直立する樹木と異なる、近接する表面に沿って展開するつる植物のような存在様態をあらわすものである。根によって特定の場所に固定される樹木と異なり、あらゆる方向に広がり、生長にあわせて自在に根を張りなおすことができるつる植物には、「移民、亡命者、観光客、都市の放浪者」といった現代的な移動民のありようと通じるものがあるという。

ラディカントはそれを受け入れる地面に応じて発育し、その渦巻きにしたがい、地質の構成要素や表面に適応する。それはみづからが動きまわる空間の用語に翻訳されるのだ⁴。

こうして、グローバリゼーションの時代にふさわしい存在様態は、唯一のアイデンティティ（根）にしばられるものではなく、たえず移動のなかで、その都度動きまわる空間にあわせてアイデンティティを「翻訳」したり、あるいは移動のさなかに出会う異他的な要素によってそれを交雑化したりするものとなる。ブリオーはさらに、この地球規模でたえず翻訳や交雑化が継起する現代社会を「グローバルなクレオール化」⁵という表現で特徴づけている。クレオールとはもともとカリブ海の植民地生まれの者を指す言葉だが、言語学では、共有する言語を持たない集団同士がコミュニケーションの必要から生み出した簡略的な言語（ピジン語）が母語として定着したものをクレオール語と呼ぶ⁶。この文脈においてクレオール化とは、一種の言語的な交雑化のことを指すが、たとえばカリブ海フランス領マルティニーク出身の作家エドゥアール・グリッサンは、この概念を文化一般にまで拡張適用して、「いつの時代にも、随所に、クレオール化の場（文化的混合）が保持されてきた」⁷と述べる。

クレオール化は複数の文化、あるいは、少なくとも複数の異なった文化の要素を世界のある場所で接触させ、合力の結果として、単なるそれらの要素の総和ないしは総合からはまったく予測できなかったような、新しい与件を産出することである⁸。

ブリオーが「グローバルなクレオール化」というときのクレオール化も、この拡張された意味でのクレオール化、つまり文化的な異種混交を意味するが、それはグローバリゼーションに関してしばしば指摘されるもうひとつの、いわば負の側面たる文化の標準化——往々にしてグローバルな資本の論理に駆動されたそれ——に対する抵抗手段の役割を果たすだろう。こうしてブリオーは、グローバリゼーションの時代における芸術の可能性をそのクレオール性に見いだすことになる。

クレオール化と暴力

グローバリゼーションを、基本的に冷戦終結後の世界で顕在化してきた現代的な現象と捉えていたブリオー対して、ナイジェリア出身のキュレーター、オクウィ・エンヴェゾーは、現在のグローバリゼーションが、15世紀半ばからの西欧諸国や初期の多国籍企業（オランダ東インド会社やイギリス東インド会社）の領土拡張政策に始まる歴史的過程にはっきりと根ざしていることを指摘する⁹。彼によれば、コロンブスのアメリカ到達はこの政策の本格的な開始を告げるものであり、それは遠く離れた世界同士をつなぐだけでなく、そのつながりを利用して経済のグローバルな流動性や影響力を高めることになったという。これ以降、西欧が繁栄にむかうのと反比例するかのよう、アフリカ、アジア、アメリカといった地域は衰退の時代へと入ってゆく。こうして植民地主義は、西欧の発展のために非西欧地域を犠牲にすることになったものの、他方でこれ以降加速するようになったグローバルな人とモノの移動は、まったく新しい民族、コミュニティ、文化といったものを生み出しもした。この時代のグローバリゼーションは、社会、文化的表現、人種的アイデンティティといったものの複雑な混合をもたらすことになったのである¹⁰。エンヴェゾーは、この初期近代のグローバリゼーションの結果生じた文化的混交を、やはりクレオール化という言葉によって説明している。「クレオール社会は、奴隷制度と植民地主義の制度にまでさかのぼるものであり、また近代的主体性と歴史的プロセスが出会う交差点である」¹¹。この意味においてクレオール社会は、「世界文化の形成過程」となってきた。「文化的現実の変容過程」としてのクレオール化は、カリブ海

4 *Ibid.*, p. 58 [同書、70頁].

5 *Ibid.*, p. 84 [同書、105頁].

6 以下を参照。今福龍太『クレオール主義』筑摩書房、2003年、211頁。

7 エドゥアール・グリッサン『全—世界論』恒川邦夫訳、みすず書房、2000年、21頁。

8 同書、32頁。

9 Okwui Enwezor, "Travel Notes: Living, Working, and Travelling in a Restless World," in *Trade routes : history and geography : 2nd Johannesburg Biennale 1997*, Greater Johannesburg Metropolitan Council, 1997, p. 8.

10 *Ibid.*, p. 9.

11 Okwui Enwezor, »Die black box«, in *Documenta 11_Plattform 5: Ausstellung : Katalogue*, Hatje Cantz, 2002, p. 51.

地域を発祥としつつも、やがて世界へと広がってゆく。それはまた、現代のグローバリゼーションの弊害たる文化の均質化に対する抵抗の契機をも秘めている、とエンヴェゾーは考える。

とはいえ、歴史的経緯を参照すれば明らかなように、クレオール化を引き起こす要因は必ずしもポジティブなものとは限らない。それはそもそも植民地化という不幸な出来事に端を発するものであったし、現代でも、グローバルな人の移動は、(移民や難民のように) 自発的というよりも、むしろ強いられるものが少なくないだろう。ブリオーはクレオール化を「接ぎ木」¹² にたとえているが、接ぎ木とは人工的なキメラの創出である。この人工性にかんして南アフリカ出身のアーティスト、コリン・リチャーズは、接ぎ木を行うためには、接ぎ穂と台木の両者をそもそも人為的に切断する必要があることを強調している。異なる種同士を接合するためには、それぞれを「トラウマになるくらい深く切り込む」¹³ 必要がある、と指摘することによってリチャーズは、クレオール化の起源にひそむ人為性とともに、そこで作用する暴力の問題に注意を促す。「[差異]に切り込み「差異」を横断することで「接ぎ木」は、文化の融合を支える暴力と欲望を否定することなく「ハイブリッド性」の言説を強いることになる」¹⁴。



サン・フランシスコ聖堂、アカテペク、18世紀前半

ラテンアメリカ、アフリカ、日本の事例から

さてそれでは、ここまで見てきたグローバリゼーションとクレオール化の議論は、具体的な美術史とどのようにかかわるだろうか。たとえば16世紀から19世紀にかけてのラテンアメリカ美術には、荒々しい「接ぎ木」のあとをはっきりと認めることができる。西欧による植民地化からしばらくたつと、これらの地域では「単純にヨーロッパ的でも先住民的でもない、「植民的」なもの」¹⁵ が形成されてゆくのである。今日のメキシコにおいて最も熱心な信仰の対象となっている褐色の《グアダルーベの聖母》、中南米で独自の発展をとげたバロック建築、植民地生まれのスペイン人や先住民首長たちが生み出した、先住民の伝統と西欧文化とのアマルガム的イメージといったものは、ラテンアメリカ地域の伝統文化にキリスト教をはじめとする西欧文化が大いなる暴力とともに移植された結果生まれたものである。それは現代のわたしたちが想像するいわゆる部族美術(マヤやインカといった先住民の芸術)とルネサンス以

降の西洋美術、いずれとも大いに異なった印象を与える。実際これらの美術は、その「クレオール」的な出自や外観から、長らく「正当」な美術史からは無視されてきたが、グローバリゼーションの枠組みをふまえた美術史再考の気運が高まるなかで、近年その意義が見直されてきている。

ステレオタイプな部族美術とオーソドックスな西洋美術のいずれにも属さないことによって美術史の語りからこぼれ落ちてきたという点では、アフリカの現代美術をめぐる状況も示唆に富む¹⁶。アフリカの部族美術は、19世紀後半から「プリミティヴ・アート」として西洋で注目を集めるようになり、19世紀末から20世紀初頭にかけて、同時代の前衛芸術家たちのインスピレーション源として存在感を高めてゆく。一方で、20世紀には宗主国の美術の影響を受けて、アフリカ各地で従来の部族美術とは異なるスタイルの美術、つまりモダンアートが開花するようになる。先行研究によれば、アフリカにおけるモダンアートの出現は少なくとも1920年代には認めることができ、20世紀を通じ

¹² Nicolas Bourriaud, *Radicant*, op. cit., p. 86 [ニコラ・ブリオー『ラディカント』、前掲書、107頁]。

¹³ Colin Richards, "Graft," in *Trade routes*, op. cit., p. 234.

¹⁴ *Ibid.*

¹⁵ 岡田裕成『ラテンアメリカ 越境する美術』筑摩書房、2014年、13頁。

¹⁶ この点については以下に詳しい。川口幸也『アフリカの同時代美術——複数の「かたり」の共存は可能か』明石書店、2011年。

て各地方で独自の発展をとげてきた¹⁷。だが、アフリカに求められるのはその「真正」なアイデンティティを表現した部族美術のみであり、西洋文明によって「汚染」されたモダンアートではない、という考えが当の西洋を中心に根強かったこともあり、長らく後者は西洋中心の美術史からは顧みられてこなかった。この流れが変わり始めるのは、89年にフランスのポンピドゥー・センターで行われた「大地の魔術師たち」展ではじめてアフリカの同時代美術が取り上げられて以降である。同展は、取り上げられたのがモダンアートの作家ではなく民衆芸術の作家である点に批判が寄せられたものの、アフリカに虚構のアイデンティティ的純粋性を押しつける西洋の欺瞞を問い直すきっかけとなった点では意義があった。

こうして90年代以降、美術の分野でもアフリカのクレオール的な側面に注目が集まるようになってゆく。たとえば、ナイジェリア系イギリス人アーティストのインカ・ショニバレの作品は、それをよく体現している¹⁸。1962年にロンドンでナイジェリア人の両親のもとに生まれたショニバレは、イギリスでの美術学校時代、指導教員から「アフリカ(人)らしい」作品をつくることをしきりに求められ違和感を覚えたという。ここから彼は、「アフリカ(人)らしさとは何か」という問いをみずからの創作活動の根本に据えることになる。彼が自作に常用し、作品のトレードマークにもなっている「アフリカン・プリント」は、まさにこの問いの視覚的表現となっている。アフリカン・プリントとは、アフリカで一般的に見られるろうけつ染めのテキスタイルで、そのビビッドな色使いとユニークなデザインは、いかにもアフリカ的な印象をわたしたちに与える。実際若いころのショニバレ自身がそうであったように、アフリカ人のなかにもこのテキスタイルをアフリカ独自のものと考えている人は多いそうだが、じつはそれは事実とは異なる。



アフリカン・プリント

アフリカン・プリントのルーツはインドネシアの伝統的なろうけつ染めの更紗(ジャワ更紗)にある。当地を植民地にしていたオランダがこれに目をつけ19世紀に機械式的大量生産を行うようになると、この「ダッチ・ワックス・プリント」は販路をもとめて(同じくオランダの植民地であった)西アフリカ諸国に出回るようになる。やがてアフリカの工場でも生産が始まり、現地の好みに合わせてデザインが改変されるにつれてこの布は、ジャワ産という起源が次第に忘れられ、アフリカの特産品として当地に根付いてゆく。このようにアフリカン・プリントとは、植民地支配を背景としたグローバルな交易の結果もたらされ、それがいまやアフリカのアイデンティティの一部となったという意味で、すぐれてクレオール的な産物といえる。ショニバレの名を世に知らしめることになったのは、このアフリカン・プリントを使って大英帝国時代の紳士・淑女の衣装をつくり、マネキンに着せた一連の作品(インスタレーション)であるが、さまざまなポーズのマネキンたちが作り出す場面は、観る者を植民地主義の歴史をめぐる省察へといざなうだろう。

クレオールは、近年日本美術史においてもキーワードになりつつある。近代日本美術を専門とする美術史家の古田亮はつぎのように述べる。

日本画とは何かを考えた時に、そもそも中国からの強い影響によって、古代から変化を遂げながら現象してきた近世までの日本絵画は、中国絵画に対するクレオール絵画であったとすることができる。[……]そして、十九世紀後半、近代化=西洋化という開花の波の中で、西洋絵画の圧倒的な影響を受けた日本絵画は、日本画と洋画という二つのクレオール絵画を生みだし、ということも可能なのである¹⁹。

もちろん、日本はカリブ海地域やアフリカ諸国のように他国から植民地化された経験はないため、クレオール化の経験についても——またその背後にある人為性や暴力性の問題についても——、厳密には同レベルで語ることはできない。ただ、グリッサンやプリオーが世界のクレオール化を語る時のように、この語をある程度拡張された意味で捉えるならば、それは日本美術史の語りについても有益な視座をもたらしてくれるかもしれない。美術批評家の北澤憲昭は、90年代の日本画論が、明治以降の日本画のハイブリッド性を強調するあまり、それと対置される江戸時代以前の日本画を本質主義的に捉えすぎていたとし、ここに

17 Cf. Marshall Ward Mount, *African Art: the Years Since 1920*, Indiana University Press, 1973.

18 ショニバレについては、前掲の川口の書のほかに以下も参照。正路佐知子「『Yinka Shonibare CBE: Flower Power』初の日本個展 インカ・ショニバレの姿」ウスビ・サコ/清水貴夫編著『現代アフリカ文化の今——15の視点から、その現在地を探る』青幻舎、2020年。

19 古田亮『日本画とは何だったのか——近代日本画史論』KADOKAWA、2018年、6～7頁。

クレオール観点を導入することによって、このハイブリッド性を江戸時代以前にまで遡らせることができるのではないかと示唆している²⁰。

グローバルな美術史記述へ

冒頭にも述べたように、芸術の観点から文明史にアプローチしようとする、どうしても文明と芸術の関係を本質主義的に捉えがちになる。しかしながら、少なくとも文明史のある時点から顕著になってくるグローバリゼーショ

ンや、それに伴う文化の混交（クレオール化）という事象を意識するならば、美術史についても少なからず違った見通しが立てられるのではないだろうか。また、こうしたグローバルな力学のなかで形成される美術史という見地に立てば、従来の西洋中心の美術史記述の問題点や、さらには西洋中心のアートワールドの問題点も見えてこよう。この真の意味での「世界美術史」記述の試みは、いまだ端緒にすぎないばかりであり、それは今後、文明史に対するわたしたちの見方にも多かれ少なかれ修正を迫ることになるに違いない。

20 北澤憲昭「東アジアのなかの日本画、日本画のなかの東アジア」北澤憲昭・古田亮編『日本画の所在——東アジアの視点から』勉強出版、2020年所収、11～17頁。

文明と科学あるいは技術

戸田 剛文

概念の曖昧さ

文明と科学の歴史について何かを書いてほしいという依頼を引き受けては見たものの、私にとってこのテーマには二つの問題があり、それについてまず書いておきたい。最初の問題は、どのようなテーマについても言えることだが、多くの概念は曖昧である。今回の場合、文明という概念自体が、あまり明確なものではないと思われるし、また科学という概念もなかなかやっかいである。曖昧であるということは、逆に言えば、これらの概念をどのように使うかということは、筆者の裁量に委ねられていると言っても許されるかもしれない。

第二の問題は、私にとって第一の問題よりはるかにやっかいなもので、文明という概念は曖昧ではあるけれども、ある程度、発展や衰退といった変化のようなものをそこに含んでいるように思われる。しかも発展や衰退という一種の価値観を要求するようなものを、文明というような大きな観点から語ろうとするならば、必然的に、具体的な、そして非常に大事なものが失われるように思われる。いつの時代にも、その時代の文明によってうまくいく人もいれば、その文明のために苦しむ人もいる。だから文明とか科学技術などについて何か自分の評価を述べるときに、最も間違いがない言い方は、いい面もあれば悪い面もあるという、読む人が一番うんざりするような答えになる。それで本論で私は、あえて間違いを犯してみよう。つまり、科学と文明についての歩みに、なるべく肯定的な評価を与えたいと思う。

上述したように、文明が何かということは、それ自体必ずしも明確なものではないように思える。調べてみると、精神的・物質的な文化や技術を指すとされたり、特に物質的なものの発展、豊かな状態を指すと言われることもあるようだ。ただしそういう精神的なものあるいは物質的なものという単純な二分法をとることはできない。科学や技術の展開の背後には、その担い手の精神性が深く関わっていると考えられるからであり、例えば福沢諭吉などもそのことを指摘している。しかし、文明の発展と言われるものが、そのまま精神的なもの発展につながると考えられているわけではないこともまた確かだ。

というのも、よく失われた高度な文明についての物語がある。代表的なものはプラトンのアトランティスなどであり、そこでは非常に高度な文明が発達していたとされる。アトランティスの話は、現代の「アクアマン」なんかにも

出てくるので、聞いたことがある人も多いと思う。また、宮崎駿の『天空の城ラピュタ』に出てくるラピュタは、とんでもない科学力を持った帝国であり、これもアトランティス的な、高度な文明の描かれ方だと言って良いだろう。

このような優れた科学技術を持った文明は、しばしば滅ぶものとして描かれている。アトランティスは、高度な文明を持つ一方で不遜になった人々に対する罰として、そしてラピュタでは、そのような技術でも克服できない疫病によって。こういったモチーフには、常に一つの戒めがあるように思われる。技術的、物質的にどれほど繁栄したとしても、より大きな力がそれを吹き飛ばすことがあるのであり、自らの限界を知り、謙虚たれ、というわけだ。

科学と真理、科学と科学技術

本学の名誉教授である佐伯啓思氏は、ニーチェやハイデガーの思想に着目しつつ、現代をニヒリズムの時代として描いた。それは伝統的で絶対的な価値が崩壊した時代であり、その虚無に苦しむ時代である。

絶対的な価値に対する不信は、科学においても例外ではない。近代以降、自然科学は道徳をはじめとする精神科学に対して最も進んだ学問の典型として捉えられた。自然科学は、一步一步、確実に発展している、世界の真理を解き明かしていると考えられた。20世紀前半に大きな影響力を振ったウィーン学団を中心とする実証主義は、まさしく実証された数だけ、真理が増えていくという累積的な科学観を表したものとも言える。

しかしクーンの『科学革命の構造』は、そういう累積的な知識体系としての科学観に一石を投じることになった。クワインなどに見られるホーリズム的な科学観も、現在の科学が唯一の事実の描写ではないと主張する。これらによって真理の書としての科学が否定されたわけではない。ポパーのように、論理実証主義と戦い、累積的な知識としての科学観を否定しつつも、科学が真理へと向かって進んでいると信じて疑わない哲学者もいる。しかし少なくとも真理の書たる科学の地位は、必ずしも絶対的なものとは言えないと言って良い。

アメリカのプラグマティストであるローティは、科学は事実や真理を明らかにするものであるから価値の問題によって妨げられるべきではないという考えを、文化政治という概念——どのような言葉や概念をわれわれが採用すべきかという問題をめぐる争い——を用いて批判した。科

学は事実や真理を明らかにするものであるから価値の問題によって妨げられるべきではないという発想自体が、一つの価値の問題であり、その主張もまた文化政治の中で行われる立場でしかない。ローティのような立場からすると、科学が真理に向かって発展しているかどうかも文化政治の舞台で争われる問題であり、しかもローティからすればそれは捨て去るべき選択肢なのかもしれない。

真理の書として科学の地位がどのようなものであれ、あるいはホーガンのように科学にこれ以上な大きな発展は見込めないのではないかという疑いは置いておいても、近代以降の文明において科学技術が極めて大きな影響を持っていることは疑いようがない。真理の書として伝統的な科学観は、まさしく真理との対応いかんによってその発展が語られるのだろうが、科学技術の発展は、むしろ有益さに関わる。科学と科学技術は、しばしばはっきりと区別される。ポパーなどは科学技術は全体主義的な国家でも発展しうるが、真の科学は開かれた国でしか発展しないと述べる。C. P. スノーは、科学と科学技術を区別することに批判的だが、科学技術がしばしば彼とは違う立場の知識人によって侮蔑的に語られると述べている。私はこの文章では両者を特に区別せずに扱う。

科学技術が現代における影響は多岐にわたる。われわれの生活のすみずみまで、それは体を作る組織のように浸透している。そして、食料問題、医療技術の問題、エネルギー問題などにおいて、従来の多くの問題を解決してきた。そういう意味で、科学や科学技術の発展は、われわれの文明のこれまでの発展と強い絆で結ばれてきた。

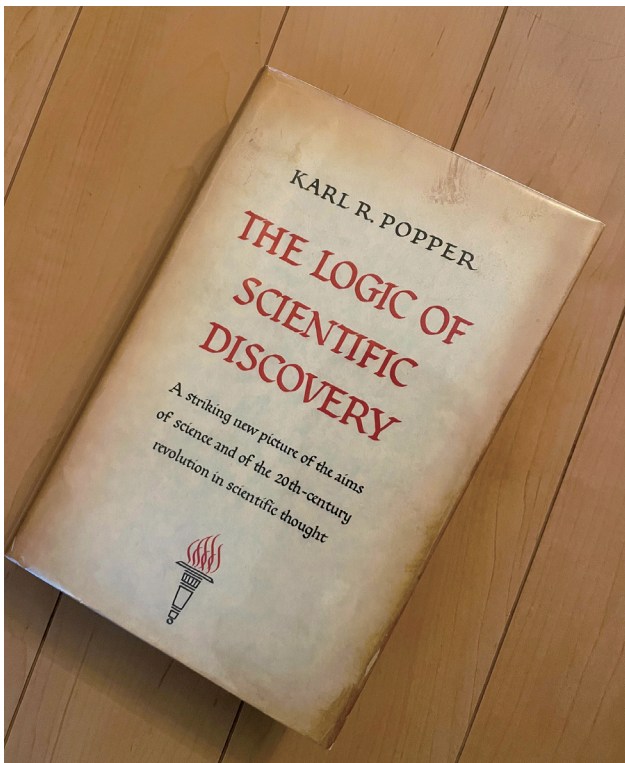
もちろん、こういった現代の科学技術が、手放しで歓迎

されるようなものではない一面を持っていることも理解している。生命科学およびそれに伴う技術は、寿命を伸ばし多くの難病を克服し、生殖技術は不妊に悩む人々に希望を与える。それと表裏一体をなすかのように、それらは社会問題や倫理的問題を引き起こしてきた。極端な長寿社会は、ときとして次世代に大きな負担を強いるし、ときには世代間の分断を引き起こす。生殖技術は、ときとして生命へのデザインなどへの不安を生み出す。地球温暖化現象などを代表とする環境問題は、しばしば現代の科学技術を用いて便利さ・豊かさを求めたすぎた結果であるとも言われる極めて大きな問題である。

現代における表現

もう一つの事例をとりあげよう。IT 技術は、以前にもまして多くの人々がその意見を主張することを可能にしている。多くの人が SNS を利用し、そこで発言し、ときには国家的な機密（特にその国にとって都合の悪い機密）までが明らかにされることもあるし、またアラブの春に見られるように、SNS によってどのような深刻な問題が起きているのかが世界に知らされることもある。一方で、しばしば顔の見えない多くの人々が、ある特定の人間を攻撃することは社会問題になっている。絶えず社会と繋がっているように思える状況が、逆に繋がっていないことに対する不安を生み出す。自分の顔も相手の顔も見えない状況は、自分の発言に責任が伴うこと、また発言には自分の個性や見識が露わになることを人は忘れがちになる。ある意味で自己表現の場となる所で、人は自己も他者の存在をも希薄にしてしまう。故意に偽の情報を流すことで敵対する勢力にダメージを与えることもできる。

もう少し、この IT 社会における表現について述べてみたい。さきほど述べたように現代では多くの人々が自分の意見を社会に発信できるようになった。発言の機会における格差が減少しているという点では、まるで総中流評論家の時代とでも言えそうな状況である。他者に対するあからさまな誹謗中傷もその匿名性ゆえに目立つものになっているが、多くの人々が広く意見を言える状況は、必ずしも表現の技術を向上させているわけではない。字数の制限などもあるが、多くの人々が意見を述べているほどには多様性は感じられず、画一的で、感情的でありすぎたり論理性が感じられないことも多い。もう一つの特徴的な点としては、現代は行きすぎた正義感の時代でもあるように思われる。悪意のあるバッシングは論外とはいえ、道徳的に許されないと感じた出来事に対する批判があまりにも激しい。厳しすぎる不文律は、ときとして明文化された規則よりもはるかに社会を窮屈にするように思われるし、行きすぎた正義感、神の側に自分がいるという錯覚と大差ない。真理を巡る戦いは、まさしく古来より哲学や科学を戦場としてきたのだが、絶対的な真理を人が掴めるのかどうかということについて、多くの思想家たちがそれをもとめつつ極めて慎



重に探究を進めてきた（ときにはそれを放棄してきた）歴史的な事実をなかなか学ぶことは難しいようだ。そしてこの点にはさらなる問題が背後に控えているかもしれない。それは、現代が極めて大きな格差社会であり、それがこのような行きすぎた正義感を生み出している可能性があるということだ。現代の社会学者は、社会の不平等さと他人への辛辣さの間に関係があることを指摘している。また情報にあふれた現代社会は、多くの人々を他者との比較へ容易に誘う。そしてそういう社会の不平等さを促す一因に、現代の科学技術（SNSの普及など）があるかもしれない。

ただこういう現代の状況に直面したときに、昔はよかったと考えることはできるかもしれないが、本当にそうかと言えば私は疑問だ。いつの時代にも問題や困難に直面して昔は良かったという人はいるだろうし、今の時代が完全に幸福な時代だと思っている人はほとんどいないだろう。問題は常にある。一つの問題の解決は新しい問題の扉を開く。それはむしろ当然のことだと考えるべきだ。

人の善さ

ポパーは、人は賢いが邪だという考えに対して、彼らしいあまのじゃく精神によって人は善であるが愚かだという意見に置き換えようとする。もちろん先ほど書いたような状況では、善意のかけらも見えない状況も多々見られるだろうが、そういった場合でも、向こうにいる人を想像できない愚かさがある良さを妨げていると考えられるかもしれないし、またある特定の個人に対する攻撃は、しばしば愚かで浅薄な正義感の裏返しのこともあるだろう。そしてしばしば取り返しのつかない事件の後である場合もあるが、そういった問題に対する反省もまた、しばしば現代の科学技術が可能にした多くの人の発信によって行われることも多々あるのである。もしもわれわれが、特に大人が、社会がよくなっていくという希望を、さらに将来を担っていくこれからの人がもつことを望むならば（そしてそれは望むべきではあると私は信じているが）、さらに多くの意見をあげる自由を拡大していくべきだし、同時により教育にさらに力を注ぐべきだ。われわれは昔からの問題、正しさとか善さとかといった問題について、より真摯に向かい合うべきだ。もしかしたら私たちの行きすぎた正義感の背景にあるかもしれない社会の歪みなどについてももっと共に考えていくべきだろう。

私が希望を感じる人間の善良さの一例をあげよう。20世紀の畜産技術の大きな発展は、アメリカを中心に非常に効率的な食肉の生産方法を生み出した。それは豊かな食生活を求める人々の欲望と大きな経済的な利益を求める巨大企業の欲望の結晶とも言えるが、それを可能にしているのは科学技術の発展であることは疑う余地がない。しかし一方で、この食料供給の方法に歯止めをかけてきたのもまた人間である。ピーター・シンガーやトム・リーガンといった哲学者の著書などをきっかけに、こういったわれわれの

欲望の中で苦しむ弱き動物たちを救おうという運動が起こり、現在にまで続いている。そしてそれはEUを中心に、少しずつではあるが、多くの国で展開されている。もちろんシンガーなどが明らかにしたように、大規模な工場畜産は、そこで利用される動物に対してだけではなく、土壌汚染、環境汚染といった仕方で、われわれ自身にも悪影響をなす。しかし、多くの国で動物の福祉が問題になるとき、まずそこで利用され、殺される動物たちへの共感の眼差しがあるだろう。人間自身に対する不利益もないわけではないが、人間に利用される動物自身の利益を考えることなしには、こういった運動は成り立たない。ときにそれはわれわれ自身への不利益をも生み出すかもしれない。それでもそこに問題を見いだすのが人間なのだ。そしてこういった問題に対する眼は、動物実験や畜産といった目に見える動物の不利益だけではなく、より大きな環境の問題へと拡大していこうとしている。これはたんなる倫理的問題ではない。倫理の力だけでは、解決には至らない。こういう問題を解決するのも、また倫理と科学のネットワークなのだ。

新しい科学（そして科学技術）が、新しい問題を、しかも以前よりも大きな問題を生み出しがちだということは誰も否定しないだろう。実際のところ、すべて解決済みのハンコがわれわれの歴史書に押されることはないし、それが嘆かわしいことだというわけでもない。新しい問題を解決しようと、また取り組めば良い。多くの人々の願いのなかでより基礎的な願いをかなえる——困難を解消する——ために、しばしば科学が貢献したことは疑いがない。スノーの「自分は享受しながら他人がまだ享受していないような基本的な要求を軽んじてはならない」という言葉をわれわれは忘れてはならないだろうし、そのための科学は有力な手段であったし、これからもあるだろう。ただし無条件であらゆる技術の開発や科学の研究が認められるべきではない。それは市民のチェックを受け続けなければならない。また科学技術によって生み出された問題のすべてが科学技術によって解決できるかどうかはわからない。いやあらゆる問題は、科学技術だけによって生み出されるわけでもそれによって解決されるわけでもないだろう。すべては、先ほども述べたように、技術と倫理の融合によって解決されなければならない。それによって文明は少しずつ進んでいくだろう。

傷の舐め合い

ここで、もう一つ書いておきたい。傷の舐め合いという言葉は、傷ついたものどうしがお互いにいたわり合うという意味だけでなく、しばしば軽蔑的な意味で用いられる。それが軽蔑的な意味で用いられるのは弱者への軽蔑の心の表れであり、また自分が弱者ではない（あるいはそうなりたくない）という気持ちの現れであろう。それは自分は弱者ではないという気持ちの現れでもある。しかし、傷を舐め合う行為を、あるいは自分はまだ傷を負っていないくても、



それはちょっとした偶然によって自分だったかもしれないと思ひ他者の傷を舐めていたわる行為を、われわれはもっと価値があるものとして捉えるべきだ。われわれの人生やわれわれが育つ文化・文明の多くは、偶然の所産なのだ。行きすぎた正義感のエネルギーを、徹底的な批判に用いるのではなく、いたわりに用いるべきだ。われわれにそのような気持ちがあれば、社会を良くしようとするために科学の発展を促そうとすることは、たとえそれによってまた問題が生じるとしても（そして生じるだろうが）、必ずしも悪いことではない。

最後に、冒頭に書いたことだが、多くの問題があることは認めつつも、基本的には現代に至るまでの科学・科学技術の発展に対して、私は控えめにではあるが肯定的に書い

たつもりだ。しかしわれわれの文明のプロセスには、多くの不幸があるのもまた事実であり、たとえ全体的な発展があったとしても許されるべきものではない。そこから目を逸らすならば、それぞれ文明の衰退である。

参考文献

- Fraser, David, 2019, Why We Need a New Ethics for Animals, *Journal of Applied Animal Ethics Research* 1, pp. 7-19.
- ウィルキンソン, リチャード, 2020, 『格差は心を壊す 比較という呪縛』, 東洋経済新報社.
- 佐伯 啓思, 2011, 『現代文明論講義——ニヒリズムをめぐる京大生との対話』, ちくま新書.
- シンガー, ピーター, 2011, 『動物の解放 改定版』, 戸田清 (訳), 人文書院.
- スノー, チャールズ・P., 2011, 『二つの文化と科学革命』, 松井巻之助 (訳), みすず書房.
- プラトン, 1975, 「クリティアス」(『プラトン全集 12 テイマイオス・クリティアス』所収), 田之頭安彦 (訳), 岩波書店.
- ホーガン, ジョン, 1997, 『科学の終焉』, 竹内薫 (訳), 徳間書店.
- ポパー, カール, 1980, 『推測と反駁 科学的知識の発展』, 藤本隆志, 石垣壽郎, 森博 (訳), 法政大学出版局.
- ポパー, カール, 2014, 「開かれた社会と民主国家」(『カール・ポパー 社会と政治』ジェレミー・シアマー, ピアズ・ノーリス・ターナー (編) 所収), ミネルヴァ書房.
- ローティ, リチャード, 2011, 『文化政治としての哲学』, 富田恭彦, 戸田剛文 (訳), 岩波書店.
- 『e-World Premium 2019年12月号 SNSが変える世界』, 時事通信社.

風景と文明

都市装置としての自然

中嶋 節子

1. はじめに

梅棹忠夫は「文明」を、人間と人間の生活を成り立たせている「装置群」として形成する一つの系、「人間・装置系」として捉えた¹。「装置群」とは道具や構造物をはじめとする有形の人工物と、法律や経済ほかをめぐる社会制度などの無形の人工物の両方を指す。つまり、実体としての「人間の存在様式」を文明とする立場である。そして人間の歴史は、「人間・自然系としての生態系から、人間・装置系としての文明系へ」の推移として梅棹は考えた。また、しばしば文明との違いが論じられる文化については、具体的な存在である文明の「精神的抽象」であるとした。文明の定義はほかにも文化人類学の視座から、文明と文化を連続的にとらえ、階層の文化と社会の分化、高度な技術、都市化をとまなう文化を文明とするものなど、複数の見解が提示されている²。

いずれにせよ都市は、文明の極めて重要な要素とってよいだろう。都市文明の空間的側面について論じる際に、これまで注目されてきたのは、主として街路や街区、広場などの形状と配置、またそれらの構造的・機能的関係といった都市内部の人工物の様態である。その一方で、都市の外に広がる自然の存在は、文化論、社会経済論としては論じられてきたものの、空間論の観点からはもっぱら地理的条件としてのみ扱われてきたように思われる³。しかし、米山俊直が「小盆地宇宙」と評したように、山に囲まれた地形につくられることの多い日本の都市では、都市と自然との関係構造は都市文明を考える際に重要な視点となる⁴。

日本の都市はその成立から自然との高い親和性を有した。都市の領域を囲い込む物理的境界を設けず、自然との相互の頻繁な交流の上に都市は存続してきた。自然は梅棹のいうところの都市文明の「装置」のひとつとして機能しているといつてよい。そのあり様は人間の生活様式の違い、時

間軸でいえば時代によって異なる。なかでも近代は、都市と自然との関係構造に大きな変化がみられた時代であった。都市文明論へのアプローチとしてここでは、京都で起こった出来事を通して都市と自然の近代について考えてみたい。

2. 風景の発見

近代の自然を考えるにあたって、「風景の発見」はまずもって注視すべき出来事である。なぜなら風景の発見はきわめて近代的現象といえるからである。西欧においては、美術史家のケネス・クラークらによって、17世紀の風景画の登場に「風景」という概念の誕生が指摘されている⁵。風景画は人々を取り巻く自然に、眺めとしての審美的な価値を見出すものであり、自然を客体化して評価するところに風景の誕生をみる。主体の価値観によって切り取られ、再構成された自然の認知が「風景」である。18世紀以降、イギリスの人々を魅了し、絵画のみならず庭園や建築、文学ほかの美的範疇となる「崇高 (sublime)」や「ピクチャレスク (picturesque)」の概念もまた、自然が本来持つ危険や恐怖から切り離されたところに観賞者 (主体) が立つことによってはじめて成立する点において、風景として自然を捉える態度を前提とする。

風景の成立について、ゲオルグ・ジンメルは、「『風景』が表象されるときには、それはおそらく視覚的な、またおそらく美的な、またおそらくは情趣的な自律的存在たることを要求する」とする⁶。さらに、風景の出現を「自然の総体の統一的な感受からの隔離」とし、隔離する以前の「古代ならびに中世が風景にたいする感情をもたなかったことは、なんら驚くべきことではない」と述べた。つまり、自然から切り取られた一部分をもって全体とみなすことが風景を成立させる要件とし、自然と人間とが総体としてあった古代、中世には風景は存在せず、自然を隔離し、それ自

1 梅棹忠夫編『文明学の構築のために』中央公論社、1981年。

2 A・L・クローバー著、松園万亀雄訳『文明の歴史像——人類学者の視点』社会思想社、1971年ほか。

3 山をめぐる都市史研究として高橋康夫による『海の「京都」』（京都大学学術出版会、2015年）ほか一連の論考がある。

4 米山俊直『小盆地宇宙と日本文化』岩波書店、1989年。

5 ケネス・クラーク、佐々木英也訳『風景画論』ちくま学芸文庫、筑摩書房、2007年。

6 ゲオルグ・ジンメル、杉野正訳「風景の哲学」『ジンメル著作集12 橋と扉』白水社、1994年。

体として認知、理解するようになってはじめて風景が表象されるとする。同様の指摘は文学史家で文化人類学者のピエーロ・カンボレージ、建築理論家のノルベルグ・シュルツほかによってもなされている⁷。

では、日本では風景はいつ発見されたのだろうか。柄谷行人は日本近代文学を論じるなかで、以下のように述べる⁸。

私の考えでは、「風景」が日本で見出されたのは明治二十年代である。むろん見出されるまでもなく、風景はあったというべきかもしれない。しかし、風景としての風景はそれ以前には存在しなかったのであり、そう考えるときにのみ、「風景の発見」がいかに重層的な意味をはらむかをみることができるのである

柄谷は明治以降、近代西洋文明と向き合うなかで、それ以前の日本の文学が英文学に対する国文学、漢文学として、月並や四季絵が風景画に対する山水画として規定され、解釈されるようになったことをあげ、「文学」や「風景画」の出現によって日本人の認識の布置そのものが変化したと指摘する。同じ現象として風景もまた「一つの認識的な布置」として現れるものであり、いったん「風景」が見いだされると、それ以前の風景について語るときも「風景」によって見ているという転倒があることにも柄谷は注意を払っている。柄谷の説明はジンメルのもそれと極めて類似し

ていることは興味深い。

1894（明治27）年に、日本の風景論としてベストセラーとなった志賀重昂の『日本風景論』が出版されている⁹。この書は火山や水蒸気といったこれまで認識されていなかった日本の環境の特徴を風景として見出し、科学的な分析を交えてナショナルな視点で解説した点において画期的であった。近代西洋文明のインパクトによってもたらされた知覚の変化が明治20年代に至って、新しい日本の風景と日本の風景の新しい見方を発見させたことを『日本風景論』は示す。

柄谷の指摘するところの風景の発見と志賀の風景論は性格を異にするものの、自然に対する日本人の認識が変化した時点をつ捉えたものとして重要である。

3. 京都における風景の発見

風景は近代の京都においても発見された。それはまず、三山と呼ばれる市街地を取り囲む山々においてであった（図1）。『日本紀略』の平安遷都の詔に「山河襟帯にして自然に城を作す」とされ、平安京を定めた山々である。

前近代の三山は里山としてのみならず、都市に近い立地から市中に移出する林産物の生産地として、また信仰の対象、都市民の行楽地、さらには葬送の地として存在した。こうした山々の多くは麓にある社寺が所有、維持、管理していたが、一部の禁足地や社寺の堂宇周辺以外は、一定の



図1 三方を山に囲まれた京都の地形（Googl Earthに筆者加筆）

7 クリスチャン・ノルベルグ・シュルツ著、前川道郎・前田忠直訳『建築の世界—意味と場所』鹿島出版会、1991年。ピエーロ・カンボレージ著、中山悦子訳『風景の誕生—イタリアの美しき里』筑摩書房、1997年。

8 柄谷行人『日本文学の起源』講談社文芸文庫、1988年、20頁。初出「風景の発見」『季刊藝術』1978年夏号。

9 志賀重昂『日本風景論』政教社、1894年。

約束事のもとで入会利用が許されていた。つまりコモンズとして山はあったといえる (図2)。

京都の山に大きな変化がみられたのは明治期のことである。明治初期の社寺土地令によって山地が社寺から切り離され、その混乱に乗じて濫伐が行われるなど山は著しく荒廃した。上地後は社寺林の大部分が官有林 (国有林) となるものの、以前のような日常的な管理は行われず、入会利用も制限され、山は半ば放置された状態に置かれた。

山の荒廃を目の当たりにした人々は、そこに京都らしい風景を発見する。むろん古代から山へのまなごしは存在したが、それは生活や生業と深く結びついていた。しかし、近代に山へとむけられたまなごしは、もっぱら外からの眺めとしての山の価値に注がれた点において、それ以前とは異なるものであった。

1880年代にはすでに山林の保護とともに、東山や嵐山を含む山地を広く「日本の公園」として整備することが市是とされ、市街地を取り巻く山々の眺めが京都らしさの表象となっていく¹⁰。1895年11月1日の『日出新聞』には、「山紫水明、此の天然の美を除きては京都無しと云うも不可無きなり、(中略)山水の美風光は即ち京都主一の元素たり」とある¹¹。「山紫水明」のフレーズは、その後、京都の都市像として繰り返し登場する。

明治以降、他の都市と同様、京都でも近代化、工業化を推し進める都市経営方針が打ち出されるが、その一方で歴史性と一体となった自然環境、特に山並みを他都市との差

別化において再評価し、その整備を重視するようになる。目指されたのは、コモンズとしての山の姿ではなく、古都京都にふさわしい風景としての山の姿であった。なお、市が掲げた「日本の公園」には対外的な意識が含まれる。世界のなかの日本、日本のなかの京都という視野の拡大もまた、自然を風景として価値づける動機としてあった。「横浜東京ハ玄関ノ如ク京都ハ座敷ノ如シ」といった表現も議会議事録に確認できる¹²。

翻って考えると、イギリスでは15世紀末から17世紀にかけての第一次エンクロージャー、18世紀からはじまる第二次エンクロージャーによって、中世以来の共同利用地であった三圃式耕地や牧草地は姿を消し、資本主義にもとづく大規模農業地へと転換されたが、こうした耕地からの人々の締め出しとロマン主義的な風景への憧憬の登場は同時期に起こっている。隔離によって生まれた外からのまなごしが風景を発見したとあってよい。明治期に京都の山々に向けられた関心はこれと同種のものである。

4. 技術と計画による風景の制御

前近代の京都周辺の山々は現在みるような鬱蒼とした姿ではなく、アカマツを主体とする疎らな林で、はげ地もみられるような状況であったことが、小椋純一ほかの研究で明らかにされている¹³。アカマツの疎林は燃料や用材の産出、マツタケの採取といった人間の利用によってもたらさ

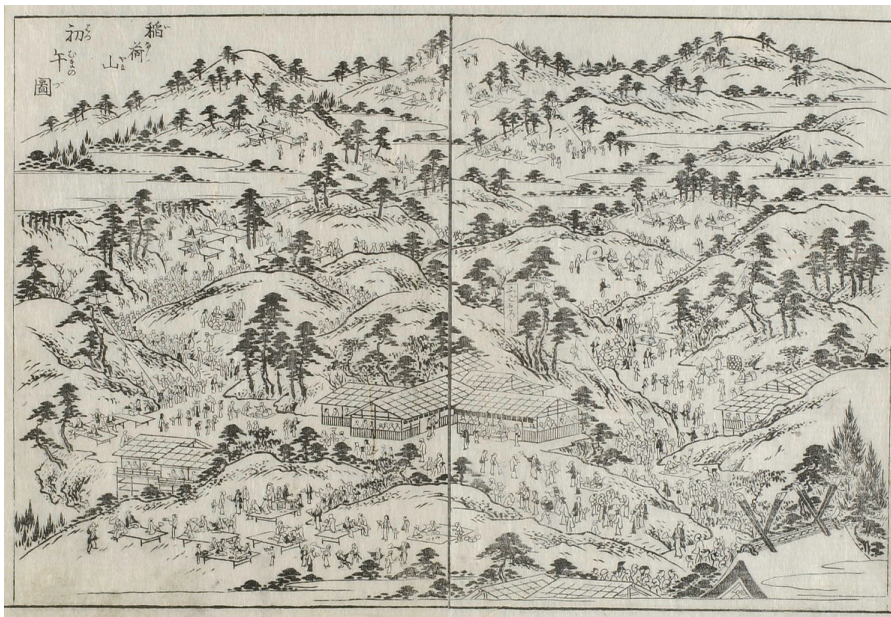


図2 稲荷社の2月初午。人々が山に入って楽しむ様子が描かれる。
(稲荷山初午図『拾遺都名所図会』巻之二、1787(天明7)年)

10 市長内貴甚三郎発言『明治33年京都市会議事録』1900年、京都府歴史館所蔵。

11 『日出新聞』1895年11月1日。

12 『明治20年京都府通常府会決議録』1887年、京都府立歴史館所蔵、180頁。

13 小椋純一『絵図から読み解く人と景観の歴史』雄山閣出版、1992年。

れた植生で、長い期間にわたって京都の山を覆っていた(図3)。

こうした京都の山々は明治以降、徐々にその姿を変えていく。京都では明治初期から荒廃した名勝地や山林の回復のための植林が行われたが、その後は東山や嵐山など主要な場所は「風致維持」を目的に伐採を基本的に禁止する禁伐林に指定され、手を入れないことで森林を保存する方針がとられた。その結果、アカマツは次第に姿を消し、シイやカシなどの樹種に置き換わっていったのである。アカマツは乾燥と日光を好む樹種である。山の利用がなくなると、後に成長してきた樹木の陰になりアカマツは更新されない。

こうした植生の変化が指摘されるのは1920年代後半のことである。山の姿が変わりつつある状況に対し、その原因となった「禁伐主義」が批判され、近代技術によって人工的に風景を作り出す「風致施業」の必要性が訴えられた。

当時、京都らしいとされた山の姿について、国有林の施業案には次のように記される¹⁴。

社寺仏閣ノ屋根尖ツタ塔等ガアカマツノ緑乃至ハ赤イ幹ナドト映り合フ處ニ京都ノ美ガアルモノト思慮セラル

アカマツの葉の緑と幹の赤がつくる明るく軟らかな姿に京都の美があるとし、アカマツの消滅した林は「風致上何等ノ価値ナキ林分」とする。長く京都の山の代表的植生であったアカマツが、京都らしい風景として共有されていたことがわかる。しかし、その存続にあたっては、アカマツが人々の営みによってもたらされた事実は置き去りにされ、近代技術と計画という手段が選択されたのである。市街地から望むことができる範囲の山を京都にふさわしい姿に変える施業案が検討されたほか、嵐山と東山については別途、1933(昭和8年)に『嵐山風致林施業計画』、1936年に『東山国有林風致計画』が策定された¹⁵。

計画によって風景を制御しようとする考え方は、都市計

画の風致地区指定にも見て取れる。風致地区は開発を抑制することで自然環境や歴史的風致の保全を図る都市計画制度である。京都では1930年に市街地から望見できる山地をほぼ包含する約3500haが風致地区に指定され、1932年には約8000haに拡大されている。これは当時の市域面積の27%に及ぶ。一般的に他都市では市街化が予測される範囲に都市計画区域が設定されたが、京都では都市計画区域に山地を大きく取り込むことで、山地をも計画の対象としたことが最大の特徴であった。

5. 風景の利用と破壊

近代文明は自然を客体化することによって風景を発見した。そして風景を制度や計画、技術によって制御可能な装置として都市文明に取り込んだ。それは同時に風景を破壊する契機ともなっていく。

1927(昭和2)年1月の『京都日出新聞』に3回にわたって、「京の山と京の川」と題した京都市土木局長兼電気局長・永田兵三郎の文章が掲載された¹⁶。そこでは東山の利用が強く訴えられ、地上にケーブルカーと空中索道、散策道路、地下にトンネルとエレベーターの設置が提案される。鴨川にプールをつくる案も含まれた。あまりにも大胆な開発案に激しい反論もあったが、当時の技術者の自然に対する価値観を知ることができる。永田の提案が実現することはなかったが、京都周辺の山々では1925(大正14)年に八瀬・比叡山間のケーブルカー、1928年には叡山電気鉄道による空中ケーブル、1929年には清滝・愛宕山頂間のケーブルカーが竣工し、山頂には遊園地やスキー場、ホテルが設置されるなど開発が進んだ。風景として装置化された自然は、風景を享受するというロジックによって開発やときに破壊をも正当化された。

一方、アカマツの林を理想として策定された森林施業計画はその後どうなったのか。実際のところ京都の山々がア

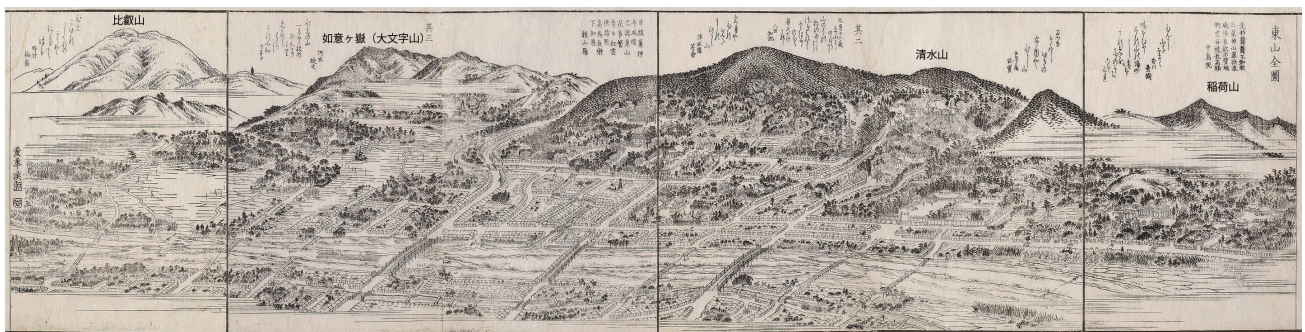


図3 京都市街地側から東山をパノラマで描く。疎らな林が山々を覆う。山の名称は筆者加筆。
(東山全図『再撰花洛名勝図会』東山之部、1864(元治1)年)

14 大阪営林局「昭和4年度第三次検訂京都事業区施業案説明書」1929年。

15 大阪営林局『嵐山風致林施業計画』1933年、大阪営林局『東山国有林風致計画』1936年。

16 永田兵三郎「京の山と京の川」『京都日出新聞』1927年1月6日、9日、10日。

カマツの林に戻ることはなかった。アカマツの消滅傾向が指摘された1920年代後半にはすでに、林相の遷移が進行し、アカマツに戻すには相当の樹木を伐採するなど大規模な施業が必要とされた。また、目標とする林が出来上がるのに10数年はかかることから、その間の風景をどのように維持するのも問題であった。計画に従って施業は実施されたと考えられるが、戦争などの影響もありその成果を知ることは難しい。

京都の山は近代の70年ほどの間に少なからずその姿を変えた。それは都市文明の装置としての京都の山の役割が、コモンズから風景へと置き換わったことを示す。

6. おわりに 風景の不連続性

風景はしばしば攪乱され大きく姿をかえる。人間による開発、台風や地震といった自然災害、そして戦争、気候変動などの人為的災害。風景をめぐる言説の多くは、こうした風景が大きく変化する出来事の直後に現れる。

近代の京都においては、明治維新後の混乱期、植生の変化と開発が進行した昭和初期、室戸台風の甚大な被害を受けた1934年に風景をめぐる議論が活発化した。日本全体に目を向けると、近代化の影響が顕在化しはじめた1880年代から1890年代、都市化が進んだ1920年代から1930

年代前半まで、戦後は国土全体に開発がおよんだ1950年代半ばから約20年間の高度経済成長期、土地価格の高騰やリゾート開発に沸いた1980年代後半から1990年代はじめまでのバブル経済期、災害では1995年の阪神淡路大震災、2011年の東日本大震災が風景を語る契機となった。

それまでとは異なる様相を呈した風景を前に、言い換えれば風景の不連続性に気付いたとき、人間は風景の意味について考える。港千尋は東日本大震災の被災地を歩くなかで、「震災後の風景とは、その切断面に現れた何かである」とする¹⁷。その切断面とはおそらく文明の不連続面であり、現れた何かとは文明が抱える矛盾であろう。一瞬姿を現した切断面はやがて、自然の力に飲み込まれるか、人為的な隠ぺいによって覆い隠されていく。長い時間軸で捉えると、文明の内に風景があるのではなく、文明は風景に内在する。われわれが風景を記憶しているのではなく、風景の方がわれわれを記憶しているように。

世界規模での気候危機と感染症の脅威が現代文明にこれまで経験したことのない難しい課題を突き付けている。アラン・コルバンは「風景は評価され、環境は測定される」とした¹⁸。近代文明において風景として評価された自然は、現代文明においては環境として計測され、指標化されている。環境としての自然からどのようなデータと情報を読み取り、どのように対応するのが現代文明に問われている。

17 港千尋『風景論 変貌する地球と日本の記憶』中央公論新社、2018年。

18 アラン・コルバン著、小倉孝誠訳『風景と人間』藤原書店、2002年。

「より生きやすい社会」をめざして

柴田 悠 | Haruka SHIBATA

柴田 悠 (しばた はるか)

人間・環境学研究科共生人間学専攻、准教授

1978年生まれ、東京都出身。京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了。博士(人間・環境学)。専門は社会学、社会保障論、幸福研究。

「生きづらさ」と向き合うために総人へ

中高生のころ私は、自分自身や身近な人たち(友人や家族など)が、さまざまな悩みや生きづらさを抱えていることを実感し、そういった悩みや生きづらさとうまく付き合っていたらいいのか、どうしたら軽減できるのか、という問題意識を深めていた。さらに、人の心を自然科学的に捉える「脳科学」や、この世界の誕生を解き明かす「宇宙論」にも興味があった。そのため、それらのすべてを扱うことのできる総合人間学部に(1年間の自宅浪人を経て)入学した。1998年のことだった(総人第6期生)。

総人では、当時社会問題になっていた「ひきこもり」や「不登校」に関心の的を定め、3回生から杉万俊夫先生(社会心理学)の研究室に入った。社会構成主義理論やフィールドワーク、インタビュー調査、計量分析などの指導を受けた後、不登校経験者の高校卒業を支援する「サポート校」で1年半のフィールドワークを行い、そこでの「生徒-教師間コミュニケーション」を分析して卒業論文を執筆した。

その後、臨床心理士をめざして教育学研究科を受験したが、勉強不足のため不合格。臨床心理学の勉強に身が入らない原因は、自分の関心が別のところにあると気づき、1年間の浪人(自分の関心ととことん向き合う期間)を経て、自分の関心を受け入れてくれる人間・環境学研究科の大澤真幸先生(社会学)の研究室に進学した。

「生きづらさ」を研究するために人環へ

修士課程では、心理学・精神医学・教育学で多用される「適応」という概念の形成史(古代ギリシアから古代ローマ、英国自然神学、ダーウィニズム、デューイまで)を調べて、修士論文にまとめた(日本哲学会『哲学』掲載)。

博士後期課程では、学内外のさまざまな先生方から計量分析や社会理論などの指導を受けつつ、社会状況と人間関係と幸福感の三層関係についての計量分析を行った(日本社会学会『社会学評論』掲載)。さらに、人々の幸福を支える「社会保障」の歴史上および政策決定過程上の規定要因と、「社会保障」の各政策が社会状況(自殺率・出生率・経済成長率など)に与えるマクロ効果について、歴史文献

調査と計量分析を行い、博士論文にまとめた(自殺予防の部分は日本社会学会『社会学評論』掲載。全体は書籍『子育て支援が日本を救う』として刊行し社会政策学会賞受賞)。

人環修了後は、同志社大学で准教授を2年間務め、立命館大学で准教授を2年間務めたのち、2016年度から人環・総人で准教授を務めている。研究テーマはやはり、中高生や総人生のころから変わらず、人々の「生き方」や「幸福」、そしてそれを支える「私的サポート」(友人関係・恋愛関係・家族関係など)や「公的サポート」(社会保障・教育など)であり、それらの社会的要因や社会的機能(効果)についてである。主に、大規模なアンケート調査などで量的データを得て、計量分析を行っている。

より「生きやすい」社会をつくるために

現在は、「幼少期に保育・幼児教育を受けることが、成人後の社会生活状況(学歴・雇用・所得・人間関係・幸福感など)にどのような影響を与えるのか」についての計量分析(因果推論)を試みている。

欧米と同様に日本でも、「どのような家庭に生まれたか」(親の学歴・所得・養育態度など)は、子どもの成人後の社会生活状況に対して、(偶然では説明しがたい確率で)影響を与えている。

日本での既存研究によれば、幼少期に親が低学歴や低所得だった場合は(つまり出身家庭が社会経済的に不利だった場合は)、親に心理的・経済的な余裕がないために、親の養育態度の質が低くなりやすく、子どもの健康や発達に困難が生じやすく、子どもはその後、低学歴になりやすく、成人後も、非正規雇用・低所得・相対的貧困・生活困窮状態になりやすく、健康感や幸福感も低くなりやすい。

このように、「生まれの不利」が「成人後の不利」に(偶然では説明しがたい確率で)つながっている現状は、現代日本社会に「機会の不平等」が存在していることを意味する。

私は、日本社会がより自由で納得できる「生きやすい社会」になるためにも、またより適材適所で「豊かな社会」になるためにも、「機会の不平等」はできるだけ減らした方がよいと考えている。そのためには、「生まれの不利」

が「成人後の不利」につながらないように、「不利な家庭に生まれた子どもたちへの支援」（健全な成育環境の保障）が必要だと考えている。

保育・幼児教育は「生まれの不利」を軽減できるか

その「不利な子どもたちへの支援」を、全国に届ける一つの方法として、私は「保育・幼児教育」に着目している。

日本では、3～5歳では、子どもたちの約9割が、保育所・幼稚園・認定こども園などの（公的基準を満たした）保育・幼児教育を受けているので、支援はかなり行き届いている（なおその公的基準が先進諸国のなかでは低い方であるという問題はあり、その改善にも何らかの形で貢献したい）。

他方で、0～2歳では、子どもたちの約3割（2歳では約5割）が、保育所・認定こども園などの保育・幼児教育を受けている（欧米先進諸国でも0～2歳の保育・幼児教育参加率は2～6割ほどだ）。0～2歳向けの保育・幼児教育はまだ拡大の余地があるわけだが、どのように拡大させるべきだろうか？ それとも逆に縮小させるべきだろうか？

それを判断するには、「日本の0～2歳の子どもたちは、保育・幼児教育を受けると、成人後の社会生活状況にどんな影響があるのか」を解明する必要がある。しかしそれを解明する研究はこれまで存在しなかった（国外でも、0～2歳向けの大規模で全ての所得階層に開かれた保育・幼児教育の長期因果効果については、学歴への効果を検証した研究があるのみだ）。

そこで私は、全国の成人2万人を対象にアンケート調査を行い、「0～2歳のときに保育所に通ったかどうか（認定こども園は当時存在しなかったので保育所についてのみ質問した）」「親の年齢・学歴」「出身家庭の家族構成」「出身地域」「幼少期から現在までのさまざまな経験」「現在の社会生活状況」などについての回答データを集めた。回答者は、都道府県・年齢層・性別の点で、日本社会の縮図になるように構成した。

因果効果の推定（因果推論）には、今回のような限定的なデータでも適用可能な「傾向スコア」という手法を使った。傾向スコアとは、ここでは「0～2歳のときに保育所に通った確率」のことであり、「出生年」と「出生時の親の年齢・学歴、家族構成、居住地域」と「（それらと『15歳時の家計状況』から推定した）出生時の家計状況」から推定した。

この傾向スコア（ただし非通園群では「通わない確率」）の逆数で各サンプルを重みづけすると、通園群と非通園群で傾向スコアの分布の形がほぼ等しくなる。その上で、「幼少期以降の経験」や「現在の社会経済状況」を、通園群と非通園群で比較すると、0～2歳時通園の因果効果が推定できる。

ただし、この推定の精度や頑健性を、既存研究で使われてきた4つの基準で確かめると、30代男性サンプルと30

代女性サンプルでのみ全基準をクリアできた。そのため、それらのサンプルでのみ、因果効果の推定を行った。

推定結果はいま論文にまとめているところだが、概略的にいえば、今回の結果には、国内外の「保育・幼児教育の効果」の膨大な既存研究の知見に、一致する部分もあれば、一致しない部分もあった。

一致する部分としては、「不利な家庭の子どもが保育・幼児教育に参加すると（参加しなかった場合に比べて）、その後、（知的能力や社会情緒的能力の向上を通じて）学歴が高まり、雇用が安定化し、個人所得が増え、将来の社会生活状況が有利家庭出身者の水準に近くなる」というものだ。

これはつまり、「保育・幼児教育が、『生まれの不利』を軽減し、『機会の不平等』を縮小させる」ということだが、これと同じことが、日本の「男性」では確認できた。つまり、日本の男性でも、不利な家庭に生まれた場合に、0～2歳のころに保育所に通うと（通わなかった場合に比べて）、学歴が高まり、雇用と家計が安定し、その結果として幸福感が高まり、「生まれの不利」が軽減されていた。

しかし日本の「女性」では、不利家庭出身の場合に0～2歳のころに保育所に通ったとしても、学歴には影響がなく、個人所得はむしろ減っていた（なお幸福感には影響がなかった）。個人所得が減った原因は、子どもを持つ確率が高まったことと、家事育児時間が増えたことにあった。

ここには、「女性の約半数が結婚や出産の後に無職を選択する」という日本の性別役割分業とジェンダーが反映されている。ただし、不利家庭出身の女性では、子どもを持つことや個人所得が減ること自体は、実は幸福感の上昇に寄与していた（なお有利家庭出身の女性では幸福感の低下に寄与）。にもかかわらず、保育所通園が総合的には幸福感の上昇につながらなかったのは、育児や就業抑制を通じた幸福感の上昇が、累積された誤差に埋もれてしまう程度の不確かなものに過ぎなかったからだと考えられる。

もう一つ、既存研究では見られなかった効果が、今回の分析では見出された。それは、不利家庭出身の女性では、0～2歳での保育所通園によって、成人後の「他者の不安に惑わされにくい心理特性」が強くなる（それによってこの心理特性が有利家庭出身の女性の水準に近づく）という効果だ。人環の月浦崇先生らの脳機能研究では、この心理特性が強いと、それを原因として一定の脳機能ネットワークが働き、幸福感が高まることが分かっている。そのため、この新たに見出された効果は、「保育・幼児教育が、学歴や所得ではなく心理特性の面で、日本の女性の『生まれの不利』を軽減している」可能性を示唆している。今後は、この可能性を精査していくことが、残された課題の一つだ。

総合的に見て、0～2歳向けの保育・幼児教育は、少なくとも不利な家庭の子どもたちには「生まれの不利」の軽減をもたらすようだ。今後も、さまざまな知見を活かしながら、「より生きやすい社会」の実現に貢献していきたい。

ふたつの原風景

研究の原動力と「裏テーマ」

中筋 朋 | Tomo NAKASUJI

中筋 朋 (なかすじ とも)

人間・環境学研究科共生文明学専攻、准教授

2002年京都大学文学部人文学科卒業、2006年パリ第3大学修士課程修了、2012年京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了。

博士(文学)。専門は演劇理論、フランス演劇。

些細な「おおごと」

今回「研究の原点と現在」というお題をいただき、「原点」について考えてみると、それはひたすら「自分のからだの不器用さ」に尽きるように思う。時代の流れをのりこなすどころか、自分のからだをのりこなすことができず、小さいころから、授業で指名されても固まってしまっても何も言えなくなるが多かった。自分にとってはおおごと、けれどもある意味ではとても視野のせまいこのテーマが、演劇を研究する際の視点を決定することになった。

竹内敏晴(1925-2009)という演劇人がいる。彼は幼いころから耳の病気を患い、同級生からも容赦なくからかわれてきた。まったく聞こえない時期もあったが、15歳のころに新薬の登場で片耳が聞こえるようになり、また書きことば中心の教育のためもあったのだろう、進学にはとくに支障なく旧制第一高等学校に入学した。しかしそこで寮に入り、はじめの自己紹介の段階で、竹内はあることに気づく。それは、みながユーモアもまじえながら軽やかに自

己紹介をしているそのことばを理解はできるのだが、自分のなかにそういう話しことばが養われていないことに対する気づきだった。一高に入ったわけだから、読み書きでの理解力は高かったはずだが、話しことば特有のゆるい軸でもって話すことができなかったのだ。そこから竹内は、なんとかこの話しことばを習得しようと躍起になる。就職活動のころになり、同級生が華々しい、あるいは堅実な就職先を見つけるころになっても、まずは自分の「ことば」を育てないといけない、それこそが人生のおおごとだと劇団めぐりをする。そして演出家となるが、竹内はその演出作品よりも「からだ」と「こころ」と「ことば」をめぐる探究で広く知られるようになった。うまく声の出せない生徒やコミュニケーションのうまくいっていない学級に行って相談にのったりワークを提案したりといった取り組みもつづけ、その過程で「呼びかけのレッスン」という、現在でも演劇のワークショップで用いられるワークも生まれた。

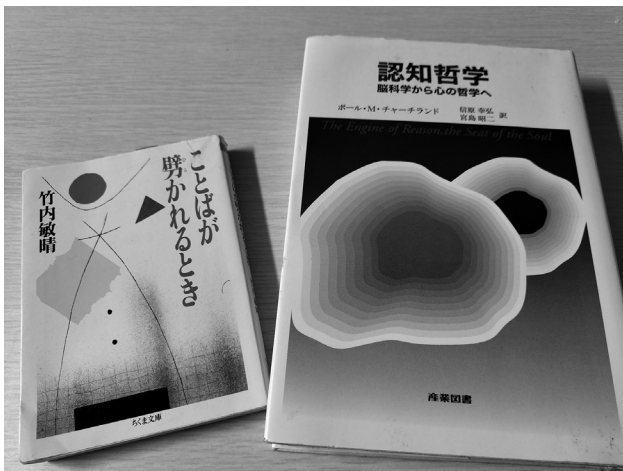


写真1 原点になった書籍

現在の直接の研究からするとどちらも分野外ですが、この2冊が提示してくれたテーマが現在にわたって続いています。というよりも、最近になってようやくこの原点との関わりが目に見えるものになりました。



写真2 『ことばのはじまり』舞台写真

演出助手として参加した舞台の写真です。フランス人の演出家と、日本人のダンサー・俳優・音楽家でもつくった舞台でした。台本はなく、演者ひとりひとりが、いくつかの名詞と基本動詞、感情を表す9つの語をもとにした独自の言語をつくることから稽古がはじまり、即興をもとに組み上げられた舞台です。ダンサーと俳優の「ニュートラル」の違いなど、いろいろな考えを刺激された稽古場でした。

これはある人へ話しかけようとする「こころ」の動きを、きちんと「からだ」全身をつかって「ことば」にのせるためのレッスンである。

私自身も「話しことば」あるいは「話す」ということ、つまり身体がともなうことに対して非常に不器用な性質だった。それをなんとかしたいと無意識に思っていたのか、身体のスミズミにまで意識がむけられている状態への憧れがつよく、ダンスを好んで見ていた。思えば、スポーツを見る機会があるとき、球技では試合を見ても勝ち負けすら見逃してしまいうけれども、陸上競技だけは見入ってしまうことがあったのも同じような理由かもしれない。つまり、「からだ」と「環境」以外の要素——ボールやグループでの戦略などといった要素が入りこむだけですでに複雑に感じてしまっていたのだろう。「見る」立場ですらこのように足踏みしてしまうのは不器用がすぎるが、だからこそ「おごと」として自分についてまわったのだろう。

この不器用さは、大学に入って「演技」というものをしてみようとしたときに、とてもわかりやすい形で顕在化した。「動きながら話す」ことができなかったのだ。からだを動かすことと、ことばを発すること、自分のなかでこの2つのあいだに非常に大きな溝があり、そのあいだの交通が不可能であることに気づかされた。

そもそも大学に入る直前、チャーチランドの『認知哲学』という本の翻訳が出たことをどこかで聞いた。高校生当時にどれくらい意味がわかっていたのかも思い出せないが、漠然と興味を抱いていた「思想」と「脳」——哲学と認知科学が融合する可能性に興味を覚えたことはたしかだ。これが「からだ」と「こころ」と「ことば」への興味といっしょに、私の興味の底にしっかりと錨を下ろした。

ニュートラルなのに個性的

そしてそれが研究の原動力としてずっとひそかにあったものだとすれば、もうひとつ、通底するテーマとなる研究の原風景がある。そもそも私は、卒業論文ではサミュエル・ベケットというアイルランドの作家の劇作品における「沈黙」と「間」について、日本とフランスそれぞれに提出した修士論文ではフランスのヴァレール・ノヴァリナという現代作家について、博士論文では19世紀末の小劇場運動について研究をすすめてきた。作家の名前を挙げるなら、これ以外にも、20世紀作家としてはマルグリット・デュラス、19世紀末の作家としてモーリス・メーテルランク、ジャン・ジュリアン、サン＝ポール＝ルー、ラシルドらの劇作品と演劇理論を研究し、現在はヴィリエ・ド・リラダンの『未来のイヴ』を探偵小説として読むところみをはじめている。と、研究の流れを追おうとすると固有名詞の洪水になってしまうくらい、短いあいだにばらばらの対象をあつかってきた。そしてそれは、私が作家を追うタイプよりもテーマを追うタイプだったからで、その「裏テーマ」ともいえるものが「ニュートラルなのに個性的」——言い換えるなら、「いちばんの内奥の個性はその人からも自由で

ある」という印象である。

これは、大学に入ってたくさんの役者やダンサーを舞台で、あるいはワークショップでみるようになって、いいなと思う演者ほど、個性的というよりもどこかニュートラルだと感じた経験に起因している。ダンサーの方がわかりやすいかもしれない。バレエであれコンテンポラリーダンスであれ、経験が浅いと、踊りの「粗」や「くせ」が突出して目についてしまう。それが気になって、全体が見えにくい。それに対して、ある程度の経験を経た人には、そういう「くせ」がまったくなく、全体がなめらかである。そして、そこにこそ現れてくる個性がある。変な力はぬけていて、そうすると各人の骨格や筋肉のつき方の「くせ」が、表面的なくせの邪魔なしにきれいに反映してくることがあるのだ。役者であればその人の姿勢の「くせ」。これが演じているときもそのまま出ているとノイズに感じてしまうことが多いのだが、それがなくなったときに出てくる立ち姿に、ニュートラルでありながらそのひとの「個」に直接ふれたような印象を受けることがあった。今になって考えると、研究の対象を舞台芸術としたのは、おそらくこのような「個」としてひとと出会い、やりとりをしたいという思いがあり、その学びを与えてくれるのが私にとって舞台芸術にまつわる場だったためだろう。この思いは今も変わらず、むずかしいことだけれど、表面に棘のようにとどこおっている感情のノイズをとりさったところにある情動を軸に、ひととの関わりをもちたいと思う。

そしてこのような「個」にむかうには、「からだ」と「こころ」と「ことば」のそれぞれが全身モードで、お互いにしっかりと結びついていなければならない。それが演者の身体を見ながら得た直観であり、その状態を起こすためにはどうすればよいのか、というのが研究を通じての問いとなった。

「ことばを食べる俳優」考から辿りついた演劇の転換点

このような問いのもと、興味をもったのがフランス演劇だった。哲学にすすみたいと思って第二外国語はドイツ語を選択していたが、もともと考えが抽象に偏りがちだったので、対象に具体性を求めて芸術研究へと方向転換をした。ドイツ文学ではなくフランス文学にしたのは、そのときちょうど出会ったダンサーや声のワークをしている方がたまたまフランス人だった偶然によるものである。そうした出会いのなかで、ヴァレール・ノヴァリナ(1942-)という劇作家・演出家を知った。ノヴァリナは、劇作品以外にも、散文詩のような形式で書かれた演劇理論の著作が多くある。とりわけおもしろかったのが、俳優の役割は「ことばをむしゃむしゃと咀嚼音を立てながら食べること」だという考えだった。「目の見えない観客がいたら、俳優が自分のからだを食べ出したのかと思うくらい大きな音を立てて食べる」とノヴァリナは言う。俳優はストーリーを見せるためのひとつの要素ではなく、自分の存在を危なくするまでに全身をつかってことばと関わり、その関わっている



写真3 調査のときお世話になるマイクロフィルムリーダー

19世紀演劇を研究するとき、まだ電子化されていない雑誌や新聞を閲覧するのに使います。写真はフランス国立図書館で撮らせてもらったもの。19世紀の週刊誌の2年間のすべての号を読みつけたときには、1日中この機械のまえにいました。

さまを観客に捧げる。この演劇観は、ことばに身体ごと関わるときに現れる「個」に注目する私にとってはとてもおもしろく、また本質的に感じられた。

演劇というと、アリストテレスのころから「いかに因果性を描くか」が重要だとされる。しかしながら、自分にとって興味があるのは、因果とは独立してある「個」の出現の瞬間だということがわかってくる。そして、演劇において「因果関係でつなぐストーリー」から「強度ある一瞬」へのシフトが起こったのは19世紀末ではないかという仮説をもとに、博士論文では、それまでの研究とは時代の異なる19世紀末の小劇場運動をあつかった。

現在の意味での「演出家」が生まれ、演技術が台詞まわしの術から身体術をとりこんでいくこの19世紀末、演劇にかかわった人々は、演者の「自意識」を過剰なまでに拒否した。俳優の意識を拒否するため、「俳優は人間であってはならない」という議論まで出たほどである。それこそ自意識過剰なまでに彼らが意識を意識したのは、それが、無意識への深い興味と、無意識を意識的に獲得できる逆説的な技術の希求に裏打ちされていたからだというのが、拙著『フランス演劇からみるボディワークの萌芽——「演技」から「表現」へ』（2015年）の主題になった。

19世紀末は、実験心理学の黎明期でもある。われわれが感覚に大きく規定されていること、そして自分では意識できない内面こそがわれわれの行動を決めていることがだんだんとわかり、この「自分ではアクセスできない自分の内面」は芸術のテーマにもなっていく。舞台芸術において私が特異なものだと感じて探究してきたニュートラルな「個」の出現は、まさにそうした意識の埒外にある内面性の舞台における実現だったのである。そしてさらに調べるうちに、実験心理学から認知科学が展開していく過程において、のちにアフォーダンス理論として20世紀後半になっ



写真4 19世紀の劇場のプログラム

これは現在ではマイクロフィルムに入っていますが、そのまえには貴重書類のコーナーにあった19世紀フランスの「芸術劇場」という劇団の公演のプログラムです。マイクロフィルムにもなっていない貴重資料は、わざわざ特別閲覧室というところを予約して閲覧し、司書さんといっしょに写真をとります。

てから回帰してくるような環境をひっくりめた身体観に対する感受性がはやくも養われ、当時の芸術作品に刻印される形で残されていることに気づいた。それを明らかにすることが現在の研究の課題だ。——つまり、「裏テーマ」の大詰めである。

また同時に興味深いのは、19世紀という時代が、幻想小説とファンタジーの急激な隆盛につづいて、探偵小説やSF小説といった、現在でもエンターテインメントの中心になっているようなジャンルが次々誕生した世紀だということである。ものがたりの横溢ともいえるこの状況は、古代ギリシアにおいて、神話ベースの思想がより抽象的な議論になっていく過程が「ミュートスからロゴスへ」と称されることを思い起こさせる。つまり、19世紀末は神話思考が回帰する時代なのではないか。われわれが容易にはアプローチできない自分のなかのニュートラルな「個」の声を聞きとるためには、ものがたりの思考への回帰が必要だったのではないか。これがここ数年あらたな「裏テーマ」になりつつある。ものがたりの形式だからこそ表現できるもの——それをものがたりが喚起する表面的な感情の波のむこうがわから掬いとること、それが現在のわたしの「からだ」と「こころ」と「ことば」の課題である。

自然の力を垣間見る

廣戸 聡 | Satoru HIROTO

廣戸 聡 (ひろと さとる)

人間・環境学研究科相関環境学専攻、准教授

1981年生まれ、鳥根県生まれ。京都大学大学院理学研究科博士後期課程修了。博士(理学)。専門は有機構造化学、有機合成化学。

今回、私の研究の原点ということで執筆の機会をいただいた。研究というより研究者を志したきっかけというものはいくつか思い当たる。一つはなんと言っても実験だろう。幼少の頃より実験が大好きだった。今はもうないそうだが、学研の雑誌が毎月送られてきて、それにちょっとした実験みたいな記事が書いてあって、やれそうなことはやってみたものである。例えば、食紅を入れた水を吸わせると白いカーネーションを赤くできる、と書いてあったので実際にやってみた。結果は、花びらの筋が赤くなっておどろおどろしい花になってしまったことを覚えている。他にもエナメル線を巻いてモーターを作ったり、アルミ箔を塩酸に入れて溶かしたりなど、今考えるとよく家庭でできたな、という実験もやっていた。のちのち、高校の化学の授業でイオン化傾向の話聞いたときに、あれはそうだったのだ、と理解した。前述のカーネーションの件もそうだが、本に書いてあることや人に聞いたことをとりあえずやってみて、自分の体験として理解するということが好きであった。

有機化学を志したきっかけ

私は本学の理学部を卒業している。大学受験の際、理学部と工学部で迷った。色々悩んだ末、理学部を受験し合格した。この選択は果たして正解であったかと思う。理学部は総合人間学部と同じく、自然科学系というしぼりはあるものの、講義選択の自由度が高い学部であった。実のところ、入学当初は物理をやりたいと思っていたし、得意であった。そこで、物理の講義と次に好きであった化学の講義ばかりを受講した。勿論実験好きだったので、全学共通教育科目の実験講義はもれなく履修した。その際、化学実験の面白さに気付いた。特に、薬品と薬品をガラス器具で混ぜる操作は、さながら漫画で見かけた〇〇博士のようであったし、自分で作ったものが実際に手にとれるのが嬉しかった。無色の試薬同士を混ぜると色がつくことも不思議で楽しかった。これが今の「有機色素の研究」の原点に繋がっていると思う。結局卒業研究は有機化学を選択した。所属した研究室はポルフィリンという有機色素を扱う研究室だった。ポルフィリンは植物の葉っぱに含まれる光合成を担う重要な色素クロロフィルや、血液中の赤血球に含まれる色素であるヘム鉄の基本骨格であり、紫色をした綺麗な

化合物である。その合成では、無色と無色の試薬を混ぜてできた真っ黒の溶液に黄色の試薬を混ぜるというものである。この真っ黒をシリカゲルという白色の固体の詰まったカラムに通すと紫色の綺麗な液体が出てくる。これが不思議で魅了された。それだけでなく、研究室では作ったものがどんな性質を示すかを重視していた。どのような光を吸収するか、電圧や磁場を加えるとどう性質が変化するかなどの測定・解析も行った。このような物理的な要素があったところも選んだ理由だった。研究室では有機合成だけでなく、光化学、磁性、電気化学、量子力学計算、遷移金属触媒、錯体化学など色々な知識を習得する必要がある。大変ではあったが、色々な分野を学ぶことができ、現在の研究を考える上での基礎となっている。

有機化学という学問

私の専門は有機化学である。化学は英語で Chemistry と呼ぶが、この単語は知っての通り Alchemy (錬金術) に由来する。Alchemy は他の物質から金を作り出す術だ。つまり、物を化けさせて別の価値のあるものを作り出す学問が「化」学とされている。化け学とは良く言ったもので、日本語の化学という単語はかの宇田川榕菴が付けた名前である。宇田川榕菴は他にも「物質」「吸着」「溶解」「成分」など日常で使われているような単語も産み出している。話がそれだが、化学の本質はものづくりである。私は研究生生活を通してさらに、化学はものづくりを通して自然を理解する学問と認識を改めた。自然は凄い。人間の頭で考えたことを容易に超えてくる結果を出してくれる。最初に感じたのは、私が博士後期課程で行ったテーマに取り組んでいたときだった。コロールという、シアノバクテリアに含まれる光合成に重要な色素の主要な骨格だけを人工的に作り出したものを扱っていた。元々、反芳香族性という、安定な物質には存在しない性質をもつ分子を創りだそうとしていたが、分子は創れたものの望んだ結果は得られなかった。しかし、ビラジカル性という希有な性質を示すことが分かった。当時、ビラジカル性の研究は1報しかなく、本質的な性質の解明や何に使えるかなど全く分かっていなかった。その後、研究が進み、有機構造化学の一大分野として発展している。今でもこの研究は、この化学の礎となる研

究の一つとして引用されている。黎明期にこのような研究を行えたことは幸運であったし、発見できたことはとても嬉しかった。こんな物質が存在することを知覚できたことで、改めて自然の凄さを認識した。まだまだ、想像しえないような性質をもつ物質が自然には存在すると思うとワクワクしてやまない。

分子の声

学生時代の恩師で一番記憶に残っている言葉は「分子の声を聞きなさい」だった。おそらく恩師は、分子を作っただけにしておかず、色々な測定をして結果を解析してその分子の価値・意義をしっかりと見出しなさい、ということをおっしゃったのだと思う。分子は1 nm 程度 (1×10^{-9} m 以下!) の炭素や水素などで作られた意志のない物で、実際に声が聞こえるわけではない。しかし、私は実際に何度か分子の声を聞いたことがある。博士課程修了後、私は名古屋大学工学研究科の助教に着任した。当時、螺旋構造で窒素原子を含むアザヘリセンという、これまで合成が不可能であった分子を簡単に合成できる方法を見出し、この方法を使って他にどのような物質が創れるかを試行錯誤していた。その過程で出来た分子の一つがとても気になっていた。性質自体はそれほど面白くなく、分子自体もそれほど新しいものでもなかった。構造を眺めていたとき、ぼんやりと新しい分子骨格が浮かび上がってきた。分子が自分はこれに成れるよ! と言っているみたいだった。しかしして実際、その分子は世界初のボウル型分子「アザバッキーボウル」と成り、世界的に高い評価を受ける研究となった。この分子はこれまで世界中の研究者が合成に挑戦し、失敗してきた分子だった。前述の分子から作れる保証は全く無かった。まさに分子の声を聞いて、研究を進めた結果だと思う。ここまで書くとは何か怪しい宗教を勧めているみたいだが、分子の声とはいわゆる直感である。偶然出てきた結果について、それが金であるか石であるかを見抜く力である。この直感力を磨くことこそ、研究をする上で一番重要ではないかと思っている。さらに直感力を磨き、自然が見せてくる色々な面白いことを、これからも逃すことなく捕まえていきたい。

現在とこれから

私は現在、有機分子を使ったナノ部品開発というテーマを掲げて研究を進めている。2018年に本研究科に准教授として着任して、独立した研究室をもった。研究室は同年にご退職された田村類先生の部屋を引き継がせていただいた。引き継ぎの際、先生からは「腰を落ち着けた研究をなさい」と言われた。有機ELで著名な先生が講演で「深く考える期間があるのは重要」と言っていたのも思い出した。そこで着任してからしばらく、研究テーマについて思慮を巡らせた。環境と名がつく研究科に来たからには、環境に関係することがやりたい。以前、アメリカで半年間研究させていただいた際、日本では日本でしかやれない研究

をやりたいと思った。いくつかそのような経験が頭を駆け巡って、今のテーマに行き着いた。振動エネルギーを分子の動きに変え、電気エネルギーに変えられないか。日本は地震大国である。では、振動発電は日本でやるべきではないか、と思いついた。実際、振動発電は屋内発電としては太陽光発電を凌駕しつつある。しかし、有機材料にはない。色々調べたところ、機構を細かくすればするほど効率の良い発電デバイスができるらしい。であれば、物質の最小単位である分子で、最高の振動発電が作れるのではないかと考えた。振動発電の原理の一つとして電磁誘導がある。すなわち、微小なサイズのソレノイドを並べて振動で磁石を動かすというものである。しかし、このソレノイドが有機化学ではできていない。有機分子の色々な合成方法が長い歴史において、開発されてきたが、万能ではない。特にコイルのように「曲がった」構造をもつ分子は最難関の一つである。光ったり、電気を通したりする分子は通常平面構造をもつ。これを曲げると骨格に歪みが生まれる。その歪みを超えるエネルギーを与えなければ曲げることはできない。とても硬い鉄板を曲げるようなイメージである。幸運なことに私は、前章に書いたようにアザヘリセンという一巻きのコイルに相当する分子を簡単に作れる方法を見つけていた。これを繋げる、またはこの方法を応用することで、世界初のコイルが作れるのではないかと考えた。コイルが出来れば、モーターやバネになる。そこで、広いテーマとして「分子による部品開発」を設定した。研究の途中、一巻きのコイルがバネのように伸縮すると光吸収波長が変わることを見出した。何らかの刺激で伸縮させることができれば、分子の性質を変えられる可能性を示したと言える。またこの螺旋分子が固体中で自発分極という特殊な並び方をする条件も見出した。こうして少しずつ分子の扱い方が分かってきた。もう少し分子と「対話」を続けることによって目的を達成したい。

おわりに

結局のところ、私の研究は自分の思うまま、面白いと思ったことをやってきた。思い返すと自分で考えたことから離れた、偶然見つかった結果こそ面白く、流されるまま研究を進めてきた。これは私が何も考えていないわけではなく、自然が織りなす壮大な事象を、有機合成で作った分子というデバイスを通して、その囁きを聞く姿勢を培った結果、自分なりに研究を発展させていった結果と思っている。この人間・環境学研究科は他の研究科、ともすれば他大学より学生に教える機会が多い。その分、化学のベーシックな部分に触れる機会が多く、教えることによって新たな気づきもあった。このベーシックな部分を究めれば究めるほど、分子の声を聞く力が増していくと信じている。これからも、どのような声が聞こえるか、どんな自然の力を垣間見ることが出来るかを楽しみにしつつ、研究を続けている。さあ、また実験を始めよう。

2020年ロシア科学アカデミー・モスクワ大学 Nikolay M. Emanuel メダルを受賞して

田村 類 | Rui TAMURA

田村 類 (たむら るい)
京都大学名誉教授 (人間・環境学研究科)

2020年10月1日に、モスクワ大学より N. M. Emanuel メダルを受賞しましたので報告いたします。尚、授賞式で受賞講演を行う予定でしたが COVID-19 パンデミックのため、式と講演は延期となり、受賞決定の公式文書が京大総長宛に、メダルと賞状の写真が私に送られてきました。



2019年12月末に突然、この賞の副選考委員長のモスクワ大学教授から、2020年の標記メダル受賞候補者の一人として私が推薦されたので、履歴書・業績リスト・研究内容の概要を至急送るようにとの連絡がありました。この賞の詳細を知らずに資料を作成して送ったところ、3月に入ってから受賞が決まったとの連絡がありました。先方に伺ったところ、このメダルはロシア科学アカデミー・モスクワ大学の N. M. Emanuel Institute of Biochemical

Physics を創設した著名な科学者 Nikolay M. Emanuel (1915-1984) を顕彰して 2007 年に創立され、毎年、物理化学と生化学の基礎研究分野で功績のあったロシア人研究者 2 名と外国人研究者 2 名にメダルを授与するもので、日本人の受賞は今回が初めてとのことでした。同時受賞の外国人研究者は MRI・EPR 画像診断研究者の Valery V. Khramtsov 教授 (米国ウエストバージニア大学)、ロシア人受賞者は石油化学研究者の Eduard A. Karakhanov 教授 (モスクワ大学) とインフォケミストリーの若手研究者の Ekaterina V. Skorb 教授 (サンクトペテルブルグ ITMO 大学) でした。

今回受賞対象となった私の研究題目は “Research on Chemical Complexity Phenomena” (複雑系化学現象に関する研究) で、次の 2 件の内容を含んでいます。(1) Discovery and Mechanism of Preferential Enrichment; A Chiral Symmetry-Breaking Spontaneous Enantiomeric Resolution Phenomenon Observed upon Recrystallization of Racemic Organic Crystals or Dimorphic Cocrystals under Nonequilibrium Conditions at High Supersaturation (優先富化現象の発見と機構解明)。(2) Discovery of Superparamagnetic Organic Radical Soft Materials and Application to Theranostic Metal-Free Magnetic Nanomedicine (超常磁性有機ラジカルソフトマテリアルの発見と画像診断・治療用メタルフリーナノ医薬への応用)。

20 世紀前半の「相対性理論」と「量子力学」に続く新たな科学のパラダイムシフト (科学革命) として、20 世紀後半には「複雑系科学」の黎明期を迎えました。ある「非平衡秩序 (カオス) 状態」から別の非平衡秩序状態への「不可逆な相転移」が起こると、これに伴って様々な「対称性の破れ」が観察されます。今日では、自然科学や社会科学の各分野で見られる多くの非平衡・非線形事象が、この散逸構造の「相転移と対称性の破れ」を鍵プロセスとする「複雑系科学現象」として理解されています。

私の研究グループ [以下、各研究を担当した博士学位取得者の氏名 (敬称略) を記す] は、「複雑系化学現象の発見とそのメカニズムの解明」を研究テーマとしてきました。

〈優先富化現象の発見と機構説明〉

1993年に製薬会社の研究員（大学時代の同級生）との共同研究で、ある有機医薬化合物のラセミ体（等モル量の右手型キラル分子と左手型キラル分子を成分とする）結晶が単純な再結晶により革新的な自然光学分割現象（両キラル分子が自然に分離するキラル対称性の破れ）〔優先富化現象（Preferential Enrichment）と命名〕を起こすことを偶然発見しました。しかし、1848年のルイ・パスツールによるキラル有機結晶の発見以来約150年間、「ラセミ体有機結晶の再結晶による光学分割は不可能」と考えられていました。そのため、当初は投稿した速報論文にたいして、「こんなことは起こりえない！！」との複数の審査員の意見により不採択となりました。この現象は誰が行っても再現性100%で起こりましたので、論文より先に国際会議の口頭発表を可能な限り行って、実験結果が嘘ではないことを主張することにしました。その結果、徐々に世界の有機結晶化学者に受け入れられるようになりました。その後、この現象が「過飽和溶液中からの結晶化の過程で起こる相転移が引き金となってキラル対称性の破れが発現する典型的な複雑系現象」であること、およびこの現象の一般性を証明することができました（高橋弘樹・藤本大輔・堀口雅弘・岩間世界・内田幸明）。さらに、今日ではラセミ体の α -アミノ酸類についてもこの現象を適用できることが明らかになり（岩間世界）、「生命のキラリティーの起源」を説明しうる現象として新たな局面を迎えています。

〈超常磁性有機ラジカルソフトマテリアルの発見と画像診断・治療用メタルフリーナノ医薬への応用〉

2003年から、身近な機能性物質である液晶を外部刺激に対して敏感に感応する複雑系の散逸構造と捉えて、外部磁場および電場応答性を示すメタルフリー磁性ソフトマテリアルの開発を目指しました。その結果、それまで未開拓

であった分子中央部にキラルな環状ラジカル構造を有する安定なメタルフリー有機常磁性液晶物質を初めて合成し、電気極性と磁気極性を併せ持つキラル液晶の創製に成功しました（伊熊直彦・下野智史）。2006年にこれらの物質が液晶相で強誘電性を示すことを（伊熊直彦・内田幸明）、2008年にはこれらが超常磁性（常磁性スピンの部分的強磁性ドメインの形成）を示すことを初めて明らかにしました（内田幸明）。2012年にはこの超常磁性現象を「正の磁気液晶効果（Positive Magneto-LC Effect）」と命名しました（内田幸明・鈴木克明）。さらに2013年にはこの強誘電性と超常磁性を併せ持つ物質が、液晶状態でしかも高温で「磁気電気効果（Magneto-Electric Effect）」を示すことを初めて実証しました（鈴木克明・能田洋平）。ついで、構造の異なる有機ラジカル液晶物質を次々と合成して「正の磁気液晶効果」の一般性を証明し（内田幸明・鈴木克明・武元佑紗）、そのメカニズムを提唱しました（内田幸明）。最近では、これらの磁性液晶に見られた超常磁性の発現をエマルション構造へと拡張し（内田幸明）、磁気共鳴画像（MRI）法により追跡可能で、かつ抗ガン剤や蛍光物質を内包させた安定なメタルフリー磁性ナノエマルションの開発に至りました（名倉康太）。

1991年にM. Buivydas（リトアニア、ヴィルニウス大学）やロシア人研究者（ランダウ理論物理研究所）による理論計算により、磁性液晶が「強磁性的性質」を発現する可能性が示されました。これを受けて、20世紀末にはロシアと欧州の研究者達により遷移金属錯体液晶の磁性研究が活発に行われましたが、期待された成果は得られませんでした。今回の私たちの有機ラジカル液晶が示す「正の磁気液晶効果」と「磁気電気効果」の発見は、彼らが提唱した理論を支持する結果となり、今回の受賞につながったと拝察されます。最後に、本研究の遂行にあたりご協力頂いた、京大人間・環境学研究科・地球環境学堂・理学研究科・医学研究科の教職員と院生の皆様に厚く御礼申し上げます。

2022 年は国連国際ガラス年！

田部 勢津久 | Setsuhisa TANABE

田部 勢津久 (たなべ せつひさ)
人間・環境学研究所 相関環境学専攻 教授

今日我々の居住・建築・通信を含む日常生活、社会活動、科学技術発展の中で、ガラス材料は様々な形で必要不可欠な役割を果たしています。歴史的事実の一例として、例えばレンズ、望遠鏡の発明はガリレイ、コペルニクス、ケプラーによる天体運動の法則発見につながり、ニュートンによる古典力学体系の確立へ至りました。「光学」の著者でもある彼の色彩論の確立にはガラスプリズムが貢献しています。コーニング社によるバルブの大量生産技術開発があって、エジソンは白熱電球の発明ビジネス成功者としての名声を得ました。ガラス実験器具の開発生産があって、化学・生物学は著しい進歩を遂げました。1960年代にカオによる光通信の可能性提唱後、世界的競争の末実現したシリカガラスの高純度化と低損失光ファイバの開発が、世界中の大容量コンテンツに瞬時にアクセスできる今日の光ファイバ情報化社会の実現に至りました。長辺3mを超える大型ガラス基板や薄型化学強化ガラスの開発は、大型ディスプレイや軽量小型モバイル機器をも可能にし、光ファイバ通信の恩恵を感じることはなくとも、殆どの方は毎日視聴、じかに触れている事でしょう。小柴教授の注文に答えた浜松ホトニクスの豊馬社長の心意気とガラス職人の挑戦がなければ、お化けサイズの光電子倍增管の実現とカミオカンデでのニュートリノの観測、2002年のノーベル物理学賞、2015年梶田教授の受賞もなかったことでしょう。以上はガラスの関わる科学技術小話のほんの一部に過ぎません。ワクチン薬用アンプルや食器、飲料容器としての優れた耐久性と安全性、酒器の場合は酒類に応じて設計されたガラス形状が果たす役割、いずれも人類の健康や文化的生活を豊かにしてくれています（例えばブランディ、夏の冷酒を他の素材や別酒用のガラスで楽しめますか？）。いつから人類はこの材料を手に入れたのでしょうか？ その起源は発掘考古学の進展により、エジプト文明以前、メソポタミア起源というのが定説になっているようです。4千年を超える世界史の中で工芸技術の伝承と拡散があり、近代以降はスピードアップした生産技術、品質向上と新たな用途の出現も相まって、ガラスは進化しています。用途

に応じてその化学組成も多種多様、周期表構成元素の中で使われていないものの方が少ないです。

去る2021年5月18日、米ニューヨークの国連本部で開催された国連総会第66会議において、「2022年を国際ガラス年 (International Year of Glass, IYOG) とする」議題136が正式採択されました。世界的なCOVID-19パンデミックの中、紆余曲折があり、当初予定よりかなり遅れました。関係者の様々な尽力・貢献がありましたが、とりわけ国際ガラス委員会 (ICG) の Alicia Duran 会長 (スペイン研究評議会教授) による筆舌に尽くせない様々な工作尽力があって、国連総会での議案提出と正式採択に至りました。筆者は2013年から2020年10月までICG運営理事 (その後引き続きIYOG国際運営委員会委員) を務めていた (いる) ため、身近にこの運動に関わり、「国際ガラス年」実現に至る経緯を詳しく知る立場にありました。

1959年に始まる国連による国際年ですが、近年でかつ科学に関わる分野では2019年の国際周期表年 (International Year of Periodic Table, IYPT)、2015年の国際光年 (International Year of Light and Light-based Technologies, IYL) があり、各年において、世界中で様々な祝賀行事と啓蒙活動が進められました。(ゴダイゴの歌「ビューティフルネーム」が流行った国際児童年をご記憶の方もいるでしょうか?)

歴史上、新材料の開発は文明を変えたという事実がありますが、石器、青銅器、鉄器時代になぞらえて、初めて「ガラス時代の到来」という宣言¹を行ったのは2014年頃の米国コーニング社、奇しくも国際光年IYL2015の前年です。翌2015年にはThe American Ceramic Society (ACerS) の学会論文誌である *International Journal of Applied Glass Science* 誌において、IYL2015特集号「Glass and Light」が編集出版され²、光科学技術の発展におけるガラス材料の重要性を再認識する企画となりました。依頼されて総説を寄稿した筆者自身も当時はまだ国際ガラス年という概念すら想定していませんでした。その翌年同誌2016年の特集号「The Glass Age (ガラス時代)」が編集され、D.L.

1 “Welcome to the Glass Age, Presented by Corning”, (2014) <https://www.youtube.com/watch?v=bbX9KOpDJME>

2 L. D. Pye, M. Affatigato, “Editor’s Note”, *Int. J. Appl. Glass Sci.* 6[4], (2015) 303.

Morseらによる「Welcome to the Glass Age」と題した巻頭論文³や編集長 Pye 氏の編集巻頭言「ガラス時代の到来を確信」という力強い名文も掲載されています⁴。

2018年9月には日本主催の ICG 年会@パシフィコ横浜（参加者 800 名）のうちに Choudhary 会長から IYOG 実現を目指すこと、目標はドイツガラス学会 100 周年（マイルストーンの一つ）でもあり、3年に一度の ICG 大会のベルリン開催予定である 2022 年とする、との決意表明がなされ、任期交替で会長に就任した Duran 氏に、ICG 主導で運動を展開する意志が引き継がれました。Duran 会長は「国際ガラス年 2022」実現のために米国国連代表部補佐官、ガラス芸術協会、国際ガラス美術館協会や様々な方面にアウトリーチ活動を精力的に展開、協力確保を行いました。そして、世界中で賛同書の集約が行われ、最終的には 81 カ国から 1640 の賛同書が集められ、日本国内でも日本セラミックス協会ガラス部会の協力により、全国のガラス関係機関、企業、美術館等から多くの賛同書を集めることができました。国際的にこの活動を発展させるために、Duran 氏を委員長とする IYOG 国際運営委員会が結成され、日本からは筆者と井上東大教授が委員として参画しています。（2020 年秋には、同日本実行委員会も結成、筆者が委員長を仰せつかりました。）

国連スペイン大使の助言を受け、IYOG 国際運営委員会は国連決議案の文書作成と国連総会で行う（当初 2020 年 11 月初旬予定）プレゼンの準備を行いました。世界的パンデミックのため、まずは Youtube によるバーチャル形式で Santos 国連大使による序章演説から始まる約 30 分の提案ビデオ⁵が 12 月 3 日世界中に公開されました。このプレゼンでは IYOG プロジェクトの計画中の活動や開発コンセプト、パートナー団体や貢献人物の紹介、国連のアジェンダ 2030（持続可能な発展のための目標、Sustainable Development Goals, SDGs）との関連性などが説明されており、ガラス材料の環境適合性や重要性を訴える説得力のある出来映えとなっていますので是非ご覧下さい⁶。

2021 年を迎え、なおも決議の総会開催が何回も遅れましたが、4 月中にまとめた決議案につきいくつかの国連加盟国の代表と交渉がなされ、5 月 11 日に 19 ヶ国による事

前合議に。外務省を通じてお願いした甲斐があり、我が日本国も共同提案国の一つとして加わっています。NY 本部での正式な国連演説は 5 月 18 日の第 66 総会でスペイン代表 Alonso 大使によりなされ、「2022 年を IYOG とする議案」は無事採択されました。その様子は国連 HP でも実況中継されました（現在も視聴可能⁷）。日本時間翌 19 日午前 1 時頃でした。ところで、本件と直接関係はないのですが、今回本誌細見編集委員長から寄稿依頼を頂いた当初の理由は国際年ではなく、筆者が ACerS 学会のフェロー称号授与の知らせを（このちょうど翌週に）受けたことでした。Duran 会長も同時受賞（全く偶然です）で、受賞者ウェブ公開翌日に「Setsu、互いにおめでとう」というメールを彼女から頂き、2 週連続で祝意を交わしたこととなります。

個人の受賞はさて置き、国際ガラス年 2022 決定という記念すべき慶事に対する祝意を読者である皆様はもちろん、ガラスに関わる全ての皆様と共に分かち合いたいと思います。同時に本年が、多くの方々にもガラスへの認識を深め、学びまた楽しんで頂ける、実りある国際年になることを願ってやみません。

なお、本年には既に数え切れない数の記念行事が計画されていますが、12 月の国際閉会式の主催は日本が担当することが正式決定されており、東京で開催予定です。

実は日本は世界に誇るガラス科学技術大国でもあり、国際ガラス委員会や材料関係国際学会等を通じて、ガラスの発展にも貢献しています。欧州各地の教会のステンドグラスやヴェネチアガラスに比べると歴史こそ浅いですが、小樽や長浜など工芸ガラスの活動も日本各地で盛んに行われており、ガラス美術館、工房もたくさんあります。

数多の国内開催イベントの運営には吉田智氏（AGC：旭硝子）が IYOG 日本実行委員会事務局長として活躍⁸、彼は京都大学工学部出身ですが、ガラスの破壊強度に関する研究で、当人間・環境学研究科で論文博士号を取得しています。国際ガラス年 2022 日本実行委員会約 30 名の委員のうちの委員長と事務局長の両名が人環関係者であることをご記憶頂ければ幸いです。

3 D. L. Morse, J. W. Evanston, "Welcome to the Glass Age", *Int. J. Appl. Glass Sci.* 7[4], (2016) 409.

4 L. D. Pye, "Arrival of Glass Age Affirmed", *ibid.* 7[4], (2016) 407.

5 A. Duran, "Toward a United Nations Declaration of 2022 as The International Year of Glass", *Am. Ceram. Soc. Bull.* 98[7], (2019) 3.

6 "Worldwide presentation of the United Nations International Year of Glass 2022", <https://www.youtube.com/watch?v=rWNZawSJck0> (2021) (日本語字幕：相関環境学専攻 D3 北川裕貴君作成)

7 "General Assembly declares 2022 International Year of Glass", *UN Audiovisual Library*, (2022) <https://www.unmultimedia.org/avlibrary/asset/2620/2620241/>

8 国際ガラス年 2022 日本実行委員会 HP : <http://iyog2022.jp>

〈編集後記〉

▶本誌の編集に初めて関わった。原稿依頼を通じて、受賞した現役生や院生の方々、著書を出した方々とささやかなやり取りをさせていただいた。研究調査、資料収集のためのアイルランドへの渡航ができないまま2年以上たち、暗澹とした気持ちに襲われることもあるが、今できることを精一杯やるしかないことを、目覚ましい成果をあげられた方々の姿に感じることができた。直接対面の機会が激減した中での貴重な体験、バッテ先生と岡先生との座談会の模様が今も鮮明によみがえる。今回はとりわけインドについて語っていただきたいという私たちの願いをかなえてくださったバッテ先生、取りまとめの労を取ってくださった岡先生に深く感謝したい。インターネットを介しての交流、情報収集の便利さも日々実感している。「行かなくても何とかできるではないか」という気持ちを持たねばならない反面、「移動」の意味と意義を問い直すことにもなり、「直接行く、会う」という体験は何かロマンチックなものにさえなった。昔はコロナ禍以上の危険にもめげず繰り返し旅に駆られてきた人たちがいた。次に私が海外渡航に踏み出せるとき、世界はどう変わっているのだろうか。期待と不安が入り混じる。空を行く飛行機をじっと見つめてしまう。たとえ以前と同じアイルランドが待っていないのだとしても、きっといつかまた私は旅立つだろう。(池田)

▶今年度京大に教員として務め始めましたが、それと同時に人環フォーラムの編集にも加えていただきました。編集会議では、細見先生を始めとしたベテランの諸先生を中心に、それぞれが忙しい中、本誌をいいものに仕上げようとしている姿勢には驚嘆することしばしばで、ご協力くださった先生方や書評執筆者の方々も、お忙しい中ご寄稿くださっており頭が下がる思いです。自分も働き過ぎには注意しつつ、前を向いてその時その時できるだけことをやっついこうと改めて肝に銘じました。(小林)

▶新しい職場になり、「よくわからないからとりあえず様子を見る」モードのまま年を越してしまいましたが、編集委員会には新鮮な気持ちで参加していました。前の職場では国際交流関係の委員ばかり担当していましたので、いろいろと目新しく、なにより

「刊行」という明確な「ゴール」があるところがとても良いと思いました。生活でも仕事でも、なかなかないことなので……。つい先日も、子どもの剣道の試合がコロナ感染拡大のために流れたと連絡がありました。学年が変わる前の最後の団体戦で、「ゴール」ともいえる試合。まだ「ゴール」と心の距離が取れていない子どもたちにとって、目標が突然消えたり現れたりするコロナ禍の現実はなかなか慣れることができないものなのでしょう。それに、こんな現実にもわかりよく慣れてしまったら、その方があとあと困る気もします。折り合う道を見つけることの難しさを感じつつ、来年度は「中止」「延期」が少なくなることを願っています。(菅)

▶ここ暫く、町中で救急車をよく見かけるようになりました。屋内にいても、サイレンの音で気がつきます。そのせいか、最近は救急車を見かけると、どのような人が搬送されているのだろうかと思いを巡らせるようになりました。ヘリコプターが飛ぶ音も頻繁に聞こえるようになりました。何か物騒な世の中になってきたのでしょうか。とても速いスピードで世界が変わってきているような気がしています。そのような中で、平和な日々を過ごすことができていることに感謝したいと思います。(土屋)

▶自ら命を絶つまでに絶望の極みに追い詰められた彼が、大阪梅田のクリニックで、25名もの人々を道連れにしたのは、「希望」を抱いて生きる彼らに対する嫉妬・憎しみのゆえか、それとも、救いの手を差し伸べる者もなく孤独のうちに捨て置かれていた彼が、せめてその生の最期の時だけでも他者との共同性のうちにありたかったのか。孤独のなかで彼があげていた無言の叫びを聴き取る者がいれば、25の命が奪われることはなかっただろう。中世イスラームの神秘主義者ハッラージュはいう——地獄とは人が苦しんでいるところのことではない。人が苦しんでいるのを、誰も見ようともしないところが、真の地獄なのだ。(岡)

▶『総人・人環フォーラム』も40号に到達しました。とくにそのことに関わる特集はしていませんが、次号で連載「人間・環境学への招待」もいったん完結します。今後ともご協力をお願いいたします。(細見)

編集委員会 委員長 細見和之
副委員長 岡 真理
委員 池田寛之・小林哲也
菅 利恵・土屋 徹

総人・人環フォーラム 第40号

令和4年2月26日発行

編集 『総人・人環フォーラム』編集委員会
表紙デザイン 倉本修装幀事務所
発行 京都大学大学院人間・環境学研究科
〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町
FAX 075-753-7908
印刷製本 (株)北斗プリント社

『総人・人環フォーラム』の趣旨

21世紀における人類の生存は、現在直面している地球をとりまく環境の危機をどのように乗り越え、地球上の多様な諸民族の持続的な共存の道をどのように見だしてゆくことができるかにかかっている、といえましょう。「自然と人間の共生」という理念のもとに平成3年に設立された京都大学大学院人間・環境学研究科(略称「人環」)は、こうした21世紀における人間と環境との新しいかかわりを模索してゆくため、「総人・人環フォーラム」を発刊することになりました。本誌では、人間と環境の相互関係にふれる第一線の研究のうえに立って、精神的豊かさをもった広い視野から、21世紀における人類の課題を問いつづけてゆきたいと考えています。

HUMAN AND ENVIRONMENTAL FORUM

総人・人環フォーラム 40号

連載 人間・環境学への招待（4）「文明の歴史」

鵜飼大介、合田昌史、武田宙也、戸田剛文、中嶋節子

